

中学生へのドメスティック・バイオレンス
予防啓発に関する研究

平成 26 年度

須賀 朋子

筑波大学大学院人間総合科学研究科
ヒューマン・ケア科学専攻
社会精神保健学分野

目次

	頁
第1章 緒言 -----	1
第2章 文献展望 -----	8
第3章 目的と構成 -----	15
第4章 中学生・高校生のDVについての知識と考え方の実態 (研究1)--	16
第1節 目的 -----	16
第2節 方法 -----	16
第3節 結果 -----	17
第4節 考察 -----	20
第5節 小括 -----	21
第5章 教員のDVの知識 (研究2) -----	23
第1節 目的 -----	23
第2節 方法 -----	23
第3節 結果 -----	25
第4節 考察 -----	28
第5節 小括 -----	30
第6章 中学生のためのDV予防啓発プログラム開発と効果研究 (研究3)--	31
第1節 目的 -----	31
第2節 方法 -----	31
第3節 結果 -----	36
第4節 考察 -----	41
第5節 小括 -----	42
第7章 中学生のDV予防啓発プログラムの受講後の意見 -プログラム後、1か月後の質問紙調査から- (研究4) ----	43
第1節 目的 -----	43
第2節 方法 -----	43
第3節 結果 -----	45
第4節 考察 -----	46
第5節 小括 -----	47
第8章 総合考察 -----	48

第9章 研究の限界と課題	52
第10章 結論	53
引用文献	54
表・図	59
資料1 DV 予防啓発プログラム(中学生編)	
資料2 教員用マニュアル DV 予防啓発プログラム (中学生編)	
資料3 中学生・高校生への DV 予防に関するアンケート調査用紙	
資料4 大人への DV 予防に関するアンケート調査用紙	
謝辞	
本研究に至る業績一覧	

第1章

緒言

第1節 はじめに

「ドメスティック・バイオレンス」とは英語の「domestic violence」のことで、略して「DV」と呼んでいる。ドメスティック・バイオレンス（以下、DV）とは「配偶者や恋人など親密な関係にある、またはあった者から振るわれる暴力⁵¹⁾」と内閣府は定義し、暴力のなかの1つである(図 1-1)。DV が世界的な注目を集めるようになったのは1993年12月に国際連合総会で「女性に対する暴力撤廃宣言」が採択されてからである³⁹⁾。その後、1995年の第4回国連世界女性会議（北京）において、「女性に対する暴力」が行動綱領の12の重大問題領域の1つとして盛り込まれた⁴⁶⁾。このような世界の動きを受け、日本では2001年10月に日本で初めて「配偶者からの暴力防止及び被害者の保護のための施策に関する基本的な方針」⁵⁷⁾（以下、DV防止法）が施行されこの13年間でDVという言葉は広く知られるようになった。

第2節 DVとデートDV

1996年に米国のHale-Carlsson et al.²⁸⁾は「DVは医学、社会学、公衆衛生学の分野で『パートナー暴力』、『配偶者虐待』と呼ばれているが、現在または過去に親密な関係にあったパートナーに対して、身体的、性的、心理的攻撃で威圧的に支配することである」と述べている。2000年にはRennison et al.⁶⁴⁾が大多数のケースで男性が加害者で、被害者は女性であることを指摘している。2003年にはWHO(World Health Organization)も世界中で被害者の多くは女性で、加害者は男性であることを問題視し始めている。なぜなら男性に比べて女性はDV被害が健康、教育、雇用に深刻な害を及ぼすとされている。また、被害を受ける要因は国の歴史、政策、文化、経済状況によって異なってくるので、DV被害を受ける原因は特定できないと述べている。しかしDVや性虐待で逮捕された男性の調査では、子ども時代に虐待を受けた経験があると答えた男性が、虐待を受けたことのない男性の3-4倍にのぼることを述べている。また、反社会的な性格(衝動的で共感性が欠けている)人が、加害者になりやすいことも報告している⁸⁷⁾。2009年にUthma et al.⁸⁰⁾は暴力を受容してしまうことの根底には、抑圧された性別役割、支配的な家父長制の観念が原因となっていることを研究から明らかにしている。さらに一旦、暴力被害を受けた被害者は、その後に更に被害を受けやすくなる傾向があることを述べている。また

被害を受けたことによりアルコールや煙草などの物質に依存してしまう傾向にあることを警告している。中国の Chan⁹⁾ は「成人してから虐待や暴力を受けたことがある」と回答した女性は、将来的に DV 被害を受ける傾向が高いとしている。また Chan⁹⁾ はインドの女性は虐待や暴力を受けた経験がある女性は、無い女性に比べて 3.8 倍の DV 被害を受けていることを明らかにしている。一方、加害をはじめると、その後もこれを継続することが指摘されている。2008 年の Ackerson¹⁾ はインドで調査を行い、DV 被害は学歴が原因でおこることも多く、特に女性の方が高学歴であると女性の自尊心を奪うために男性が暴力で女性を支配しようとする割合が高まる比率があることを説明している。

WHO は Dating Violence(以下、デート DV)とは、恋人関係にあるときに振るわれる身体的、性的、心理的暴力のことで、主に思春期、若者の間でおこるものであると説明している⁸⁷⁾。デート DV とは、海外で言われている Dating Violence のことで、山口⁸⁹⁾ が邦訳をしたときに「デート DV」と命名した。2003 年に Smith et al.⁶⁶⁾ は、デート DV はのちに DV に繋がっていくことが非常に多いことを指摘している。さらに 2009 年に Wolfe et al.⁸⁴⁾ がデート DV は、傷害事件や薬物使用、自殺未遂につながる重大な問題であると述べている。またデート DV を予防していけば、のちの DV をかなりの割合で防ぐことができるのではないかと考察している。

日本では内閣府⁵¹⁾の定義に基づいて DV やデート DV の研究が進められ、DV、デート DV のなかでおきる暴力の形態を 4 つに大別している。

1. 身体的暴力

殴ったり蹴ったりするなど、直接何らかの有形力を持つもので「平手でうつ、足で蹴る、身体で傷つける可能性のある物で殴る、拳骨で殴る、刃物などの凶器を突きつける、髪をひっぱって引きずり回す、首をしめる、腕をねじる、物を投げつける」などが挙げられている。

2. 精神的暴力

心無い言動により、相手の心を傷つけるもので、精神的な暴力については、その結果 PTSD(外傷後ストレス障害)に至ることもある。「大声で怒鳴る、『誰のおかげで生活できているんだ』などと言う、実家や友人と付き合うのを制限したり、メール、電話、手紙を細かくチェックしたりする、人の前でバカにしたり、命令するような口調でものを言ったりする、大切にしているものを壊したり捨てたりする、子供に危害を加えると言って脅す、殴るそぶりや物を投げつけるふりをして脅かす」などが挙げられている。

3. 性的暴力

嫌がっているのに性的行為を強要する、中絶を強要する、避妊に協力しない

といったもの。例として「見たくないのにポルノビデオやポルノ雑誌をみせる、嫌がっているのに性行為を強要する」などが挙げられている。

4. 経済的暴力

経済力を失わせ、社会から孤立するように仕向けるといったもの。「生活費を渡さない、外で働くなと言う、仕事を辞めさせる、いつもおごらせる」が挙げられている。

1990年代前半までは上記のような暴力が夫婦間で起こっていたとしても、「単なる夫婦げんか」として軽視されていた。しかし近年、医療、司法でもDVの問題が取り上げられるようになっており、DVは人間関係の複雑さを炙り出すものであることの指摘として、中谷ら⁵⁹⁾がDV被害を受けていた女性が恐怖から抜け出す手段の1つとしてDV加害者の夫を殺害して自身が加害者に転じてしまった事例を発表している。このようにDVは暴力の複雑な連鎖が根源になっていく恐ろしい問題である。被害者や支援者の叫びから、国や地方公共団体でもDVの問題に取り組むようになり実態調査に乗り出している。

第3節 日本の主なDVの調査

1. 日本で初めての調査

1995年の第4回国連世界女性会議（北京）を受けて、1998年5月に東京都生活文化局が「女性に対する暴力調査報告書」を公表した⁷⁷⁾。波田³¹⁾はこの報告書から東京都全域の20歳から64歳までの女性の3%~5%が深刻な暴力を受けていると推測をした。また被害女性のほとんどは公的機関に援助を求めていること、夫からの暴力は私的に解決する問題として認識していると考察している。

2. 内閣府(旧総理府)の調査

東京都の調査を受けて総理府は第1回目の全国調査として1999年9月~10月に全国の20歳以上の男女4,500名を対象に調査を行い、3,405名(女1,773名、男1,632名)(回収率75.7%)から回答を得た。そして2000年2月に「男女間における暴力に関する調査」を公表した⁵²⁾。この調査では男性の3.4%、女性の14.1%が配偶者から深刻な暴力を受けていることが明らかとなった。

内閣府の2回目の調査は2002年10月~11月に全国の20歳以上の男女4,500名を対象に調査を行い、3,322名(女1,802名、男1,520名、回収率73.8%)から回答を得た。そして2003年4月に「配偶者等からの暴力に関する調査」を公表した⁵³⁾。この調査で配偶者や恋人から深刻な暴力を受けたことがあると回答した男性は9.3%、女性は19.1%で、1回目の調査より被害者が多く存在し

ていることが明らかとなった。

3回目の調査は2005年11月～12月に全国の20歳以上の男女4,500名を対象に調査を行い、2,888名(女1,578名、男1,310名、回収率64.2%)から回答を得た。そして2006年4月に「男女間における暴力に関する調査」を公表した⁵⁴⁾。この調査では「配偶者から」と「恋人から」の調査項目を分けて実施し、配偶者から深刻な暴力を受けたことがあると回答した男性は17.4%、女性は33.2%で、恋人からの暴力は、男性が5.2%、女性が13.5%であった。2回目の結果と比べて被害者が増え、女性の3人に1人が配偶者から暴力を受けた経験があることが明らかとなった。

4回目の調査は2008年10月～11月に全国の20歳以上の男女5,000名を対象に調査を行い、3,129名(女1,675名、男1,454名、回収率62.6%)から回答を得た。そして2009年3月に「男女間における暴力に関する調査」を公表した⁵⁵⁾。この調査で配偶者から深刻な暴力を受けたことがあると回答した男性は17.7%、女性は33.2%であった。恋人から暴力を受けたことが有ると回答した男性は4.3%、女性は13.6%で3回目の調査とほぼ同数の被害者が存在していることが明らかとなった。

5回目の調査は2011年11月～12月に全国の20歳以上の男女5,000名を対象に調査を行い、3,293名(女1,751名、男1,542名、回収率65.9%)から回答を得た。そして2012年3月に「男女間における暴力に関する調査」を公表した⁵⁶⁾。この調査で配偶者から深刻な暴力を受けたことがあると回答した男性は18.3%、女性は32.9%で、恋人から深刻な暴力を受けたことがあると回答した男性は5.8%、女性は13.4%であることが明らかとなった(図1-2)。

3. 若者層を対象としたデートDVの調査

2010年10月～12月に千葉県民共生センター¹¹⁾が千葉県内の8校の私立大学に調査票の配布及び回収を依頼し、大学生1,025名(回収率78.0%)を対象に「デートDVに関する大学生意識等調査」を実施した。千葉県の調査でデートDV被害経験があると回答した男子学生は19.2%で、女子学生も19.2%であった。また加害行為は男子学生14.3%で女子学生は14.5%であった。

2012年10月には東京都生活文化局⁷⁵⁾が都内の18歳～29歳の男女を対象として男女別に2,000人を対象としたインターネット調査「若者層における交際相手からの暴力に関する調査報告書」を実施した。公表は2013年5月で、この調査から女性42.4%、男性31.3%が1度でも交際相手から暴力を受けたことがあることが明らかとなった。

上記のように配偶者間、親密な関係にある男女間での暴力は老若を問わず存

在し、特別な人がDV被害を受けるではなく、女性の10人に1人が深刻な暴力を何度も受けている⁵⁶⁾ことが調査結果から浮彫となった。これらの調査結果を受けて日本でもDVを防止するための法律が作られ、実態調査を基に改定が行われた。第4節では日本のDV防止法の流れを概観していくことによりDVをなくしていくために必要なことを探求していく。

第4節 日本のDVに対する対策

2001年10月にDV防止法が施行され、2004年12月、2008年1月、2014年1月と3度の改正が行われた⁵⁷⁾(表1-1)。主な改正点としては、2001年の成立の時は「配偶者からの暴力」の定義が「身体的暴力のみ」であったが、2004年改正では「精神的暴力・性的暴力」も追加された。被害者が保護命令を申し立てることができる対象(第10条1項)において、2001年成立時は「配偶者に対してのみ(事実婚も含む)」であったが2004年改正には「配偶者+元配偶者(事実婚も含む)」になり、2014年改正では「配偶者+元配偶者(事実婚も含む)+生活を共にする交際相手」となった。また、2008年改正で「電話等を禁止する保護命令(第10条2項)」で具体的な禁止行為として「1.面会の禁止、2.行動の監視に関する事項を告げること、3.著しく粗野・乱暴な言葉、4.無言電話、連続しての電話・ファックス・メール、5.夜間(午後10時～午前6時)の電話・ファックス・メール、6.汚物・動物の死体等の著しく不快又は嫌悪の情を催される物の送付、7.名誉を害する事を告げること、8.性的恥辱心を害する文面・図面の送付」が示された。

加害者に対する退去命令の期間は、2001年成立時は2週間であったが2004年改正では2か月(再度の申し立ても可能)となった。

配偶者に対する接近禁止命令は、2001年成立時は「被害者のみ」であったが、2004年改正では「被害者+被害者と同居する子供」、2008年改正では「被害者+被害者と同居する子供+被害者の親族等」と改訂された。

2014年1月の3回目の改正では「配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護等に関する法律」と「等」が付け加えられた。

2014年のDV防止法の改正に伴い、「配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護等のための施策に関する基本的な方針(概要)」⁵⁸⁾が発表された。この方針の第2.12教育啓発(2)に「若者層への予防啓発」が告示され、「配偶者からの暴力の防止に資するように、学校・家庭・地域において、人権尊重の意識を高める教育啓発や男女平等の理念に基づく教育等を促進することが必要である」と記された。その原因は若者層でのデートDVが多いからである⁶⁰⁾。

これらの状況を把握するために寺島ら⁷¹⁾は、大学生を対象にDV被害を受け

でも別れない理由の検討を行った。その結果、『自分に非がある』、『好きだから』など、相手との現在の関係を重視して、別れられないことが明らかとなった」と述べている。西村ら⁶¹⁾は大学生のデートDVの研究を行うなかで束縛による「支配関係」に焦点化することの必要性に着目し「支配的恋愛関係チェックリスト」を作成している。高校生のデートDVの実態調査では、山田ら⁸⁹⁾が2,975名を対象に行い「叩かれる、蹴られる、物をなげつけられる、バカにしたり傷つくことを言われた、メールをチェックされたり、他の友人との付き合いを咎められた、性的なことを無理強いされた」のいずれか1つの暴力でも受けたことがある女子が46.8%、男子が46.5%と、ほぼ半数の高校生が被害を受けていることを報告している。さらに、高校生が被害を受けても相談しない理由は、「気にならなかった」、「相談しても無駄だと思った」などの回答が上位にあげられ、この結果から高校生は暴力への気づきが弱いことや、あきらめが根源にあると考察している。

第5節 若い世代へのDV予防啓発の必要性

先行する、配偶者、恋人間のDVの調査やデートDV被害者の数の多さから、辻ら⁷³⁾はDV被害者や加害者になる前の段階からの予防を行うことの必要性を述べている。また西村ら⁶¹⁾は教育現場で、すべての学生、生徒をデートDVの教育支援対象とし、暴力を容認しない環境を整える必要性を提案している。堤ら⁷⁷⁾は小学校の社会科の人権教育のなかでDVのことを教えることを提案し、指導計画の作成まで行ったが授業の実現にまでは到っていない。

海外ではChalk et al.⁸⁾がDV予防の研究を概観し、DVの知識の獲得と行動の変化および暴力の減少との関係の研究の必要性を提案している。Faramarzi et al.¹⁷⁾はイランのDV被害女性297人と非被害女性1,703人の、教育歴、移住地、経済状況の違いを調査したところ、女性の権利についての教育を受けていない女性ほどDV被害を受けているという結果から、若い女性に人権教育とDVの知識を教えることの大切さを指摘している。米国のHalpen et al.²⁹⁾の2001年の研究では10歳から17歳の9.0%の男女がこの1年以内に、異性から身体的な暴力を振われ、30.0%が精神的暴力を受けていることから、小学校からデートDVを予防するための学習の必要性を指摘している。2013年のExner¹⁶⁾の研究では、デートDVの被害を受けていない若者と、被害を受けた若者との比較で、デートDV被害経験のある若者は過度のアルコール飲酒、薬物、鬱、自殺念慮があることが明らかとなった。若者のデートDVの予防をしていけば、絡み合うアルコールや薬物、自殺の問題の解決にもつながると考えDV予防啓発を州の取組みとして始めている。

第1章 緒言

2014年に Foshee et al.²³⁾は11歳、12歳の時のいじめの加害生徒は、いじめ加害経験のない生徒と比べて恋愛関係を築く13歳、14歳になった時に、恋愛関係にある異性に暴力的な行為を行うことが多いことを明らかにした。これらのいじめ加害経験のある生徒の性差、人種での比較研究を行ったところ、13歳、14歳のいじめの加害経験のある男子はいじめ加害経験のある女子に比べて異性への暴力行為が有意に高かった。いじめ加害経験のある生徒の、人種（黒人、白人、その他）による違いはみられなかった。この米国の最新の研究では、12歳まではいじめとして表面化している暴力の問題が13歳を過ぎた頃から恋愛関係でおきるデートDVに移行していくと考察している。

第2章

文献展望

第1節 DV被害者の研究

WHO が世界中で被害者の多くが女性であることを指摘している⁸⁶⁾ように、被害女性の実態が研究により明らかになり始めた。2005年に中国の Wu et al.⁸⁸⁾は1,215名の流産をした女性に質問紙調査を行った結果、22.6%が夫から暴力を受けていることが調査から明らかとなった。DV被害を受けた女性は、被害を受けていない女性に比べて有意に流産の確立が高いことが示された。2010年に Fujiwara et al.²⁵⁾は、日本の婦人保護施設に避難しているDV被害女性340名に調査を行ったところ、DV被害女性のなかには子ども時代に虐待を受けた経験がある女性も多いことを指摘し、このような女性はDV被害を受けることによって子ども時代の虐待によるトラウマを悪化させることになり、解離、鬱、トラウマ症状がみられると述べている。2013年にスペインの Miranda et al.⁴⁷⁾はDV被害を受けている女性は、抑うつ症状、不安、敵意を持ちやすく、それらの精神状態が子どもに影響し、子どもが自傷行為、薬物依存などの社会的行動を悪化させることが多いと述べている。このようにDV被害は子どもにまで悪影響をもたらすことが研究により明らかにされてきている。

日本でもDVやデートDVに対する量的な調査だけでなく、その具体的な内容について被害者面接調査が行われ、その深刻さや支援に結びつくことの難しさが浮き彫りになってきた。またこれらの所見をもとにした支援に向けた研究が行われはじめている。川崎ら³⁷⁾は被害女性へのインタビュー調査から支援の提言として、DVから「逃げる決心に結びつく支援」、「逃げる時の支援」、「逃げた後の支援」の3段階を継続して行うことが必要であることを明らかにしている。泉川³⁴⁾はDV被害者への看護職の支援の在り方の研究を行った結果、被害女性は繰り返される暴力により力を奪われて、支配から命令に従うだけになり行動する力も奪われる実態が明らかになったことから、無力感の心理的構造を踏まえて看護職も支援ができるような教育プログラムの開発を提案している。増井⁴⁴⁾は、DV被害女性は一度逃げても、夫の元に戻ってしまう人が多いことから、どのような援助をすれば離別を決意することができるのかを知るために離別の過程の研究を行った。その結果、決定的な「底打ち」の実感のプロセスを経て、やっと別居に至ることを述べている。また石井ら³³⁾はDV被害を受けていることに当事者が気づくことを援助するために、2003年にDV被害者への相談場面で広く応用が可能な自記式簡易スクリーニング尺度

(DVSI: Domestic Violence Screening Inventory:)を作成し、その信頼性と妥当性を検証している。

第2節 DVが家庭内で起きているのをみて育っている子どもへの影響

米国のMcKay⁴³⁾はDV家庭における子どもが、身体的・性的虐待やネグレクトを受ける可能性は、そうでない場合より15倍にのぼることを報告している。日本では森田⁴⁸⁾が、DVは子どもにとって大切な母親が、父親から暴力を受けているという光景であり、強いショックを受け、自分自身に暴力が向かなくても、いつそうした暴力が自分に向けられるかという恐怖を感じる人が多いことを述べている。

また、Tomoda et al.⁷⁴⁾は2012年にDVを日常的に目撃した子供は、脳の視覚野の一部が委縮する傾向があると発表している。DVを目撃して育った18歳から25歳の男女22人と、目撃した経験のない同年代30人の脳を、MRIを使い比較をした。その結果、右脳の視覚野にある一部は、目撃した経験がある男女が平均で約6.1%小さかったとしている。こうしたDVによる子供のダメージを回復するための治療に関する研究もはじめられている。DVに曝された子どもへのプログラムではLieberman et al.⁴²⁾の“Don't hit my mom”というプログラムが米国で教育プログラムとして行われている。日本では、春原、森田、古市⁶⁹⁾がカナダ・オンタリオ州ロンドン市で行われているDVに曝された被害母子に同時並行的に行う心理教育的プログラムの日本版を作成し、母プログラム、子供プログラムを12回実施し9割の母親がプログラムを肯定的にとらえ6割以上の子どもに良い変化がみられたことを報告している。

第3節 DV加害者の研究

森田⁴⁹⁾は、DVは被害者の援助が最優先課題であるが、一方で加害者がそうした行為を行わないようにすることの重要性を述べるなかで、DV加害者の多くは処罰を受けても反復される場合も多いこと、こうした繰り返しの根底に、男性が女性に対して暴力を用いて支配的に振る舞うことを肯定するような歪んだ考え方があることを述べている。また、男性加害者の特徴を、1)相手を支配、2)特権的であるという思い込み、3)自己中心的、4)男尊女卑、5)パートナーを持ち物のように扱う所有意識、6)愛情と虐待の混同、7)操作性、8)言動と行動の不一致、9)責任転嫁、10)虐待の否認と矮小化、とまとめている。さらに森田⁴⁹⁾は、こうした加害につながる認識を変えるためにDV加害更生プログラムを、12回1クールをクローズド形式の小グループ(8人~12人程度)で行っている。このプログラムは試行の段階では一応の成果が確認されたが、その後、プログ

ラムを広く行う体制作りについては内閣府も法務省も消極的であり、日本では公的な枠組みを持つ加害者更生プログラムは行われておらず、プログラムが民間団体で行われているのみである。

米国では加害者更生プログラムの前後の比較を行っている研究がみられ、身体的暴力の発生頻度の低下が報告されている。プログラム直後の時点で身体的暴力が停止した割合は、Edelson et al.¹⁴⁾の調査で54.0%、Shupe et al.⁶⁴⁾の調査で60.8%、Edelson et al.¹⁵⁾で67.0%であったことを報告している。Chen et al.¹⁰⁾は、再犯記録に基づいた研究を行い、加害者更生プログラムへの参加回数が全セッションの75.0%より少なかった加害者は、75.0%以上参加をした加害者より、プログラム後に妻への暴力に関して再逮捕される確率が高いことを報告した。さらに身体的な暴力だけでなく、更生プログラム前後の加害者の心理行動上の変化を調査した研究も行われている。Buttel et al.⁷⁾は、米国アラバマ州タスカルーサ郡で逮捕された加害者に12週間にわたる週1回の認知行動療法を用いたプログラムを実施し、プログラム前後で暴力、支配、アルコール使用、薬物使用、ストレス対処能力が有意に望ましい変化を示したことを報告している。Tutty et al.⁷⁸⁾は、104人の加害者に対するプログラム効果を調査し、71人の完遂者と33人の脱落者についての分析を行った。プログラムの完遂者は身体的暴力の減少、精神的暴力の減少、心理行動的指標（社会的援助、自尊心、自覚されたストレス、配偶者への態度、感情表出、コミュニケーション）の改善と相関をしていたことを報告している。しかし精神的暴力における更生プログラムの効果は、身体的暴力への効果ほど確かではない。Edelson et al.¹⁵⁾は、身体的暴力が減少した後も、脅しなどを含む、精神的な暴力を4割前後、女性被害者に及ぼしていることを報告している。Follingstad et al.¹⁹⁾は精神的暴力に関する更生プログラムの効果は未確定な部分が多いが、精神的暴力は身体的暴力と同等の深刻な影響を被害者に与えるため、精神的暴力に効果のあるプログラムの開発の必要性も指摘している。

Babcock et al.⁵⁾は加害者更生プログラムの限界について報告をしている。更生プログラムを完遂する人においては身体的暴力の減少、精神的暴力における肯定的な効果を及ぼすという所見が多く得られているが、司法機関が更生プログラムの参加を命じた人のなかで、半数前後が脱落していることを指摘している。また、プログラム完遂直後の変化が、日常生活に戻ったときに行動変容の効果が維持されるかどうかを調査しきれていない部分を問題としている。また、Edelson et al.¹⁵⁾は加害者の効果が統計的に有意でも、被害者の実質的な恐怖心は減少していない可能性を指摘している。

さらに加害者更生プログラムの負の効果もHolzworth et al.³²⁾は指摘してい

る。第1に加害者はプログラムを受ければ被害者が戻ってくると過度に期待をしてしまうこと、第2に被害者に誤った安全な感覚をもたらすことがあり、DVのリスクを高める可能性があること、第3に重症度の低い加害者が他の重症度の高い加害者とプログラムを受けることにより、より問題のある暴力の方法や考え方を身につけてしまい、どのような方法を使えば罪に問われないのかを学習してしまう危険があること、第4にプログラム脱落者は再犯を行う人と同じくらい危険な状況を生み出すことが多いことを指摘している。

WHO⁸⁷⁾は加害者更生プログラムの重要性を指摘しながらも、子どもの時代のいじめを受けた経験や社会からの孤立経験が、後にDV、性犯罪を起こすきっかけになるため、子ども時代からのいじめ予防プログラムの重要性をしてくしている。また、学校をベースとした、ソーシャル、エモーショナルスキルの発達を援助する学習が、物質依存やDV、性暴力の潜在的な要素を予防するのではないかと提案している。

第4節 デートDVの研究

米国のWolitzky et al.⁸⁶⁾は2008年に12歳から17歳の思春期の生徒3,614名を対象にDating Violenceの全国調査を行った。その結果、深刻な被害(性暴力、身体的暴力、薬物などを使用したレイプ)を受けている女子は2.7%、男子は1.6%であることを報告している。被害を受けやすい特徴として、他の潜在的なトラウマ体験があること、生活の中のストレス因子が高いことが明らかになったことを述べている。Weisz et al.⁸⁵⁾は米国の高校生を対象に、周囲の人との関係性の持ち方の違いで、深刻なデートDV被害に巻き込まれやすくなるかどうかの研究を行った。その結果、友人や家族と相談がしやすい環境にある生徒のほうが、DV被害に巻き込まれにくいことを明らかにし、Gonzalez-Guarda et al.²⁷⁾は、米国のヒスパニック系の社会でもデートDVが問題になっていることから6歳から17歳の子供29名とその保護者29名と、その子供たちの教員16名で、ヒスパニック文化に合ったデートDVを防ぐためのロールプレイや歌のプログラムを行った。質問紙を質的に分析したところ、「健康的な関係性の持ち方の大切さ」が抽出されたと報告している。

上記の先行研究からデートDVに巻き込まれることを予防するためには、健康的な関係性の持ち方を教えることが大切であることが考えられた。そこで、次節では、海外の若者向けのDV予防の研究を概観し、「関係性」についてどのように教えているかを探求していく。

第5節 海外のDVおよびデートDV予防の研究

Cornelius et al.¹²⁾はDV予防プログラムの文献研究を行っており、DV被害に遭う前の **Primary program** と、被害後の **Secondary program** の2種類と、両方に適合するプログラムがあると述べ、カナダとアメリカでは先駆的にDV予防プログラムの効果研究をはじめていることを述べている。

カナダでは1995年にLavoie et al.⁴⁾がケベック州の高校生を対象に120～150分のデートDV予防の短期プログラムを279名(女子160名、男子119名)に実施した。さらに120～150分追加した長期プログラムを238名(女子135名、男子103名)に実施した。プログラムの内容は初期の予防プログラムでは「関係性」、「暴力の責任」等を学ぶものである。長期のプログラムにはデートDVの映画を観て、被害者と加害者に架空の手紙を書くという内容が追加された。プログラム前後の自記式質問紙でプログラムの効果を検討した。この研究の目的はプログラムによって態度と知識を変容させることであった。短期と長期のどちらのプログラムも効果が示されたが、短期プログラムの方が知識は向上率が高かった。しかし、この研究ではフォローアップをしていないためプログラムの効果が長期間に及ぼす効果はみていない。

その後2003年にWolfe et al.⁸²⁾が虐待をうけた子供(158名)を、予防プログラムの介入群と非介入群に分けて比較を行い、介入群の方が行動面や情緒面で効果があったことを報告している。さらに2006年にWolfe et al.⁸³⁾は**The Fourth R**という21セッションからなる青年期のためのデートDV、性虐待、薬物乱用の予防が含まれたプログラムを開発し、非行傾向の子供に実施し効果を明らかにした。その後Wolfe et al.⁸⁴⁾は**The Fourth R**の介入を行った学生の2年後の追跡調査を行った結果、プログラムを実施した虐待児の行動面、情緒が安定をすることを2009年に確認した。WolfeのチームであるCrooks et al.¹³⁾が2011年に中学生1,722名を介入群と非介入群に分けて**The Fourth R**を実施し、2年後の追跡調査の結果、プログラム介入群には「虐待あり」と答えた学生には、犯罪やDVを予防するための特有の効果があったことを報告している。

アメリカでは1997年にAvery-Leaf et al.⁴⁾が高校生102名を介入群、90名を非介入群で、保健の授業の中でプログラムを5回実施した。プログラムは講義形式でジェンダーの平等さへの気づき、関係性、コミュニケーション、DV相談室の説明であった。5つの尺度でプログラム前後の測定を行った結果、プログラム後は、介入群に被害から身を守る効果がみられた。翌年1998年にはFoshee et al.²⁰⁾が**The safe Dates project**プログラムを作成し、ノースカロライナ州の8、9年生1,886名を介入群と非介入群に分けて実施した。介入群は学校と地域でのプログラムの両方を実施し、非介入群は地域でのプログラムの

みを実施した。学校でのプログラムは45分の対話形式による講義10回と、デートDVについてのポスターコンテストで構成されており、地域でのプログラムはサービス（電話相談やサポートグループなど）についての説明であった。10回のプログラム後、介入群は精神的暴力、性的暴力の気づきが高まったことを報告している。2000年にFoshee et al.²¹⁾は1年後の追跡調査を発表し、態度における点で介入群が良い状態であったことを報告した。2004年にFoshee et al.²²⁾は4年後の追跡調査を行った結果、介入群は身体的、性的暴力の加害者、被害者になる確率が低くなることを明らかにした。2007年にAdler-Baeder et al.²⁾が、Pearson⁶³⁾が開発をしたLove U2プログラムをアラバマ州の高校生に実施した。8年生から12年生を対象に作成され、12セッションを各1時間で実施する構成になっている。このプログラムは健康的な関係性の選択の仕方、恋人やパートナーとはどういうものかを現実的、かつ適切に、そして新たな動機づけによる行動の変容、気づき、関係性の知識、実用的なスキルを通して能力を高めることを目的としている。2011年にはAntle et al.³⁾がケンタッキー州の9年生、260名を対象にLove U2を行い、プログラム前、プログラム後の2回、質問紙測定を行い、プログラム後に満足度、関係性の知識、自尊心のすべてが上昇したと報告をしている。

2012年にはTaylor et al.⁷¹⁾がニューヨーク市と共同で、6年生、7年生(およそ2,500人)を対象にDVとセクシャルハラスメントの予防教育を行った。プログラム前、プログラム後、6か月後の3回、質問紙測定を実施したところ、介入群に性暴力の減少効果があったことを報告している。プログラム効果を3時点で測った研究はこの研究が初めてである。しかし授業者の違いや学校の状況の違いにより効果が異なることも報告している。また、2014年にはFinkelhor et al.¹⁸⁾が米国の12歳から17歳(1,820名)を対象に「暴力全般の予防プログラム」の受講経験についての実態調査を行った。その中でデートDVに関するプログラムを受けている生徒は32.0%、過去に受けたことがある生徒は25.0%であることを報告している。

男性が加害者になってからの更生のむずかしさの背景から、米国ではMiller et al.⁴⁵⁾が、米国の男子高校生で運動部に所属している学生2,006名を対象にCBIM(Coaching Boys into Men)というコーチが選手に開かれたコミュニケーションの方法や女性に対する暴力の危険性のメッセージをミーティングのなかに60分間取り入れるプログラムを行った。介入群と非介入群を設けた結果、2回のCBIMプログラムを行った介入群に態度と男女平等の認識の面で効果がみられたことを報告している。この結果から運動部のコーチが男性の模範となってDVを予防するためのプログラムを行うことの重要性が提案されている。

第6節 日本のDV予防の研究

日本ではNPO法人が各地域の中学、高校、大学でDV予防啓発の出張授業を始めているが実証的な効果に関する研究は少ない。これまで行われているものとしては植田ら⁷⁸⁾の研究がある。これはNPO法人と共同で行った高校生へのDV予防出前授業の評価を示し、「DV予防出前授業は理解できましたか」という質問で、9割前後の高校生が「理解できた」と回答をしている。2012年に永松ら⁵⁰⁾が、中学生を対象に性感染症プログラムとDV予防を組み合わせたプログラムを実施し効果研究を行った。教育効果が持続するかを確かめるために「性感染症教育のみ実施群」と「DV予防と性感染症教育を組合せた群」で「プログラム前」と「3か月後」の2時点の比較を行っている。暴力認知と、相手を思いやることの大切さを測る項目ではDV予防も組合せた群の方が相手を思いやる意識が持続したと報告している。蓮井³⁰⁾は若者層へのDV予防は短期間で実施でき、かつ効果が持続するプログラムが必要であることを提案している。

以上のように日本ではDV予防研究はまだ始まったばかりであり実証的な手法を用いた研究はほとんどない。永松ら⁵⁰⁾の研究は実証的な研究であるが性感染症のプログラムと抱き合わせのプログラムでありDV予防に特化したプログラムの実証的な効果研究はないといえる。

第3章 目的と構成

第1節 研究の目的

DVを防ぐためには、中学生という時期からDV予防啓発を行うことが適切かつ有効であることを明らかにする。

第2節 目的を達成する手順 (図3-1)

第4章(研究1)で、DV予防啓発プログラムに盛り込む内容を検討するために中学生、高校生のDVの知識と考え方の実態を明らかにする。

第5章(研究2)で教員のDVについての認識の実態を明らかにする。中学生にDV予防啓発を行うには、教育を担う教員のDV予防に対する理解が必要であると考えられる。

第6章(研究3)では研究1で明らかとなった中学生のDVの知識と考え方の実態から、DV予防啓発プログラムの日本版を作成する。このDV予防啓発のプログラムを中学生に実施し、介入群と非介入群の違い、介入群のプログラム効果の持続性、介入群の性差比較からプログラムの介入効果を明らかにする。

第7章(研究4)では中学生にプログラムの意見を求め、生徒の主観的な評価を明らかにし、DV予防啓発プログラムを中学生がどのように受け入れたかをより具体的に明らかにする。

第8章の総合考察では、研究1から研究4で明らかになった中学生への介入効果と教員のDVについての認識や予防啓発に対する考えの結果をまとめて、学校現場へDV予防啓発の授業を導入することの可能性を考察していく。

第4章

中学生・高校生のDVについての知識と考え方の実態

研究1

第1節 目的

わが国では18歳以上や武田ら⁷⁰⁾の高校1年生のみを対象としたDVの行為に関する知識調査(メールや着信をチェックする、言うとおりにしないと脅す、無理やり性的な行為をする、殴ったり蹴ったりする、大声でどなる等)はみられる。しかし、高校生のDVにつながってしまう考え方の研究はみられない。また中学生を対象としたDVに関する調査はみられない。DV予防啓発を行うためには、中学生、高校生という若い時期の実態調査が必要であると思われる。

そこで本研究では中学生と高校生に「DVの知識と考え方」の実態調査を行い、性や学年で知識や考え方に違いがあるかを明らかにする。

第2節 方法

1. 対象 (表4-1)

2012年10月A都立中高一貫教育校で調査を行った。共学で男女の比率も均等である。対象者の内訳は、中学1年生が116名(男55、女61)、中学2年生が118名(男57、女61)、中学3年生が111名(男50、女61)、高校1年生が77名(男39、女38)、高校2年生が72名(男37、女35)、総計494名であった。

2. 手続き

プライバシーの保護に細心の注意を払うために質問紙を1枚ずつ封筒に入れて生徒に配布した。2012年10月21日の朝学活の時間に各クラスの担任教師に配布を依頼した。無記名で、個々に封筒に入れて配布をしてもらった。質問に答えるか否かは、個人で決めて良いこと、参加を辞退したことにより不利益を被ることがないこと、プライバシーの保護は守られることを質問紙表紙に明記されたものを生徒に各自読んでもらった。なお、質問に回答し提出を持って、研究協力に同意することとみなすことを理解したうえで回答を求めた。質問紙の記入時間は10分以内とした。質問紙は各クラスの担任から授業者が質問紙回

収袋を受け取りその結果を分析した。

3. 質問紙の内容 (表4-2)

「DVの知識」をQ1とQ2で、Q3では「家族親族内での暴力の見聞の有無」の回答を求めた。Q1、Q2は4件法でいずれか1つに回答を求め、「あてはまる4点」「少しあてはまる3点」「あまりあてはまらない2点」「あてはまらない1点」とした。Q3は[有・無]の2件法とした。

「DVにつながる考え方」(表4-3)は、カナダのBancroft⁶⁾の「DV加害者の考え方」の章を参考にしながら作成をした。4件法で質問を行い、いずれか1つに回答を求めた。順序尺度項目を間隔尺度項目として扱い「そう思う4点」「少しそう思う3点」「あまりそう思わない2点」「そう思わない1点」とした。
*の逆転項目は配点を逆にした。

4. データの分析

「DVの知識」については人数の割合は記述統計で確かめ、性差の比較はMann-Whitney U検定、学年差の比較はKruskal-Wallis検定を行い、その後、多重比較(Bonferroniの調整)を行った。

「DVにつながる考え方」では内的構造を明らかにするために因子分析を行った。因子内の性差、学年差比較は2要因分散分析を行った。なお解析はIBM SPSS 22.0を使用した。

5. 倫理的配慮

研究を依頼する際に研究校の所属長に趣旨、質問紙の内容についてすべて説明を行い書面で同意を得た。対象生徒には質問紙に答えるか否かは自分の意思で決めて良いことを紙面表紙に明記した。提供されたデータは研究目的以外には使用しないことを質問紙に明記した。

本研究は筑波大学医学医療系医の倫理委員会の承認を得て(第684号)実施をした。

第3節 結果

1. 「DVの知識」の性差と学年差の回答分布

「Q1.DVという言葉は知っている」、「Q2.DVとはどういうものなのか知っ

ている」の中学1年生から高校2年生まで（ $n=494$ ）の性差と学年差を回答分布で示した(図4-1)(図4-2)(図4-3)(図4-4)。

2. 「DVの知識」に関する性差と学年差 (表4-4)

「Q1.DVという言葉は知っている」、「Q2.DVとはどういうものなのか知っている」という質問において Mann-Whitney U 検定を行ったところ、Q1もQ2も性で有意差はみられなかった。学年差は Kruskal-Wallis 検定を行ったところ、「Q1.DVという言葉は知っている」も「Q2.DVとはどういうものなのか知っている」も有意差がみられた(Q1、 $p<.001$)、(Q2、 $p<.001$)。そこで3学年間の有意差を検定するために多重比較をおこなった。その際 Bonferroni の調整に基づき有意水準5%を3分の1とした1.67%を有意水準として採用した。Q1は中学1年生が他のすべての学年と比べて有意に低かった。Q2では中学2年生は中学1年生に比べると有意に高いが、中学3年生、高校1年生、高校2年生に比べると有意に低かった。

3. 身近(家族、親族)での暴力やDVの見聞(表4-5)

暴力やDVの見聞の有・無では、「有」と答えた生徒が中学生では7.0%、高校生では10.3%、総計7.6%という結果であった。なお、無回答は81名であった。

4. 中学生の「DVにつながる考え方」の因子分析 (表4-6)

「DVにつながる考え方」について因子分析を行った。項目10.に天井効果があったため削除をした。残りの9項目について因子分析(主因子法、プロマックス回転)を行った。項目6.は因子負荷量が0.35以下であったため削除をした。また項目1.2.は因子構成が2項目のため削除をした。4項目を外し、再度分析したところ、2因子が抽出された(固有値1以上の基準を用いた)。累積寄与率は49.45%、因子間相関は-.12であった。

第1因子は「男性は女性を常にリードするべきだ」、「好きな人には嫌われないので意見を合わせるほうが良い」、「好きなら何があっても相手を最優先するのは普通だ」の3項目から成り立っていた。第1因子は相手との関係性に対する認知の項目を中心に構成されているため『関係性』と命名した。第2因子は「ひどい言葉や大声で怒鳴る事も暴力である」、「相手を脅すために物を投

げたりわざと大きな音をたてるのは暴力だ」、「自分の考えを押し付けたり無理じいするのは暴力だ」の3項目で成り立っていた。脅威を与える行為が暴力であるか否かを尋ねている項目を中心に構成されているため『威圧行為』と命名した。

各因子について α 係数を算出したところ、第1因子は0.71、第2因子は0.76で内的整合性はそれぞれ良好と判断した。尚、2因子共に α 係数が高いことが確認されたため、単純加算をして、平均値、標準偏差を算出した。最大値は12、最小値は3で、平均値が高いほど、第1因子は健康的な「関係性」を認識している。第2因子は平均値が高いほど「威圧行為」が暴力であることを認識していることを示す。

5. 中学生の「DVにつながる考え方」因子の性差・学年差比較 (表4-7)

因子分析で抽出された関係性因子(以下、関係性)、威圧行為因子(以下、威圧行為)の性差・学年差の比較を行った(2要因分散分析)。関係性、威圧行為共に、性差・学年差の交互作用はみられなかった。主効果検定を行ったところ、性差で有意差がみられた[関係性 $F(1,492)=6.68, p<.05$]、[威圧行為 ($F(1,492)=14.00, p<.001$)]。この結果から支配性を伴った「関係性」や相手に脅威を与える「威圧行為」において、女子の方が男子に比べて正しい認識を持ち得ていることが明らかとなった。しかし学年差においては関係性も威圧行為も有意差はみられなかった[関係性 ($F(4,492)=1.18, n.s.$)]、[威圧行為 ($F(4,492)=1.98, n.s.$)]。両因子ともに3項目から構成され、「そう思う4点」、「少しそう思う3点」、「あまりそう思わない2点」、「そう思わない1点」で平均値を算出しているため、3項目すべてが2点以下に該当すると思われる得点である「あまりそう思わない傾向」の平均値6.00以下は関係性の認識も威圧行為の認識も低い。4点が1つでも入る、平均値10.00以上は関係性の認識も威圧行為の認識も高いとする。その間の中程度とする。関係性、威圧行為の両因子ともに、平均値6.00以下の低い学年は、男女ともにみられなかった。

6. 身近(家族、親族)での暴力やDVの見聞と関係性、威圧行為の関連 (表4-8)

身近(家族、親族)での暴力の見聞の有・無で、関係性や威圧行為の得点に違いがあるかを調べるためにt検定を行った。見聞の有が31名、無が382名で、無回答が81名であった。その結果、関係性は($t(412)=-.31, n.s.$)、威圧行為は

($t(412)=-.224, n.s.$)で、身近(家族、親族)での暴力の見聞の[有・無]で、支配を伴った関係性の認識、脅威を与える威圧行為に有意差はみられなかった。

第4節 考察

本研究で得られたDVの知識に関する調査ではDVとはどういうものなのか知っている傾向にある男子は64.8%で女子は63.3%と性差はみられなかった。しかし学年間ではDVとはどういうものなのか知っている傾向にある中学1年生が31.0%、中学2年生55.9%、中学3年生は81.0%、高校1年生は81.9%、高校2年生は84.7%と学年差がみられた。中学1年生と中学2年生は他の学年と有意差がみられ、中学3年生、高校1年生、高校2年生は知識がほぼ同じであった。この結果から中学生、高校生は知識において性差はないが、学年間では差がみられた。

「DVにつながる考え方」を因子分析したところ、中学生・高校生から関係性、威圧行為の2因子が抽出された。関係性も威圧行為も性による有意差がみられたことから考え方には性差があると言える。関係性は好きな相手を常に優先することや、男性は女性をリードすることを意味している。このような考え方を男子が女子より無意識に自明のものとしている傾向が高いことが調査から明らかとなった。しかし関係性の平均値は中学2年 8.60 ± 1.87 、中学3年の男子が 8.60 ± 2.34 と最少得点であるが、この得点は決して低くなく中程度の認識であることもみおとせない。威圧行為は相手に脅威を与えることを意味しているが、男子は女子に比べてこのような行為を暴力であると認識していない状況が明らかになった。これはスペインにおける Garaigordobil et al.²⁶⁾による15-16歳の285名を対象にしたDV予防を行うための事前調査の結果、男子が女子と比べて暴力の容認、模倣、攻撃性、支配性が有意に高かったという報告と一致している。威圧行為の平均値も中学1年の男子が 8.76 ± 1.98 と最少得点であるが、この得点も中程度の認識があることを示している。女子の中学2年、3年、高校1年が平均値10.00以上と、威圧行為に気づく認識が高いことが調査から明らかになったと言えるであろう。

海外で行っているプログラムの先行研究を概観したところ米国では Miller et al.⁴⁵⁾が男子高校生で運動部に所属している学生を対象としたCBIMプログラムを行い、男子の意識に効果があったことを報告している。米国の Antle et al.³⁾は Love U2 という健康的な関係性をベースとした暴力・DV予防プログラ

ムを非行傾向にある中学生・高校生に実施し効果があったことを報告している。その中で関係性について生徒たちに教えないと、ちょっとしたことが大きな暴力に繋がってしまうことを指摘している。本研究と先行研究から暴力やDVの知識だけではなくDVについての考え方、特に適切な関係性のあり方について教えていくことが必要であると言えるだろう。

身近（家族・親族）での暴力の見聞があった生徒の割合が7.6%という数字は低いようであるが見過ごすことはできない。Kuhlman et al.³⁸⁾はDVを見て育った子供は心身共に弱くなる傾向にあり、胃腸、喘息、精神的な病気になることが多いことを指摘している。暴力に曝されると身体的にも精神的にもリスクが高まってしまうことから、生徒の側から「身近（家族・親族）での暴力の見聞がある」という申告は重大なことであり、この7.6%の生徒たちのケアを考えていく必要があると思われる。また今回の調査では暴力の見聞の[有・無]で、「DVにつながる考え方」の下位尺度である関係性と威圧行為には差がみられなかったが、暴力を見聞している生徒は暴力を学習している可能性も考えられる。暴力を振ってしまっていることに気付いている生徒に対して、できるだけ早く支えてくれる人を見つける方法を教える必要があると思われる。また暴力をどのように受け止めて考えた方が良いかを援助する方法を開発する必要があると思われる。

本研究の中学生・高校生へのDVについての知識と考え方の実態調査から関係性や威圧行為に対する考え方は、学年による差がみられなかったことから、プログラム介入などを行わないと考え方は変化しないことが考えられた。そこで、どの時点からプログラム介入を行うのが良いかを、本研究の結果と、13歳か14歳になった時に恋愛関係にある異性に暴力的な行為を行うことが多いというFoshee et al.²³⁾の結果と合わせて考えることとした。異性関係を意識しはじめ、DVの知識が少ない中学生のうちからDV予防啓発の介入を行うのが有効であるという考察をした。

第5節 小括

本研究から明らかになったことは、

1. DVの知識において性差はみられなかったが、学年による差はみられ、中学3年生までは学年があがるにつれて知識が上昇していた。
2. 中学生・高校生はDVにつながる考え方の要因として、支配性を持った

関係性と、脅威を与える威圧行為という問題因子を持っている。関係性も威圧行為も性による差はみられたが、学年による差はみられなかった。

3. 1. と 2. の結果から DV につながる考え方を変化させていくためには、知識が少ない中学生のうちから予防のための介入を行うことが有効であると考察をした。

第5章

教員のDVについての認識

研究2

第1節 目的

研究1では生徒（中学生・高校生）のDVの知識、DVにつながる考え方の実態調査を行い、思春期、特に中学生においてDV予防を行うことの必要性を確かめることができた。そこで学校で予防啓発を行ううえで、その提供側となる学校の教師の予防啓発に対する知識や、その認識について明らかにすることが必要であると考えた。

本研究では生徒を指導している教員（小学校・中学校・高校・特別支援学校）のDVの知識、考え、予防への意見が、教員のDV被害経験、学習経験の違いでどのように違うかを明らかにする。

第2節 方法

1. 対象者と手続き (表5-1) (表5-2)

2013年1月から9月に教員（小学校、中学校、高校、特別支援学校）244名を対象として機縁法でDV予防に関する横断的質問紙調査をおこなった。東京都内と茨城県内で実施した免許更新研修会場に訪れた教員にロビーで主旨を説明の上、研究に同意をした教員に手渡しで質問紙を1枚ずつ配布した。無記名で封筒に入れて回収、または返信用封筒（個人が特定できないように無記名）による郵送法で回収をした。回収率は69.7%（配布数350部、回収数244部）であった。対象者の内訳は小学校90名、中学校77名、高校34名、特別支援学校43名で、男性79名、女性165名であった。年代は20代が15名（男5、女10）、30代は66名（男29、女37）で、40代は94名（男28、女66）、50代以上は69名（男17、女52）であった。

2. 質問紙の内容

1) DVに関することの経験 (表5-3)

DV被害経験、DVに関する授業や講習を受けた経験、DVの勉強（本など）の経験を[有・無]の2件法で回答を求めた。

2) DVの知識 (表5-4)

DVの知識では、「DVという言葉を知っている」、「DVとはどういうものなのか知っている」の質問は4件法で「あてはまる」、「少しあてはまる」、「あまりあてはまらない」、「あてはまらない」のなかから、いずれか1つに回答を求めた。

3) DVの特徴に関する理解 (表5-5)

DVの特徴に関する理解では、Bancroft⁶⁾が指摘する誤解されやすいDVの認識の解説を参考にして、7項目の質問を、須賀らで作成をした⁶⁸⁾。「DVは相手とのケンカが原因でおこるものではないこと、女性から男性への暴力もDVであること、DVは恋人同士の間でもおこること、暴力という方法を選んでいること、本質は相手を支配すること、誰でも被害者になる可能性があること、加害者は謝っても再び暴力を振ることが多いこと」を盛り込んだ。

4) DV予防についての意見 (表5-6)

DV予防についての意見を求めた。内容は「DV予防の授業を中学生や高校生の時に受けてみたかった」、「DV予防を中学や高校の授業の中で実施した方が良い」の2項目の回答を求めた。

なお、表5-5、表5-6の質問は4件法で「そう思う」「少しそう思う」「あまりそう思わない」「そう思わない」でいずれか1つに回答を求めた。

5) DVにつながる考え方 (表5-7)

研究1で作成をしたDVにつながる考え方の質問紙を使用した。

なお、表5-7の質問は4件法でいずれか1つに回答を求め、順序尺度項目を間隔尺度項目として扱い「そう思う4点」「少しそう思う3点」「あまりそう思わない2点」「そう思わない1点」とした。

3. データの分析

DVに関することの経験は人数とその割合を示した。DVの知識、DVの特徴に関する理解、DV予防についての意見の項目においても人数とその割合を示し、各項目の性差と被害経験がある教員とない教員の比較、授業や講習を受けた経験の有無による比較、勉強(本など)の経験の有無による比較はMann-Whitney U検定を行った。

DVにつながる考え方は因子分析と信頼性の確認を行った。抽出された因子の性差と被害経験がある教員とない教員の比較、授業や講習を受けた経験の有無による比較、勉強(本など)の経験の有無による比較は t 検定を行った。

解析は IBM SPSS 22.0 を使用した。

4. 倫理的配慮

研究を依頼する際には手渡しで行った。質問紙表紙で研究の趣旨の説明を行い、質問紙に答えるか否かは自分の意思で決めて良いことを明記した。参加を辞退したことにより不利益を被ることのないこと、プライバシーの保護に細心の注意を払い無記名で封筒に入れて提出すること、提供されたデータは研究目的以外には使用しないことを明記した。本研究は筑波大学医学医療系医の倫理委員会の承認(第731号)を得て実施をした。

第3節 結果

1. 教員の平均年齢

教員 244 名の平均年齢値は 39.4 ± 1.0 歳であった。

2. DVに関する経験 (表 5-8)

DV被害経験が有と回答した教員は 23 名で 8.0%、無 221 名で 92.0%であった。DVの授業や講習を受けた経験が有の教員は 72 名で 28.8%、無 172 名で 71.2%であった。本などでの勉強の経験が有の教員は 85 名で 34.0%、無の教員は 159 名で 66.0%であった。

3. 教員のDVの知識

「DVという言葉を知っている」では男女の教員の性差、DV被害経験の有無、勉強(本などで)の有無で有意差がみられなかったが、講習や授業を受けた経験の有無では有意差がみられた($p < .05$) (図 5-1)。「DVとはどういうものなのか知っている」は男女の教員の性差、DV被害経験の有無で有意差がみられなかったが、講習や授業を受けた経験の有無($p < .01$)、勉強(本などで)の有無($p < .05$)で有意差がみられた(図 5-2)。

4. 教員のDVの特徴に関する理解

「1.DVは相手との喧嘩が原因でおこる」(図 5-3)という項目は「そう思わない」即ち、DVは加害者による一方的で支配的な考えによって生じるものであり、普通の喧嘩とは異なると捉えることが正解と想定されている。この質問

に関する回答は男女間に有意差があり、女性の方が正しい認識を持っていた (Mann-Whitney U 検定 $p<.01$)。被害経験の有無の差、講習や授業を受けたことによる差、勉強の経験差では有意差はみられなかった。「2.女性から男性への暴力はDVではない」(図 5-4)では、これを肯定する度合いを示す得点が男性教員より女性教員の方が有意に低く (Mann-Whitney U 検定, $p<.05$)、女性の方が正しい認識を持っていた。講習や授業経験を受けた経験がある教員が、ない教員に比べて有意に高く女性からの暴力もDVであるという正しい認識をもてていて (Mann-Whitney U 検定, $p<.05$)、本などでの勉強経験がある教員が、ない教員に比べて有意に高く女性からの暴力もDVであるという正しい認識をもてていた (Mann-Whitney U 検定, $p<.05$)。「3.DVは恋人同士の間でも起こる」(図 5-5)では女性教員が男性教員に比べて恋人同士の間でも起こるという正しい認識を持てていて (Mann-Whitney U 検定, $p<.05$)、講習や授業経験を受けた経験がある教員が、ない教員に比べて有意に正しい認識をもてていた (Mann-Whitney U 検定, $p<.01$)。本などでの勉強の有無では、勉強経験のある教員が、ない教員に比べて有意に高く恋人同士の間でも起こるという正しい認識をもてていた (Mann-Whitney U 検定, $p<.05$)。「4.DVは怒りで衝動的に起こるものではなく暴力という方法を選んでいる」(図 5-6)では、講習や授業を受けた経験のある教員が、ない教員に比べて有意に高く正しい認識をもてていて (Mann-Whitney U 検定, $p<.05$)、本などでの勉強のある教員が、ない教員に比べて有意に高く正しい認識をもてていた (Mann-Whitney U 検定, $p<.01$)。「5.DVの本質は相手を支配することである」(図 5-7)では女性教員が男性教員に比べて有意に高く正しい認識をもてていて (Mann-Whitney U 検定, $p<.05$)、本などでの勉強の経験がある教員が、ない教員に比べて有意に高く正しい認識をもてていた (Mann-Whitney U 検定, $p<.001$)。「6.DV被害は身近で誰にでも起こりうる事である」(図 5-8)では被害経験のある教員が、ない教員に比べて正しい認識をもてていて (Mann-Whitney U 検定, $p<.01$)、本などでの勉強経験のある教員が、ない教員に比べて認識が有意に高かった (Mann-Whitney U 検定, $p<.05$)。「5.DV加害者は暴力を振ったあと謝ることもあるが、再び暴力を振ることが多い」(図 5-9)では女性教員が男性教員に比べて正しい認識をもてていて (Mann-Whitney U 検定, $p<.001$)、本などでの勉強のある教員が、ない教員に比べて有意に正しい認識をもてていた (Mann-Whitney U 検定, $p<.05$)。

5. 教員のDV予防についての意見

「DV予防の授業を中学生・高校生の時、受けてみたかった」(図 5-10)では女性教員の方が男性教員に比べて、この質問内容を肯定する度合いが有意に高

く(Mann-Whitney U 検定, $p<.05$)、被害経験のある教員とない教員の比較ではある教員の方が質問内容を肯定する度合いが有意に高く(Mann-Whitney U 検定, $p<.01$)、講習や授業を受けた経験のある教員の方が、ない教員に比べて質問内容を肯定する度合いが有意に高かった(Mann-Whitney U 検定, $p<.05$)。本などでの勉強の有無ではある教員の方が、ない教員に比べて質問内容を肯定する度合いが有意に高かった(Mann-Whitney U 検定, $p<.01$)。「DV 予防の授業を中学や高校の授業で実施した方がよい」(図 5-11)では、被害経験のある教員の方が、ない教員に比べてこの質問内容を肯定する度合いが高く(Mann-Whitney U 検定, $p<.05$)、講習や授業を受けた経験のある教員の方が、ない教員に比べて質問内容を肯定する度合いが有意に高かった(Mann-Whitney U 検定, $p<.05$)。本などでの勉強のある教員の方がない教員に比べて質問内容を肯定する度合いが有意に高かった(Mann-Whitney U 検定, $p<.01$)。

6. 教員の「DVにつながる認識」の因子分析 (表 5-9)

教員 244 名の「DVにつながる考え方」の因子分析と信頼性の確認を行った。項目 10.に天井効果があったため削除をした。残りの 9 項目について因子分析(主因子法、プロマックス回転)を行った。項目 1.2.は因子構成が 2 項目のため削除をした。3 項目を外し、再度分析を行ったところ 2 因子が抽出された(固有値 1 以上の基準を用いた)。累積寄与率は 68.29%、因子間相関は.043 であった。

第 1 因子は「好きな相手には『いつも 2 人だけでいよう』と言われてたら従うべきだ」、「男性は女性を常にリードするべきだ」、「好きなら何があっても相手を最優先するのは普通だ」、「好きな人には嫌われたくないので意見を合わせるほうが良い」の 4 項目から成り立っていた。関係性の持ち方の項目を中心に構成されているため『関係性』と命名した。第 2 因子は「ひどい言葉や大声で怒鳴ることも暴力である」、「相手を脅すために物を投げたりわざと大きな音をたてるのは暴力だ」、「自分の考えを押し付けたり無理じいするのは暴力だ」の 3 項目で成り立っていた。脅威を与える行為が暴力であるか否かを尋ねている項目を中心に構成されているため『威圧行為』と命名した。

各因子について α 係数を算出したところ、第 1 因子は 0.77、第 2 因子は 0.88 で内的整合性はそれぞれ良好と判断した。なお 2 因子共に α 係数が一様であることが確認されたため、単純加算をして平均値、標準偏差を算出した。

第 1 因子の「関係性因子 (以下、関係性)」は 4 項目であるため平均値の得点範囲は最小値 4、最大値 16 であった。第 2 因子の「威圧行為因子 (以下、威圧行為)」は 3 項目であるため平均値の得点範囲は最小値 3、最大値 12 であっ

た。第1因子の関係性は平均値が高いほど、支配を伴った関係性が、問題があることを認識している。第2因子の威圧行為は平均値が高いほど、相手に脅威を与えることが暴力であることを認識している。

8. 教員のDVにつながる考え方の因子得点とDVに関することの経験の比較 (表5-10)

因子分析から得られた関係性と威圧行為を性差、被害経験の有無、DVの講習や授業を受けた経験の有無、DVの勉強(本など)での経験の有無の差においてt検定を行った。

関係性は、教員の性差では女性教員の考え方が高く($p<.01$)、講習や授業を受けた経験の有無ではある教員が、ない教員に比べて考え方が高く($p<.01$)、本などでの勉強の有無ではある教員が、ない教員に比べて考え方が高かった($p<.01$)。

威圧行為においては、教員の性差、被害経験の有無、講習や授業を受けた経験の有無、勉強(本など)での経験の有無で有意な差がみられた項目はみられなかった。

関係性は4項目から構成され、「そう思う4点」、「少しそう思う3点」、「あまりそう思わない2点」、「そう思わない1点」で平均値を算出しているため、4項目すべてが2点以下に該当すると思われる得点である「あまりそう思わない傾向」の平均値8.00以下は関係性の認識が低い。4点が1つでも入る平均値13.00以上は関係性の認識が高いとする。その間は中程度とする。そこで、性差、DV被害経験の有無、DVの講習や授業を受けた経験、DVの本などでの勉強の有無のすべての項目において平均値が13.00以上であったため関係性の認識は高いことが明らかとなった。

威圧行為は3項目から構成されているため3項目すべてが2点以下に該当すると思われる得点である「あまりそう思わない傾向」である平均値6.00以下は威圧行為の認識が低い。4点が1つでも入る平均値10.00以上は威圧行為の認識が高いとする。その間は中程度とする。そこで、性差、DV被害経験の有無、DVの講習や授業を受けた経験、DVの本などでの勉強の有無のすべての項目において平均値が10.00以上であったため威圧行為の認識は高いことが明らかとなった。

第4節 考察

本研究では教員244名のDVに関することの経験、知識、特徴に関する理解、予防についての意見、DVにつながる考え方の認識の調査を行った。244名の教員のなかにも被害経験のある教員が8.0%存在していたことは見落とせない。

また、DVの講習や授業を受けた経験のある教員は28.8%、本などで勉強をした経験がある教員は34.0%であった。都道府県が主催する教員研修のなかにDVについての研修が行われている県はみあたらないが、教員のおよそ3割がDVについての学習経験があることが今回の調査から明らかとなった。教員研修以外のところでDVの学習の必要性を感じ、自主的に勉強している教員が存在することが考えられる。先行研究では友田ら⁷⁵⁾がDV被害者に遭遇する看護師を養成する看護大学、看護専門学校の教員を対象にDVに関する授業の実施状況の調査研究を発表しており、64.3%が「実施している」と回答したと報告している。しかし看護大学の教員ですら、「教えるほどのDVの知識がない」と答えていることも併せて報告している。海外では2012年に米国のKhubchanani et al.³⁸⁾が高校の養護教諭404名を対象に、DV予防についての調査を行っている。54.2%の養護教諭が高校生にDating Violenceの啓発をした経験があると答え、11.9%が全職員にDating Violenceの講習を行ったことがあると答えている。米国では学校内でDV予防啓発が始まっているなかで、日本でも、本研究の対象となった女性教員の90.7%、男性教員の85.9%が「DV予防を中学、高校の授業で実施した方が良い」と思っていることが明らかとなった。このことから教員もDV予防啓発を中学生、高校生に行う意識はあると思われる。教員にDV予防の研修や教材を提供していけば中学生、高校生にDV予防啓発を行うことは可能であるだろう。

「DVという言葉は知っている」、「DVとはどういうものなのか知っている」という知識に対する質問では学習経験がある教員が、ない教員に比べてDVの知識が高かった。DVについて本などで勉強をしている教員は、これをしていない教員に比べて7項目中6項目でDVの特徴を理解していた。また、講習や授業を受けた経験がある教員は、ない教員より7項目中3項目でDVの特徴を詳しく理解をしていた。本などでの勉強経験がある教員の知識の深さは自主的にDVのことを知ろうとしているからこそその結果であることが考えられる。講習や授業は受け身の状況で知識を得るため、講習のなかで話されたことのみ知識で留まっているのだろう。本などで勉強をするという自主的な姿勢が多く教員に浸透していくことが望まれるが、講習などを受けるだけでもDVの特徴を理解することの効果があることが結果から明らかになった。特に「DVは恋人同士の間でもおこり、本質は支配することで、暴力という方法を選んでいる」ことを学習経験がある教員が、ない教員に比べて知識が高かったことは生徒を教育していくうえで大切なことである。

また「DV被害は身近で誰にでもおこりうることである」という質問のみ、被害経験のある教員がない教員に比べて有意に認識していた結果は、被害を受

けてはじめて強く感じるのだろう。被害を受けていなくても「身近で誰にでも起こりうることである」という意識を多くの教員が持ち得ていくことが望まれる。

DVにつながる考え方からは、教員も関係性因子と威圧行為因子が得られた。性別、被害経験の有無、講習や授業を受けた経験の有無、本などでの勉強の有無に関わらず、関係性は平均値 13.00 以上、威圧行為は平均値 10.00 以上と、教員は認識が高いことは生徒を指導していくうえで心強い結果であったと言える。その中でも、講習や本などでの勉強経験がある教員が、ない教員に比べて関係性について正しく認識できていることは、DV の学習をすることにより教員も関係性について正しい認識を持つことができると考えられる。教員に対しても DV についての正しい認識を持てるような研修の機会を提供することが必要であることを示したといえた。

第5節 小括

本研究から明らかになったことは

1. DV の授業や地方公共団体が行っている DV についての理解を促す講習を受けた経験がある教員は 28.8%、本などの勉強経験がある教員は 34.0%で米国の *Khubchanani et al.*³⁸⁾の研究結果と比べて少なかった。
2. DV の知識と特徴を理解している教員は、本などでの勉強による経験がある教員と、ない教員の間で有意差が 7 項目中 6 項目でみられた。
3. DV 予防に関する意見では、およそ 9 割の教員が DV 予防を学校で生徒に実施することに賛成をしている。
4. DV につながる考え方から得られた関係性因子において、学習経験がある教員のほうが、ない教員に比べて関係性について正しい認識を持っているものが多かったことから、学習をすることにより教員も関係性について正しい認識を持つことができる。

第6章

中学生のためのDV予防啓発プログラム開発と効果研究

研究3

第1節 目的

研究1で明らかとなった中学生・高校生のDVの知識の実態を基に、本研究では中学生にDV予防啓発プログラムを試行し効果を明らかにする。

米国ではAntle et al.³⁾が2011年に9年生を対象にLove U2というプログラムを行い、プログラム前とプログラム後の2回、質問紙で測定を行いプログラム後に満足度、関係性の知識、自尊心のすべてが上昇したことを報告している。

また2012年にTaylor et al.⁷⁾がニューヨーク市と共同で6年生、7年生(およそ2,500人)を対象にDVとセクシャルハラスメントの予防の授業を行った。プログラム前、プログラム後、6か月後と3回質問紙を実施し効果があったことを報告している。

本研究では米国のLove U2プログラムの一部を参考にして、筆者らが日本の中学生向けのDV予防プログラムを作成し、予防啓発の授業を行う。DVの知識だけでなく中学生がDVの被害者や加害者にならないために、研究1から得られた因子である関係性と威圧行為に気づくことに効果があるかを明らかにする。

第2節 方法

1. 米国で行われているプログラム、Love U2の内容

Antle et al.³⁾が2011年に9年生を対象に実施したLove U2(表6-1)は中学生向けにPearson⁶⁾が開発したデートDV予防プログラムである。このプログラムはLesson 1からLesson 12までの12項目で構成されている。Lesson 1では自分の今までの人生のふりかえりとこれからの自分について、Lesson 2では自分の価値を確かめる。Lesson 3では自分がひきつけられる人はどういう人か、相性について、Lesson 4では健全な関係性について、Lesson 5では良くないパターンの関係性を学ぶ。Lesson 6では巻き込まれないようにするための方法、Lesson 7ではデートDVについての危険なサインと助けを求めることの大切さなどを学ぶ。Lesson 8では危険なコミュニケーションのサインと怒りのタイムアウトの取りかた、Lesson 9では問題解決の方法を身につけるためのロールプ

レイなどが行われている。Lesson 10では望まない性行為と自分のセーフティゾーンについて、Lesson 11は妊娠について、Lesson 12はメディアの問題と、まとめとなっている。

2. 予防プログラム作成における方針

予防プログラム作成の方針として

- ② Love U2 デートDV予防プログラムの一部を取り入れる（表6-2）。
- ② Walkerの暴力のサイクル⁸¹⁾を取り入れる（図6-2）。
- ③ 日本の中学生が理解をしやすいように学校現場でおきている事に近づけて作成をする。
- ④ 研究1の結果から日本の中学生、高校生は関係性と威圧行為に対する考え方を学ぶ必要性が明らかになったことから、これらの考え方に影響を与えるプログラムを作成する。
- ⑤ DVの知識だけでなくロールプレイなどの体験的な要素も盛り込む。
- ⑥ 蓮井³⁰⁾の指摘のように日本の学校現場では限られた授業時間数という制約があるため短期間で実施ができるように内容を絞る。

3. 中学生版 DV 予防啓発プログラムの開発

上記のプログラム作成の方針のとおり、Love U2の内容から参考にした部分を示すこととする（表6-2）。第4課でLove U2のLesson 8のコミュニケーションをヒントにして、身近でおきているデートDVに至る場面をストーリーテリング形式で説明した。第5課の関係性についてはLesson 4、Lesson 5の関係性の説明を参照した。第9課のDVの説明についてはLesson 7のデートDVと別れ、第11課の身近でDVが起きていたらどうすればよいかではLesson 7の早めに気づくことや助けを求めることの内容を参考にした。第14課と15課のお互いを尊重できる会話を作ろうではLesson 9のロールプレイを参考にした。

また、本プログラムは異性関係を中心にしても日本の中学校の現状に合わせてLove U2、Walkerの暴力のサイクルを組み込みつつ、「お互いの尊重があれば暴力やDVはなくなる」を主なプログラムの流れとして再構成をした。

そこで筆者らで作成をしたプログラム⁶⁷⁾は「お互いを尊重し合うプログラム人間関係を大切にするために-Domestic Violenceを知る-」と名付けた。

プログラムの内容は以下の通りで15項目から構成されている(表6-2)(資料1)(資料2)。

第1課の「人との出会いについて」では人間関係についての導入として「この人と出会えて良かったな」と思う感情も、「この人と一緒にいると疲れるな」と思う感情も自然な感情で、その感情が大切であることを話していく。

第2課の「人を尊重するってどういうこと？」で部活動の場面をとりあげて、尊重ができていない先輩の言葉と、尊重が出来ていない先輩の言葉を取りあげている。また授業中に友人から言われて嬉しかった言葉を取りあげて話し合っていく。尊重の意味を話し合う導入方式で、生徒をプログラムに引き付けていく。

第3課の「人を尊重できない人ってどういう人？」では、相手を尊重できない人は、相手の悪いところばかりを指摘して、言葉できちんと説明をしようとする人で、自分の感情を押し通すために、相手を暴力や暴言で威圧してくることを話す。

第1課から第3課までは筆者が中学校でおきる場面を想定しながら作成をしたオリジナルの部分である。

第4課では若者の間で起きているDVの例をストーリー形式で説明をしている。ストーリーは2つ用意し、1つは男子が加害者で、わざと自転車を蹴飛ばして女子を威圧する場面、もう1つは女子が加害者で、男子の携帯電話を無理やり取りあげて携帯の履歴を調べる場面で、男子も女子も、加害者にも被害者にもなりえる両側面の提示をする。Love U2のストーリー形式という手法を参考にしながらも、場面設定は日本の若者の間で起こりそうな場面を筆者がオリジナルで考えて作成をした。また女子が暴力的な行動をとる場面は海外のプログラムには導入されていないが、最近の日本では男子が被害者になることも多くなっていることと、本プログラムは男女共修で行うことから導入をした。

第5課の「関係性について」はLove U2を参考にしている。「お互いを大切にすること」とは自分らしくあって良いことと、関係性の距離の持ち方を知る必要があることを主軸としている。この関係性は異性間だけでなく、友人同士にもあてはまり、健康的な友人関係を保つためには、いつも一緒のグループで行動しなくてもよいことなどを提示することにより、中学生に関係性についての理解を深めている。異性間の不健康な関係とは2人だけの世界になって恋愛を生活の中心にしてしまうこと。外からの刺激を遮断しているので暴力などの良くないことが起きたときに助けを求めることが難しい(図6-1)。反対に健康な関係とは2人の関係以外のいろいろなつながりを持っているため、多くの人と出会うなかで自分らしさをつくっていくことができることを説明している(図6-1)。

第6課の「暴力とは何か」では暴力の本質は、相手への支配で暴力をふるう人は暴力の否定や影響を小さく言うことを教える。

第7課は「暴力の種類」で内閣府⁵¹⁾の定義では4つに分かれており、身体的暴力、性的暴力、精神的暴力、経済的暴力があり、それぞれの内容の説明を行う。

第8課ではWalkerが考案した暴力のサイクル(図6-2)の説明を行う。これは

DVのパターンの図で、「爆発期」で暴力がおこり、加害者は暴力の後は気分がスッキリするためにその後、謝ったり、急に優しくなり、これをハネムーン期と言う。しかしその行為はイライラの蓄積になり、再び暴力がおこる。暴力の質は回を重ねるごとに大きくなり、これらのサイクルは、最初は1か月に1回の暴力から、1週間に1回、1日おきなど、暴力の頻度も多くなり被害者はサイクルに飲み込まれて逃げるができなくなることを話す。

第9課では「DVとは何か」の具体的な説明を行い、配偶者や恋人など親密な関係にあるものから振るわれる暴力で、暴力を振う人は親しい関係になればなるほど感情が強くなり、暴力が重度になるという特殊性を持つ暴力であることを伝える。この課はLove U2のDVの説明を参考にしている。

第10課の「DV被害者の割合について」ではDVは身近で起こり得ることを統計から理解をしてもらうために、2012年の内閣府の調査では女性の29.1%、男性の15.6%が「1度でもひどい暴力を受けたことがある」と回答していることを伝える。

第11課の「身近でDVが起きていたらどうすればよいか」では他人事ではないこと、暴力に気づくことが大切であることを説明している。この課もLove U2のDVの説明を参考にしている。

第12課の「DV電話相談窓口の紹介」では少しでも「DVかな?」と思ったら内閣府が行っている24時間フリーダイヤルのDV相談に電話をすると近隣のDV相談窓口へ転送をしてくれることを教える。また、1か所だけでなく、複数の場所に相談して、自分の満足がいく相談先を見つけることが大切であることも伝える。

第13課の「子どもの影響について」ではDVや虐待にさらされた子どもたちは、暴力の被害者や加害者になる(虐待の連鎖)場合もあるが、暴力とは何かを知り、お互いを尊重しあえる関係を多く持つことで連鎖はなくなっていくことを強調する。連鎖をなくしていくための研究ではカナダの産婦人科医Kaufman et al.³⁶⁾が妊婦の女性を対象に大規模調査を行い、「DVや虐待を受けたことがある」と回答した女性の34.0%が子どもを虐待し、66.0%が子どもを虐待しなかったことの研究結果を報告していることを話す。

第14課の「お互いを尊重できる会話をつくろう」と第15課のロールプレイでは男女間の尊重がある会話をクラスや班で作成し、作成したものをロールプレイ形式で発表をして気持ちを共感しながらプログラムを終了している。コミュニケーションスキルを身につける方法はLove U2のLesson 9を参考にしているが、さらに日本の教育現場に適した方法に整え、尊重のある会話を作成させることに変更した。学校現場では、思いやりの気持ちを高める指導が必要であると筆者が考え、プログラムは尊重のある会話を体験的に作成する方式に変更

をした。

プログラム実施形式は40人学級で、講義とロールプレイの意見交換を行いながら進めた。ファシリテーターは1人で実施し、1クラス50分間で行った。

4. プログラムの有効性の検証と効果

1) 有効性の検証方法

研究1の結果から中学生は関係性と威圧行為について学ぶ必要があることが明らかとなったため、これらを測定指標として3つの視点でプログラムの有効性の検証を行う。第1に介入群と非介入群のプログラム前とプログラム後の比較を行う。第2に介入群のプログラム前、プログラム後、1か月後の変化を検証する。第3にDVが異性間でおこる暴力であることから、プログラム効果が男子と女子で違いがあるかを検証するために関係性因子と威圧行為因子の性差比較を行う。

2) 期間と対象

2012年10月から2013年1月に、都市部にある1校の中学校の生徒345名にプログラムの有効性の調査を行った。内訳は1年生(3クラス)116名(男55、女61)、2年生(3クラス)118名(男57、女61)、3年生(3クラス)111名(男50、女61)である。このうち、3名の質問紙未記入者は除外したため342名が有効性の調査対象者となった。

3) 研究のデザイン(図6-3)

各学年3クラス(計9クラス)のうちの2クラスずつ(計6クラス、236名)を介入群とした。介入群は各クラス1回のプログラムを(50分で約40名ずつ)実施した。同じ内容の質問紙をプログラム前、プログラム後、1か月後の3回行った。なお質問紙はすべて無記名で行った。また各学年の残りの1クラス(計3クラス、106名)を非介入群と名付け、プログラム前、プログラム後に質問紙を実施した。対象校の男女の比率も均等で中学受験で入学をしているため学力も均一に高い。プログラムはすべて筆者が同じ内容で、1人で実施をした。

4) 質問紙の内容と配布回収方法 (表6-4)

研究1で導き出された関係性、威圧行為の認識を測る「DVにつながる考え方」の質問紙を使用した。順序尺度項目を間隔尺度項目として「そう思う4点」、「少しそう思う3点」、「あまりそう思わない2点」、「そう思わない1点」で算出した。プログラム前、プログラム後、1か月後の質問紙は、すべて1枚ずつ質問紙を封筒に入れて各クラスの担任教師が配布と回収を行った。なお担任教師は朝

学活のなかの10分間を質問紙の記入時間としてその場で回収を行った。

5. データの分析

介入群と非介入群の違いを比較するために、関係性因子と威圧行為因子のプログラム前とプログラム後の比較は2要因分散分析(反復測定)、群内の効果は、対応のある t 検定を行った。

介入群のプログラム前、プログラム後、1か月後の変化は一元配置分散分析(反復測定)を行った。

介入群の測定時点(プログラム前、プログラム後、1か月後)と性差における、関係性因子と威圧行為因子の比較は2要因分散分析(混合計画)を行った。

なおIBM SPSS 22.0を使用した。

6. 倫理的配慮

研究を依頼する際に研究校の所属長に趣旨、プログラムの内容、質問紙の内容について、すべて説明を行い書面で同意を得た。対象生徒には質問紙への回答、プログラムへの参加は自分の意志で決めて良いこと、参加を辞退したことにより不利益を被ることのないこと、プライバシーの保護に細心の注意を払うこと、無記名で封筒に入れて提出すること、データは研究目的以外には使用しないことを口頭、紙面で伝えた。

本研究は筑波大学医学医療系医の倫理委員会の承認(第684号)を得て実施をした。

第3節 結果

1. 中学生の介入群と非介入群のプログラム前後の効果

研究1で導きだされたDVにつながる考え方の関係性、威圧行為の平均値得点で、介入群と非介入群の比較を行った。平均値得点を従属変数、介入の有無(介入群・非介入群)、測定時点(プログラム前、プログラム後)を独立変数とする反復測定の2要因分散分析を行った。

関係性は「男性は女性を常にリードするべきだ」、「好きな人には嫌われたくないので意見を合わせるほうが良い」、「好きなら何があっても相手を最優先するのは普通だ」の3項目から成り立っていた。よって、最大値得点は12点、最小値得点は3点である。

威圧行為は「ひどい言葉や大声で怒鳴ることも暴力である」、「相手を脅すために物を投げたり、わざと大きな音をたてるのは暴力だ」、「自分の考えを押し付けたり無理じいするのは暴力だ」の3項目で成り立っていた。よって、最大値得点12点、最小値得点は3点である。両因子ともに3項目から構成され、「そ

「思う 4 点」、「少し思う 3 点」、「あまりそう思わない 2 点」、「そう思わない 1 点」で平均値を算出しているため、3 項目すべてが 2 点以下に該当すると思われる得点である「あまりそう思わない傾向」の平均値 6.00 以下は関係性の認識も威圧行為の認識も低い。4 点が 1 つでも入る、平均値 10.00 以上は関係性の認識も威圧行為の認識も高いとする。その間は大程度とする。

1) 関係性得点の変化

中学生全員の関係性得点はプログラム後の質問紙の未記入があった生徒を除いたため、介入群は 222 名、非介入群は 100 名である。(図 6-4)

介入群のプログラム前は 9.29 ± 2.05 (以下、 $M \pm SD$ を意味する) で中程度の認識、プログラム後は 9.94 ± 1.91 と高い認識に近づいた。非介入群のプログラム前は 8.60 ± 1.97 で中程度の認識、プログラム後も 9.26 ± 2.06 で中程度の認識であった。測定時点の主効果は有意であった ($F(1,320)=32.38, p<.001$)。介入群と非介入群による主効果も有意であった ($F(1,320)=8.40, p<.01$)。

一方、測定時点と介入の有無による交互作用の有意差はみられなかった ($F(1,320)=0.11, p<.01$)。群内における変化を検討するために、対応のある t 検定を行った結果、介入群はプログラム前とプログラム後で有意差がみられた ($t(221)=4.99, p<.001$)。また非介入群にもプログラム前とプログラム後で有意差がみられた ($t(99)=4.10, p<.001$)。

研究 1 でプログラム前の関係性得点に性差がみられたため、プログラム介入後の変化を、女子と男子で分けて分析を試みた。

関係性得点 (女子) はプログラム後の質問紙の未記入があった生徒を除いたため介入群は 118 名、非介入群は 56 名である。(図 6-5)

介入群のプログラム前は 9.52 ± 1.95 で中程度の認識、プログラム後は 10.12 ± 1.86 と高い認識へと推移した。非介入群のプログラム前は 8.88 ± 1.86 で中程度の認識、プログラム後は 9.51 ± 2.00 と中程度の認識であった。

測定時点の主効果は有意であった ($F(1,172)=24.56, p<.001$)。介入群と非介入群による主効果も有意であった ($F(1,172)=2.70, n.s.$)。一方、測定時点と介入の有無による交互作用の有意差はみられなかった ($F(1,172)=0.82, n.s.$)。群内における変化を検討するために、対応のある t 検定を行った結果、介入群はプログラム前とプログラム後で有意差がみられた ($t(117)=-4.21, p<.001$)。また非介入群にもプログラム前とプログラム後で有意差がみられた ($t(55)=-3.75, p<.001$)。

関係性得点 (男子) は、プログラム後の質問紙の未記入があった生徒を除いたため介入群は 104 名、非介入群は 44 名である。(図 6-6)

介入群のプログラム前は 9.05 ± 2.10 で中程度の認識、プログラム後は 9.70 ± 1.98 と高い認識に近づいた。非介入群のプログラム前は 8.26 ± 2.06 で中程度の

認識、プログラム後も 8.96 ± 2.10 で中程度の認識であった。

測定時点の主効果は有意であった($F(1,146)=10.68, p<.01$)。介入群と非介入群による主効果も有意であった($F(1,146)=7.02, p<.01$)。一方、測定時点と介入の有無による交互作用の有意差はみられなかった($F(1,146)=0.04, n.s.$)。群内における変化を検討するために対応のある t 検定を行った結果、介入群は、プログラム前とプログラム後で有意差がみられた($t(103)=-2.98, p<.01$)。また非介入群にもプログラム前とプログラム後で有意差がみられた($t(43)=-2.24, p<.05$)。

2) 威圧行為因子得点の変化

中学生全員の威圧行為得点もプログラム後の質問紙の未記入があった生徒を除いたため介入群は222名、非介入群は100名である。(図6-7)

介入群のプログラム前は 9.58 ± 2.09 と中程度の認識、プログラム後は 10.78 ± 1.80 と高い認識へと推移した。非介入群のプログラム前は 9.32 ± 1.96 と中程度の認識、プログラム後も 9.29 ± 2.06 で中程度の認識であった。測定時点の主効果は有意であった($F(1,320)=19.62, p<.001$)。介入の有無による主効果も有意であった($F(1,320)=20.65, p<.001$)。一方、測定時点と介入群と非介入群による交互作用も有意差がみられた($F(1,320)=23.01, p<.001$)。また群内における効果を検討するために、対応のある t 検定を行った結果、介入群はプログラム前とプログラム後で有意差が表れた($t(221)=8.04, p<.001$)。非介入群はプログラム前とプログラム後で有意差はみられなかった($t(99)=0.23, n.s.$)。

研究1でプログラム前の威圧行為得点に性差がみられたため、プログラム介入後の変化を、女子と男子で分けて分析を試みた。

威圧行為得点(女子)はプログラム後の質問紙の未記入があった生徒を除いたため、介入群は118名、非介入群は56名である。(図6-8)

介入群のプログラム前は 10.07 ± 1.90 と高い認識、プログラム後は 10.99 ± 1.75 とさらに高い認識へと推移した。非介入群のプログラム前は 9.72 ± 1.71 と中程度の認識、プログラム後も 8.75 ± 2.33 で中程度の認識であった。測定時点の主効果は有意であった($F(1,172)=8.58, p<.01$)。介入群と非介入群による主効果も有意であった($F(1,172)=11.22, p<.01$)。一方、測定時点と介入の有無による交互作用に有意差がみられた($F(1,172)=7.96, p<.01$)。また群内における変化を検討するために対応のある t 検定を行った結果、介入群はプログラム前と、プログラム後で有意差がみられた($t(117)=-4.77, p<.001$)。非介入群はプログラム前とプログラム後で有意差はみられなかった($t(55)=-0.07, n.s.$)。

威圧行為得点(男子)はプログラム後の質問紙の未記入があった生徒を除いたため、介入群は104名、非介入群は44名である。(図6-9)

介入群のプログラム前は 9.06 ± 2.14 と中程度の認識、プログラム後は $10.55 \pm$

1.83 と高い認識へと推移した。非介入群のプログラム前は 8.87 ± 2.09 で中程度の認識、プログラム後も 8.75 ± 2.33 で中程度の認識であった。測定時点の主効果は有意であった ($F(1,146)=10.89, p<.01$)。介入群と非介入群による主効果も有意であった ($F(1,146)=11.45, p<.01$)。一方、測定時点と介入の有無による交互作用に有意差がみられた ($F(1,156)=0.24, p<.01$)。また群内における変化を検討するために、対応のある t 検定を行った結果、介入群はプログラム前とプログラム後で有意差がみられた ($t(113)=-6.62, p<.001$)。非介入群はプログラム前とプログラム後で有意差はみられなかった ($t(43)=0.34, n.s.$)。

2. 介入群の1か月後の効果

1か月後の質問紙調査は介入群のみに行い、関係性得点と威圧行為得点の分析を行った。平均値得点を従属変数、測定時点(プログラム前、プログラム後、1か月後)を独立変数として一元配置分散分析(反復測定)で効果を検討した。

1) 関係性得点の変化 (図6-10)

未記入があった生徒のデータを除いたため、介入群は220名であった。プログラム前は 9.30 ± 2.05 で中程度の認識、プログラム後は 9.94 ± 1.91 と高い認識に近づき、1か月後も 9.86 ± 1.97 と高い認識に近い値を維持したままで推移し、有意差がみられた ($F(2,438)=15.00, p<.001$)。多重比較を行うために Bonferroni の調整を行ったところ、プログラム後はプログラム前に比べて有意に高かったが ($p<.001$)、1か月後とプログラム後の間では有意差がみられなかった。また、1か月後はプログラム前に比べて有意に高かった ($p<.001$)。

関係性得点(女子)は、未記入があった生徒のデータを除いたため、介入群115名であった(図6-11)。プログラム前は 9.53 ± 1.96 で中程度の認識、プログラム後は 10.13 ± 1.83 と高い認識へと推移し、1か月後は 10.08 ± 1.94 と高い認識を維持したまま推移し、有意差がみられた ($F(2,228)=9.81, p<.001$)。多重比較を行うために Bonferroni の調整を行ったところ、プログラム後はプログラム前に比べて有意に高く ($p<.01$)、1か月後とプログラム後の間では有意差がみられなかった。また、1か月後はプログラム前に比べて有意に高かった ($p<.001$)。

関係性得点(男子)は、未記入があった生徒のデータを除いたため、介入群105名であった(図6-12)。プログラム前は 9.05 ± 2.13 、プログラム後は 9.72 ± 1.98 、1か月後は 9.62 ± 1.98 と推移し有意差がみられた ($F(2,208)=6.00, p<.01$)。多重比較を行うために Bonferroni の調整を行ったところ、プログラム後はプログラム前に比べて有意に高かったが ($p<.05$)、1か月後とプログラム後の間では有意差がみられなかった。また1か月後はプログラム前に比べて有意に高かった ($p<.05$)。

2) 威圧行為得点の変化 (図 6-13)

未記入があった生徒のデータを除いたため、介入群は220名であった。プログラム前は 9.59 ± 2.09 で中程度の認識、プログラム後は 10.78 ± 1.81 と高い認識に推移し、1か月後と 10.00 ± 2.50 と高い認識を維持し、有意差がみられた($F(2,438)=22.81$, $p<.001$)。多重比較を行うために Bonferroni の調整を行ったところ、プログラム後はプログラム前に比べて有意に高かったが($p<.001$)、1か月後はプログラム後に比べて有意に低かった($p<.001$)。またプログラム前と1か月後では有意差はみられなかった。

威圧行為得点(女子)は未記入があった生徒のデータを除いたため介入群115名であった(図 6-14)。プログラム前は 10.07 ± 1.91 と高い認識で、プログラム後は 10.99 ± 1.76 とさらに高い認識で、1か月後も 10.37 ± 2.19 と高い認識で推移し、有意差がみられた($F(2,228)=8.85$, $p<.001$)。多重比較を行うために Bonferroni の調整を行ったところ、プログラム後はプログラム前に比べて有意に高かったが($p<.001$)、1か月後はプログラム後に比べて有意に低かった($p<.001$)。また、プログラム前と1か月では有意差はみられなかった。

関係性得点(男子)は未記入があった生徒のデータを除いたため、介入群105名であった(図 6-15)。プログラム前は 9.07 ± 2.15 で中程度の認識、プログラム後は 10.55 ± 1.83 と高い認識で、1か月後は 9.61 ± 2.75 と中程度の認識であるがプログラム前より高い状態で推移し、有意差がみられた($F(2,208)=14.02$, $p<.001$)。多重比較を行うために Bonferroni の調整を行ったところ、プログラム後はプログラム前に比べて有意に高かったが($p<.001$)、1か月後はプログラム後に比べて有意に低かった($p<.01$)。またプログラム前と1か月では有意差はみられなかった。

3. 介入群の測定時点の因子内比較

介入群の測定時点(プログラム前、プログラム後、1か月後)における性差を比較するために2要因分散分析(混合計画)を行った(表 6-4)。

関係性、威圧行為ともに、測定時点(プログラム前、プログラム後、1か月後)と性差に交互作用はみられなかった。

主効果検定では性差において関係性は($F(1,313)=12.50$, $p<.001$)で女子が男子に比べて有意に高かった。威圧行為も($F(1,313)=19.50$, $p<.001$)で女子が男子に比べて有意に高かった。

測定時点の主効果検定では関係性は($F(1,9,598)=29.12$, $p<.001$)でプログラム後が、プログラム前に比べて有意に高かった。威圧行為は($F(2,619)=15.14$, $p<.001$)でプログラム後が、プログラム前、1か月後に比べて有意に高かった。

第4節 考察

研究1の中学生と高校生のDVの知識と考え方の実態調査から、知識は年齢とともに増えていくが考え方を変化させることは難しいことが明らかとなった。そこで本研究では中学生にDV予防啓発プログラムを行い関係性や威圧行為に関する考え方に変化があらわれるかを検証した。

第1視点の介入群と非介入群の比較では、威圧行為においては介入群と非介入群の交互作用が有意であったことから介入群にプログラム効果が確実にあったと言える。威圧行為は「相手を脅すために物を投げたりわざと大きな音を立てるのは暴力だ」、「ひどい言葉や大声で怒鳴ることも暴力である」、「自分の考えを押し付けたり無理強いするのは暴力だ」の3項目から構成されている。つまりプログラムを受けたことにより脅威を与えるような行為が威圧行為であることが認識できたと言えるであろう。威圧的行為については、DVにつながっていくストーリー形式での説明、暴力とは何か、暴力の種類の商品からのプログラム効果が影響したと考えられる。

しかし関係性においては介入群と非介入群の間で効果の差がみられなかったため、プログラム効果があったかは明確ではない。関係性の項目には「好きな人には嫌われたくないので意見を合わせる方がよい」、「好きなら何があっても相手を最優先するのが普通だ」、「男性は女性を常にリードするべきだ」の3項目が含まれている。非介入群がプログラムを受けていなくてもプログラム後に認識がふえたことは、1度、同じ質問紙に答えただけで関係性に気づいたことや、他の授業のなかで関係性について考える機会があったのかもしれない。

第2視点は介入群のプログラム前、プログラム後、1か月後の効果を検討した。関係性はプログラムを受けたことによりプログラム後は上がり、さらに同じ平均値得点を男女共に1か月後も維持した。このことから中学生は男女共に関係性に関する認識は維持することが可能と考えられる。米国のAntle et al.³⁾の9年生を対象としたDV予防の研究でも、プログラム前と1か月後の2時点の比較で、1か月後に自尊心、関係性の認識が増えたことを報告しており、本研究も同様に関係性については1か月後も維持が可能であった。このことから米国の中学生用のプログラムの一部を参考にして作成した日本版のDV予防啓発プログラムは、関係性についての考え方を正しい方向に変化させ、またそれを継続していくことに効果があると言えるであろう。しかし威圧行為はプログラムを受けたことによりプログラム後は認識が増えたが、男女共に1か月後は、その正しい認識を維持することが不可能であった。このことから男女共に威圧行為に関する認識はプログラム直後には考え方が変化するが、時間の経過と共にその認識が薄れていくことが考えられる。威圧行為に対する正しい認識を継続させることが難しかったことから「どのような行為が威圧行為か」ということを

考えさせるための繰り返しのプログラムが必要であることが考えられる。

第3視点ではプログラム介入群の測定時点からの変化についてと男女の比較に注目をしたい。関係性、威圧行為の2側面共に、男子も女子もプログラム後はプログラム前より有意に得点が高く、プログラム後は、関係性、威圧行為の認識が高い状態へと変化した。これらのことからプログラムを行うことにより中学生は関係性、威圧行為ともに考え方を变化させることが可能であると思われる。

本研究は研究1のDVにつながる考え方の実態から明らかとなった関係性と威圧行為について中学生が学習するために米国で中学生向けに開発をされているLove U2 dating violence 予防プログラムの一部分やWalkerが考案した暴力のサイクルを取り入れながら日本の中学校の教育現場で実施しやすいようにプログラムを作成した。介入群と非介入群を設定して効果比較を行ったところ、威圧行為の認識を高めるためには1回のプログラムで、介入群のプログラム前が 9.58 ± 2.09 と中程度の認識、プログラム後は 10.78 ± 1.80 と高い認識へと推移し、非介入群のプログラム前は 9.32 ± 1.96 と中程度の認識、プログラム後も 9.29 ± 2.06 で中程度の認識であった。交互作用がプログラム後にみられたことから効果があったと言えるであろう。

介入群のみの変化では関係性は1か月後も効果が継続していたが、その後の3か月後、半年後の効果も今後、検証が必要である。また対象生徒が1つの中学校での効果研究であるため、今後、多岐にわたる学校での検証が必要である。また1回のプログラムだけではなく、継続的なプログラム開発を行い、効果についての検証をさらに深めていく必要があると思われる。

第5節 小括

本研究から明らかになったことは

1. 介入群と非介入群のプログラム前後の比較を行ったことにより、プログラム直後は、脅威を与えるような威圧行為を正しく認識できるようになる効果があった。一方、関係性に対する認識についてはプログラム前後で良い方向への変化が生ずることが認められたものの、介入群と非介入群の間での差は確認できなかった。
2. 介入群は、プログラム効果の持続性については関係性の認識と威圧行為の認識は異なっていた。威圧行為の認識はプログラム直後の効果が1か月後には減少して維持できなかった。関係性に対する認識の効果は1か月後も持続していた。

第7章

中学生のDV予防啓発プログラムの受講後の意見 —プログラム後、1か月後の質問紙調査から—

研究4

第1節 目的

本研究では、DV予防啓発のプログラムを受けた中学生に、プログラム後、1か月後のプログラムの受講後の意見を質問紙形式で回答を求め、生徒の主観的な意見からプログラムの効果を明らかにする。

第2節 方法

1. 期間と対象 (図7-1)

2012年10月から2013年1月に中高一貫教育校の中学生342名(中学1年、中学2年、中学3年の各学年3クラスの合計9クラス)にDV予防啓発のプログラム後と1か月後に質問紙を実施した。なお、研究3の非介入群の中学生106名にも時期をずらしてプログラムを実施した。そのためプログラム後、1か月後の受講後の意見調査の協力を得ることができた。よって中学生の対象者は研究3の介入群236名に非介入群106名を加えた342名である。

2. 質問紙の内容

1) プログラム後 (表7-1)

「DVの授業は将来、役に立つと思う」など、内容についての5項目の質問を行った。これらの質問の回答として4件法を用い「あてはまる」「少しあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」とした。

2) 1か月後 (表7-2)

1か月後には『DVを知る』のプログラムは自分に良い影響を与えている、

「暴力のサイクルの構造を覚えている」の2項目を行った。これらの質問の回答として4件法を用い「あてはまる」「少しあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」とした。

3. 手続き

プライバシーの保護に細心の注意を払うために、質問紙を1枚ずつ封筒に入れて生徒に配布した。プログラム後は授業者が配布を行い、無記名で1人1人封筒に入れて回収を行った。1か月後は各クラスの担任教師に2013年1月10日の学活の時間に配布をしてもらい、その場で記入し無記名で1人1人封筒に入れて回収を行った。質問に答えるか否かは、個人で決めて良いこと、参加を辞退したことにより不利益を被ることがないこと、プライバシーの保護は守られることを質問紙表紙に明記されたものを生徒に各自、読んでもらった。なお、質問に回答し、提出を持って研究協力に同意することとみなすことを理解したうえで回答してもらった。質問紙の記入時間は10分以内として、各自、封筒に入れて提出することとした。質問紙は各クラスの担任から授業者が質問紙回収袋を受け取りその結果を分析した。

3. データの分析

生徒からの結果は人数の割合を確かめ、性差の比較はMann-Whitney U検定、学年差の比較はKruskal-Wallis検定を行い、その後、多重比較(Bonferroniの調整)を行った。なおIBM SPSS 22.0を使用した。

4. 倫理的配慮

研究を依頼する際に研究校の所属長に趣旨、プログラムの内容、質問紙の内容についてすべて説明を行い書面で同意を得た。対象生徒には質問紙への回答、プログラムへの参加は自分の意志で決めて良いこと、参加を辞退したことにより不利益を被ることのないこと、プライバシーの保護に細心の注意を払うこと、無記名で封筒に入れて提出すること、データは研究目的以外には使用しないことを口頭、紙面で伝えた。

本研究は筑波大学医学医療系医の倫理委員会の承認(第684号)を得て実施を

した。

第3節 結果

1. プログラム後の意見

プログラム後に、中学1年生から中学3年生までの授業を受けた342名に5項目の質問を行った。「あてはまる」、「少しあてはまる」と肯定的に答えた生徒の割合は以下の通りである(図7-2)。「1. DVの授業は将来、自分自身の役に立つと思う」が95.6%、「2. 今後もDVの授業があったら受けたと思う」が88.7%、「3. DVとは自分が思っていた事より身近に起こる事がわかった」が94.1%、「4. DVについての授業の内容を友人や家族に伝えたいと思う」が81.0%、「5. これからの生活の中で人とより良い関係を築くために尊重をしたいと思う」は97.9%と、全ての項目で高い肯定的な評価が得られた。性差比較を行うためにMann-Whitney U検定を行ったところ「1. DVの授業は将来、自分自身の役に立つと思う」と「3. DVとは自分が思っていた事より身近に起こる事がわかった」と「4. DVについての授業の内容を友人や家族に伝えたいと思う」は性に有意差はみられなかった(表7-3)。

しかし「2. 今後もDVの授業があったら受けたと思う」では女子が男子に比べて有意に高く($p<.05$)、「5. これからの生活の中で人とより良い関係を築くために尊重をしたいと思う」も女子が男子に比べて有意に高かった($p<.05$)。学年差はKruskal-Wallis検定を行ったところ「1. DVの授業は将来、自分自身の役に立つと思う」、「2. 今後もDVの授業があったら受けたと思う」、「3. DVとは自分が思っていた事より身近に起こる事がわかった」、「4. DVについての授業の内容を友人や家族に伝えたいと思う」では学年による有意差はみられなかった(表7-3)。「5. これからの生活の中で人とより良い関係を築くために尊重をしたいと思う」では有意差がみられた($p<.05$)。そこで3学年間の有意差を検定するために多重比較をおこなった。その際Bonferroniの調整に基づき有意水準5%を3分の1とした1.67%を有意水準として採用した。その結果、中学3年生が中学1年生に比べて有意に高かった。

2. 1か月後の意見

1か月後に、中学1年生から中学3年生までの授業を受けた(342名)に内容について2項目の質問を行った。「あてはまる」、「少しあてはまる」と肯定的に答えた生徒の割合は「1.DVのプログラムは自分に良い影響を与えている」が88.8%、「2.暴力のサイクルを覚えている」が81.8%と、1か月後もプログラムの内容に肯定的な意見が得られた(図7-3)。性差比較を行うためにMann-Whitney U検定を行ったところ、「1.DVのプログラムは自分に良い影響を与えている」、「2.暴力のサイクルの構造を覚えている」も有意な性差はみられなかった(表7-4)。

学年差はKruskal-Wallis検定を行ったところ、「1.DVのプログラムは自分に良い影響を与えている」では学年間で有意差はみられなかったが、「2.暴力のサイクルの構造を覚えている」では有意差がみられた($p<.001$)。そこで3学年間の有意差を検定するために多重比較をおこなった。その際Bonferroniの調整に基づき有意水準5%を3分の1とした1.67%を有意水準として採用した。その結果中学3年生が中学1年生に比べて有意に高く、さらに中学3年生は中学2年生に比べても有意に高かった。

第4節 考察

プログラム受講後の生徒の主観的な意見では中学生の95.6%が「DVの授業は将来役に立つ」と思い、1か月後も88.8%の生徒が「プログラムは自分に良い影響を与えている」と答えていることから本研究のプログラムは多くの中学生が有用だと感じていると思われる。

プログラム後に「DVとは自分が思っていたより身近でおこることがわかった」と回答した生徒が94.1%にものぼったことにより、自分や周りの人がDV被害を受けているときに気づき、助け合うことができるようになると思われる。また、「DVについての授業の内容を友人や家族に伝えたいと思う」と回答した中学生が81.0%も存在していたことも大きなプログラム効果と考えてよいだろう。友人や家族に中学生が伝えていけば、周囲もDV問題に関心を持ちはじめるとは思われる。このような意識が広がっていけばDV被害者や加害者を減らしていくことに効果が期待でき、DVが身近でおこる社会問題であることを広く伝えていくことに効果があるだろう。

1か月後という時間を経ても「DVのプログラムは自分に良い影響を与えている」と9割近くの中学生在が思い、この回答に男女差や学年による差がみられなかったことも見落とせない。米国のTaylor et al.⁷¹⁾は2009年から2010年に、ニューヨーク州の中学校にdating violenceを予防するための教材(法律や理論を説明したポスター)を掲示した学校と掲示しなかった学校で、異性間暴力の発生率に違いがあるかを比較したところ、掲示した学校の方が異性間の暴力が少なかったことから、中学生という時期にdating violenceの知識を提供することは効果があると論じている。海外の先行研究と本研究の中学生の意見から、中学生という年代にDV予防啓発のプログラムを提供することは良い影響を与えることになることが考えられる。

第5節 小括

本研究で明らかになったことは

1. プログラム後は、中学生は男女共に95.0%以上がDV予防啓発のプログラムは「将来役に立つと思う」と肯定的にとらえ、「役に立つ」という考えは男女や学年でも差がなかった。
2. 1か月という時間を経ても89.0%程度の中学生在が「プログラムは自分に良い影響を与えている」と回答し、男女や学年による差もみられなかった。

第8章

総合考察

DV、デートDVは暴力のなかの1つであるが、親密な関係にある異性間で起こる暴力のことである⁵¹⁾。夫婦間、恋人同士というお互いを最も大切にしていると思われる特別な関係のなかでおきている暴力であり、家庭内などみえにくい場所でおきている。そのため第3者が介入しにくく事態は深刻化していく。文献展望に示したように、被害者は繰り返される暴力により力を奪われ、命令に従うだけになり行動する力も奪われ³⁴⁾、決定的な底打ち実感のプロセスに至るまで完全な離別の決意をすることができない⁴⁴⁾という複雑な関係性のなかで縛られている。またDV被害を受ける人のなかには子供時代に虐待を受けた経験がある人が多いため、鬱、トラウマ症状を悪化させる場合もある²⁵⁾。またDV被害を受けている人は精神状態が悪化し、その子供に影響を与え、子供が自傷行為や薬物依存などの問題を抱えることが多いことも明らかとなっている⁴⁹⁾。

DV被害者の援助が最優先ではあるが、加害者が暴力行為を行わないようにすることも重要であり、加害者更生プログラムが海外でも日本でもはじめられている。しかしプログラムで更生をしたようにみえても再犯をくりかえす加害者が多いこと⁸⁰⁾、重症度が低い加害者が他の重症度の高い加害者とプログラムを受けることにより、より悪質な暴力の方法を学んでしまうなど、加害者更生プログラムにも負の効果ははらんでいること³²⁾も文献展望で示した。

大人の間でおこっているDV被害者を救い出すための方法の研究や、加害者の更生のための研究は始まったが、新たに若い世代のDVも深刻化していることが表面化しはじめ、この問題を日本ではデートDVと呼んでいる⁸⁹⁾。2013年の東京都が18歳から29歳を対象として実施した調査では女性の42.4%、男性の31.3%が1度でも恋人または元恋人から暴力をふるわれたことがあると回答した⁷⁵⁾。この現状を踏まえて成人になってからDVの対策を行うのではおそいと考え、予防のレベルのDV対策を行うには中学生、高校生のうちに行う必要があると考えた。そこで研究1で中学生・高校生を対象にDVの知識と考え方の実態調査を行った結果、中学生はDVという言葉すら知らない生徒が半数を占め、高校生になると知識は定着していることが明らかとなった。またどのような考え方がDVにつながっていくかを知るために、「DVにつながる考え方10項目」を作成した。中学生、高校生の結果を因子分析したところ、「男性は女性を常にリードするべきだ」、「好きな人には嫌われたくないので意見を合わ

せる方がよい」、「好きなら何があっても相手を最優先するのは普通だ」の3項目は関係性因子に含まれ、「ひどい言葉や大声で怒鳴ることも暴力である」、「相手を脅すために、物を投げたり、わざと大きな音をたてるのは暴力だ」、「自分の考えを押し付けたり、無理じいするのは暴力だ」の3項目は威圧行為因子に含まれた。この考え方においては中学生も高校生も差がないことが明らかとなった。これらの結果を受けて知識が定着をしていない中学生に焦点をあててDV予防啓発プログラムを行うこととした。

中学生にDV予防啓発プログラムを行うことには教員のDVの認識や予防啓発に関する意見の調査を行うことも必要であると考え、研究2で教員に質問紙調査を行った。その結果、女性教員の90.7%、男性教員の85.9%がDV予防の授業を中学や高校の授業の中で実施したほうがよいと思っていることが明らかとなった。しかし日本では看護系の大学のDVの授業の実施率が64.3%であるという研究報告⁷⁴⁾はみられたが、それ以外の教育現場ではDV予防の授業は未開拓の状態である。海外では2012年に54.2%の養護教諭が高校生にDating Violenceの講習を行っていることが報告されている³⁸⁾。本研究の9割近くの教員がDV予防を生徒に実施したいと考え、DVの学習経験がある教員も3割程度も存在することは心強い結果であった。教員の研修のなかにDV予防についての内容を組み込み、教材を提供していけば日本の中学、高校でもDV予防の授業を行うことが可能になると思われる。

教員のDV予防に関する意識が高いことも確かめられたため、米国の中学生用DV予防プログラムやWalkerの暴力のサイクルを参考にしながら日本の中学生用のプログラムを作成した。ロールプレイでは日常生活のなかで相手を尊重する会話が発せられるようになることを考慮に入れて内容の変更を試みた。また段階的に回数を増やすことを考えて、研究3での中学生へのDV予防の授業は最初の試みとして、1回(50分)で実施をした。プログラムを受けることにより関係性と威圧行為に対する考え方が変化するかを測定指標として、3つの視点から効果の検証を行った。第1視点は介入群と非介入群のプログラム前後の効果比較、第2視点は介入群のみに焦点をあてて、プログラム前、プログラム後、1か月後の変化を検証した。第3視点ではDVが異性間でおきる暴力であることを考慮に入れて、男子と女子で考え方に違いがあるのかを確かめるためにプログラム介入群の性差比較を行った。

第1視点での効果比較では、プログラム後に介入群は非介入群に比べて関係性、威圧行為の正しい認識が高まったが、支配性を持った関係性に気づく感覚ではプログラム前後で良い方向への変化が生じることが認められたものの介入群と非介入群の間で差は確認できなかった。脅威を与えるような威圧行為は介

入群と非介入群の間で差が確認できたことから、プログラム前後でプログラムの効果が確かめられた。

第2視点では介入群は1か月後も、関係性は効果が持続することが確かめられたが、威圧行為は1か月後には認識が薄れていくことが考えられた。

第3視点ではプログラム介入群の測定時点と男女の比較に注目をした。関係性、威圧行為の2側面共に、男子も女子もプログラム後はプログラム前より有意に得点が高かった。これらのことからプログラムを行うことは中学生の男子にも女子にも関係性、威圧行為の考え方を良い方向に変化させることが可能であることが明らかとなった。

研究4では生徒からDV予防啓発プログラムの主観的な意見の回答を求めた。その結果、1回のDV予防プログラムで88.7%の中学生が「DV予防啓発の授業を今後も受けたいと思う」と回答し、90.0%の生徒が「DV予防プログラムの内容を家族や友人に伝えたいと思う」と回答していることから中学生へのDV予防啓発は必要性が高く、繰り返しのプログラムを開発していく必要がある。

DVは若い世代の社会問題になっていることから、全体的に本研究を概観して予防の観点ではどの年代でDV予防啓発を取りいれていくと効果があるかの検証を試みた。中学生、高校生にDVの知識と考え方に関する質問紙調査を行い、その結果から中学生という年代が予防の観点では適している年代であろうと焦点を絞ってプログラム介入を行った。1回のプログラムで中学生は関係性、威圧行為の側面の認識において効果があらわれた。また中学生の95.6%が「DVの授業は将来、役に立つと思う」と主観的にも興味を示した中学生が多いことが示された。

教育現場で現実的にDV予防をとりおこなう教員の意見が大切と考え、DV予防啓発への意見の回答を求めたところ、9割弱の教員が中学生や高校生にDV予防啓発を実施したほうが良いと回答した。しかし現実はかなりハードルが高いと思われる。友田ら⁷⁴⁾の看護系の大学教員ですら、いざDV予防の授業を行うことになると「DVのことを教える自信がない。教材がない。」という意見が多くだされている。そこで、こうしたプログラムを学校現場に導入するには教員を対象としたDV予防の研修や、教材を提供する必要があるだろう。またカリキュラムの、どの学年に導入すると良いかや、他の教科（保健、社会、道徳、特別活動など）との連動も考える必要があるだろう。

米国の例を参考にしたところ、Foshee et al.²²⁾の研究では小学校時代のいじめの加害者は13歳を過ぎると異性間暴力の加害者になる率が高いことを指摘している。そこで小学校ではいじめ予防のために友人との関係性をテーマとし

た尊重のある会話のロールプレイの練習などを行い、その延長線上に中学校で暴力予防、デートDV予防プログラムにつなげていくと抵抗が少なくなると思われる。

DVの授業の効果をより高めるためには、他の教科との連動を検討することが有効であると思われる。例えば、中学校学習指導要領⁶²⁾の目標のなかに記されている、公民分野の「個人の尊厳と人権尊重の意義」、道徳「他の人との関わりに関することー男女は、互いに異性について正しい理解を深め相手の人格を尊重することー」、保健「心の健康への理解」、特別活動「思春期の不安や悩みとその解決、男女相互の理解と協力、望ましい人間関係の確立」などの授業との連携が考えられる。そうすることによって、他者と共に生きる力が複数の教科のなかでより広く生徒に伝わっていくであろう。また、現在の教育現場では、多くの指導内容を決められた時間枠内で教えることが求められている状況を考えると、DVの授業を追加することに限界があると思われ、現在の教育課程のなかに組み込んでいくことを考える方が、実現しやすい面もあると思われる。

DV予防啓発プログラムを受けることにより家庭内でDVがおこっている生徒であれば精神的な苦痛を伴う反応がおこりかねず、プログラム後にケアをする人を用意する必要があるだろう。学校内であればスクールカウンセラーなどと教員が連携をとり、生徒の変化に気付いたら対応をしていく環境を整えていきたい。

本研究の対象校の中学生はプログラムに対する満足度は高く、1か月後も「電車のなかのつり革のDVの記事が目に入るようになった」などの具体的な意見が寄せられた。このような意見と本研究の効果研究の結果から、1回でも中学生にDV予防啓発プログラムを行うことは自身や周囲を守る意味でも意義があると思われる。

第9章

研究の限界と課題

海外のDV予防プログラムを参考にすれば複数回でのプログラムが行われているが、日本では最初の一步として、1回の実施での効果研究であった。1回の実施でもDV予防プログラムを「役に立つ」と回答した中学生が95.0%以上もみられたことから、今後は多岐にわたる地域、タイプの学校での検証も必要である。また、実施回数を増やしていきながら効果のあらわれかたを検討する必要がある。さらにプログラムを受けた生徒が将来的にDV被害者や加害者になる率が低くなっていることを確かめてはじめて予防の効果があったと言えるであろう。

また本研究はDV予防の主旨を説明したうえで、研究協力に同意をくださった学校、教員の方々の方に質問紙を配布している上での結果であることを考慮にいれなければならない。

第10章

結論

中学生に DV 予防啓発プログラムを行うことは、知識の向上とともに、DV や暴力につながっていく支配を伴った関係性や、脅威を与えるような威圧行為に気づくことに適切かつ有効であることが示された。プログラムに対する意見では 9 割以上の生徒が「将来、自分自身の役に立つ」と回答したことから、プログラムを肯定的に受け止めていることが確かめられた。

さらにおよそ 9 割の教員が DV 予防啓発を中学や高校の授業のなかで実施することに肯定的な意見を持っていることが明らかとなったため、学校現場に DV 予防を取り入れることを実現するために、プログラムを多くの場所で展開していきたい。また、より多くの人に試用してもらい意見を聞きながら学校現場により適合するプログラムの開発、改良を進めたい。

引用文献

- 1)Ackerson, L.K.: Effects of individual and proximate educational context on intimate partner violence: A population-based study of women in India. *American Journal of Public Health*, 98(3),507-514,2008.
- 2)Adler-baeder, F., Kerpelman,J.L., Schramm,D.G., Higginbotham,B.& Paulk, A.: The impact of relationship education on adolescents of diverse backgrounds. *Family Relations*, 56,291-303, 2007.
- 3)Antle,B.F.,Sullivan,D.J.,Dryden,A., Karam,E.A. & Barbee, A.P. : Healthy relationship education for dating violence prevention among high-risk youth. *Children and Youth Services Review*, 33,173-179, 2011.
- 4)Avery-Leaf, S., Cascardl, M., O'Leary, K.D. & Cano, A. : Efficacy of a datig violence prevention program attitudes justifying aggression. *Journal of Adolescent Health*, 21,11-17,1997.
- 5)Babcock, J.C. & Steiner, R.: The relationship between treatment, incarceration and recidivism of battering; A program evaluation of Seattle's coordinated community response to domestic violence. *Journal of Family Psychology* ,13, 46-59, 1999.
- 6)Bancroft, L.: DV 加害者の考え方, DV・虐待加害者の実体を知る.高橋睦子, 中島幸子, 山口のり子 [監訳], 明石書房,78-109,2011.
- 7)Buttell, F.P. & Pike, C.K.: Investigating the differential effectiveness of a batterer treatment program on outcomes for African American and Caucasian batterers. *Research on Social Work Practice*, 13,675-692, 2003.
- 8)Chalk, R. & King, P.:家庭内暴力の研究,多々良紀夫[監訳],福村出版,187-201, 2011.
- 9)Chan,K.L.: Sexual violence against women and children in Chinese societies. *Trauma Violence & Abuse*, 10(1), 69-85,2009.
- 10)Chen,H., Bersani,C., Myers, S. & Denton, R.: Evaluation the effectiveness ofcour rt sponsored abuser treatment program. *Journal of Familiy Violence*,4,309-322, 1989.
- 11)千葉県民共生センター:デートDVに関する大学生意識等調査.2012. www.pref.chiba.lg.jp/kyousei/contents/chosa.html. (2014.8.17 最終閲覧)
- 12)Cornelius, T.L.& Resseguie, N. : Primary and secondary prevention programs for dating violence :A review of the literature. *Aggression and Violent Behavior*, 12, 364-375,2007.
- 13)Crooks, C.V., Scott, K., Ellis, W. & Wolfe, D.A.: Impact of a universal school-based violence prevention program on violent delinquency: Distinctive benefits for youth with maltreatment histories. *Child Abuse & Neglect*, 35,393-400, 2011.
- 14)Edelson, J., Miller, D., Stone, G., Chapman, D.: Group treatment for men who batter: A multiple base-line evaluation. *Journal of Social Work Research*,21,18-21,1985.
- 15)Edelson, J. & Grusznski, R.: Treating men who batter; Four years of outcome data from the Domestic Abuse Project. *Journal of Social Service Research*,12,3-22,1989.
- 16)Exner, C.D.: Theory and teen dating violence victimization; Considering adolescent development. *Developmental Review*, 34,168-188,2014.
- 17)Faramazi, M., Esmailzadeh, S. & Mosavi, S.: A comparison of abused and non-abused women's definitions of domestic violence and attitudes to accept of male dominance. *European Journal of Obstetrics & Gynecology and Reproductive Biology*,122, 225-231, 2005.
- 18)Finkelhor, D., Vanderminden, J., Turner, H., Shattuck, A., & Hamby, S.: Youth exposure to violence prevention programs in a national sample. *Child Abuse & Neglect*, in press, 2014.
- 19)Follingstad, D., Rutledge,L., Berg,B., Hause, E. & Polek, D.: The role of emotional abuse in physically abusive relationships. *Journal of Family Violence*, 5, 107-120, 1990.
- 20)Foshee, V.A., Bauman, K. E., Arriaga, X.B., Helms, R.W., Koch., G.G. & Linder,G.F.: An evaluation of safe dates an adolescent dating violence prevention program.

- American Journal of Public Health*, 8, 45-50, 1998.
- 21) Foshee, V.A., Bauman, K.E. & Greene, W.F.: The Safe Dates program: 1-year follow-up results. *American Journal of Public Health*, 90, 1619-1622, 2000.
 - 22) Foshee, V.A., Bauman, K.E., Ennett, S.T., Linder, G.F., Benefield, T. & Suchindran, C.: Assessing the long-term effects of the Safe Dates program and a booster in preventing and reducing adolescent dating violence victimization and perpetration. *American Journal of Public Health*, 94, 619-624, 2004.
 - 23) Foshee, V.A., Reyes, H.L., Vivolo-Kantor, A.M., Basile, K.C., Chang, L., Faris, R. & Ennett, S.T.: Bullying as a longitudinal predictor of adolescent dating violence. *Journal of Adolescent Health*, in press, 2014.
 - 24) Foshee, V.A., Reyes, L.M., Brune, C.B., Simon, T.R., Vagi, K.J., Lee, R.D. & Suchindran, C.: The Effects of the Evidence-Based Safe Dates Dating Abuse Prevention Program on Other Youth Violence Outcomes. *Prevention Science*, DOI 10.1007/s11121-014-0472-4, Published online: March 6th 2014.
 - 25) Fujiwara, T., Okuyama, M., Izumi, M. & Osada, Y.: The impact of childhood abuse history and domestic violence on the mental health of women in Japan. *Child Abuse & Neglect*, 34, 267-274, 2010.
 - 26) Garaigordobil, M., Maganto, D., Perez, J.I. & Sansinenea, E.: Gender Differences in Socio-emotional Factors during Adolescence and Effects of a Violence Prevention Program. *Journal of Adolescent Health*, 44, 168-177, 2009.
 - 27) Gonzalez-Guarda, R.M., Cummings, A.M., Pino, K., Malhotra, K., Becerra, M.M. & Lopez, J.E.: Perceptions of Adolescents, Parents, and School Personnel From a Predominantly Cuban American Community Regarding Dating and Teen Dating Violence Prevention. *Research in Nursing & Health*, 37, 117-127, 2014.
 - 28) Hale-Carlsson, G., Hutton, B. & Fuhrman, J.: Physical violence and injuries in intimate relationships. New York Behavioral Risk Factor Surveillance System, *MMWR Morb Mort Wkly Rep*, 45, 765-767, 1996.
 - 29) Halpern, C.T., Oslak, S.G., Young, M.L., Martin, S.L. & Kupper, L.L.: Partner violence among adolescents in opposite-sex romantic relationships: Findings from the National Longitudinal Study of Adolescent Health. *American Journal of Public Health*, 91, 1679-1685, 2001.
 - 30) 蓮井江利香：デートDV防止教育に関する研究の展望，広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要，10, 116-124, 2011.
 - 31) 波田あい子：東京都「女性に対する暴力」調査は何を明らかにしたか。アディクションと家族，15(4), 255-264, 1998.
 - 32) Holzworth, M.A., Meehan, J.C., Herron, K., Rehman, U. & Stuart, G.L.: Testing the batterer typology. *Journal of Consultation and Clinical Psychology*, 68, 1000-1019, 2000.
 - 33) 石井朝子，飛鳥井登，木村弓子，永松貴子，黒崎美智子，岸本淳司：ドメスティックバイオレンス(DV)簡易スクリーニング尺度(DVSI)の作成および信頼性・妥当性の検討，精神医学，45(8), 817-823, 2003.
 - 34) 泉川孝子：DV被害者支援機関における支援の現状と課題—フォーカス・インタビューより—。立命館大学コア・エシックス誌，9, 15-25, 2013.
 - 35) 金網祐香，濱口佳和：関係性攻撃加害に対する中学生の道徳的判断—複数の攻撃場面および共感性との関連から—，学校心理学研究，13(1), 15-28, 2013.
 - 36) Kaufman, J. & Zigler, E.: Do abused children become abusive parents? *American Journal of Orthopsychiatry*, 57, 186-192, 1987.
 - 37) 川崎佳代子，三澤寿美，西脇三春，遠藤恵子：DV(ドメスティック・バイオレンス)の被害と回復過程への支援—第1報：被害の実態と支援の現状と課題—。山形保健医療研究誌，9, 19-32, 2006.
 - 38) Khubchandani, J., Telljohan, S.K., Price, J.H., Dake, J.A. & Hendershot, C.: Providing assistance to the victims of adolescent dating violence: A National Assessment of School Nurses' Practices. *Journal of School Health*, 83, 127-136, 2013.
 - 39) 国際連合：北京宣言及び行動綱領実施のための更なる行動とイニシアティブ。

引用文献

- <http://www.gender.go.jp/wy2000/initiative.html>.(2014.8.17 最終閲覧)
- 40)Kuhman,K.R.,Howell,K.H.& Graham-Bermann,S.A.:Physical Health in Preschool Children Exposed to Intimate Partner Violence. *Journal Family Violence*, 27, 499-510, 2012.
- 41)Lavoie, F., Vezina, L., Piche,C.& Boivin, M.: Evaluation of a prevention program for violence in teen dating relationships. *Journal of Interpersonal Violence*,10(4), 516-524, 1995.
- 42)Lieberman, A.F.: Don't hit my mommy : A manual for child-parent psychotherapy with young witnesses of family violence, *ZERO TO THREE Press*, Washington, D.C.,2005.
- 43)McKay, M.: The link between domestic violence and child abuse;Assessment and treatment considerations, *Child Welfare League of America*, 73,29-39,1994.
- 44)増井香名子 : DV 被害者は、いかにして暴力関係からの「脱却」を決意するのかー「決定的底打ち実感」に至るプロセスと「生き続けている自己」.社会福祉学,52(2), 94-106, 2011.
- 45)Miller, E.,Trancredi, D.J., McCauley, H.L., Decker, M. R., Virata, M.C., Anderson, H.A., Stekevich, N., Brown, E.W., Moideen, F. & Silverman, J.G.: Coaching Boys Into Men. A Cluster-Randomized Controlled Trial of a Dating Violence Prevention Program. *Journal of Adolescent Health* ,51, 431-438, 2012.
- 46)三隅佳子 : アジアのドメスティック・バイオレンス. アジア女性交流・研究フォーラム, 篠崎正美監訳/監修, 3-6,2002.
- 47)Miranda, J.K., Osa, N., Granero, R., & Ezpeleta, L.: Maternal Childhood abuse, intimate partner violence, and child psychology. *Violence Against Women* ,19(1), 50-68,2013.
- 48)森田展彰 : ドメスティックバイオレンスと児童虐待ー被害を受けた母子と加害男性に対する包括的な介入ー,臨床精神医学 39(3),327-337,2010.
- 49)森田展彰 : ドメスティックバイオレンスの加害者の理解と働きかけ,精神科,23(3),345-352, 2013.
- 50)永松美雪, 原 健一, 中河亜希, 中野理佳 : 性行動に伴う危険を予防するプログラム効果 - 性感染症予防教育に男女がお互いを尊重する関係を育成する教育を組合せて -, 思春期学,30(4),365-376,2012.
- 51)内閣府男女共同参画局 : <http://www.gender.go.jp/e-vaw/chousa/index.html>.(2014.8.17 最終閲覧)
- 52)内閣総理大臣官房男女共同参画室 : 男女間における暴力に関する調査. 2000.
- 53)内閣府男女共同参画局 : 配偶者等からの暴力に関する調査. 国立印刷局, 2003.
- 54)内閣府男女共同参画局 : 男女間における暴力に関する調査. 2006.
- 55)内閣府男女共同参画局 : 男女間における暴力に関する調査. 2009.
- 56)内閣府男女共同参画局 : 男女間における暴力に関する調査. 2012.
- 57)内閣府男女共同参画局 : 配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護等のための施策に関する基本的な方針. 2014.
- 58)内閣府, 国家公安委員会, 法務省, 厚生労働省告示第 1 号 : 配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護等のための施策に関する基本的な方針 (概要) 2013.12.
- 59)中谷陽二, 伊藤きょう子 : 被害者が加害者に変ずるとき - ドメスティック・バイオレンスと司法精神医学 -,臨床精神医学,39(3),339-344,2010.
- 60)日本女性学習財団 : DV 防止法第 3 次改正 <http://jawe2011.jp/>(2014.8.17 最終閲覧)
- 61)西村 香, 森田展彰 : 大学生における支配的恋愛関係チェックリストの作成、および信頼性、妥当性の検討ー「束縛」に焦点化した dating violence 調査表ー,アディクションと家族,29(3),244-253,2013.
- 62)文部科学省 : 中学校学習指導要領.平成 20 年 3 月.
- 63)Pearson, M.: Love U2, Relationship Smarts Plus, Relationships & Romance for Teens.National Registry of Evidence-based Programs and Practices, 2007. <http://www.childbuilders.org/programs/loveAbout.html>.(2014.8.17 最終閲覧)

- 64) Rennison, C.M. & Welchans, S.: Intimate partner violence: Washington, SC: Bureau of Justice Statistics, U.S. Department of Justice, 2000 [special report, NCJ 178247].
- 65) Shupe, A., Stacey, W. & Hazlewood, L.: Violent men, violent couples; the dynamic of domestic violence, *D.C. Health*, Toronto, Canada, 1987.
- 66) Smith, P.H., White, J.W. & Holland, L.J.: A longitudinal perspective on dating violence among adolescent and college-age women. *American Journal of Public Health*, 93(7), 1104-1109, 2003.
- 67) 須賀朋子, 森田展彰, 斎藤環: 中学生のための DV 予防教育プログラム開発と効果研究. 思春期学, 31(4), 384-393, 2013.
- 68) 須賀朋子, 森田展彰, 斎藤環: 思春期世代を教育する教員の DV の知識と予防教育への考え. 思春期学, 32(2), 265-271, 2014.
- 69) 春原由紀, 森田展彰, 古市志麻: ドメスティック・バイオレンスに曝された母子に対する同時並行グループプログラムの試み(その 2)ー子どもグループについてー. 子どもの虐待とネグレクト, 11, 81-89, 2009.
- 70) 武田道子, 大西和子: 高校生のデート DV に対する認識および経験の実態. 日本看護学会論文集, 地域看護, 42, 151-154, 2012.
- 71) Taylor, B.G., Stein, N.D., Mumford, E.A. & Woods, D.: Shifting Boundaries; An Experimental Evaluation of a Dating Violence Prevention Program in Middle Schools. *Prevention Science*, 14(1), 64-76, 2013.
- 72) 寺島 瞳, 宇井美代子, 宮前淳子, 竹澤みどり, 松井めぐみ: 大学生におけるデート DV の実態の把握. 筑波大学心理学研究, 45, 113-120, 2013.
- 73) 辻 龍雄, 加登田恵子, 山根俊恵, 小柴久子: DV 被害者に対する民間シェルターの実際の活動, 学校保健学会誌, 55(6), 507-512, 2014.
- 74) Tomoda, A., Polcari, A., Anderson, C.M., & Teicher, M.H.: Reduced visual context gray matter volume and thickness in young adults who witnessed Domestic Violence during childhood. *PLoS ONE* 7(12): e52528. doi: 10.1371/journal.pone.0052528, 2012.
- 75) 友田尋子, 高田昌代: わが国の看護教育における DV に関する教育の実態と教員意識調査, 大阪市立大学「大学教育」, 5(2), 13-21, 2008.
- 76) 東京都生活文化局: 若者層における交際相手からの暴力に関する調査報告書. 2013.
- 77) 堤かなめ, 横山美栄子: ドメスティック・バイオレンス (DV) に関する日本の現状と DV 教育の必要性ー小学校社会科における DV 防止プログラム導入の提案ー. アジア女性研究, 14, 63-71, 2005.
- 78) Tutty, L.M., Bidgood, B.A., Rothery, M.A. & Bidgood, P.: An evaluation of men's batterer treatment groups. *Research on social work practice*, 11, 645-670, 2001.
- 79) 植田由紀子, 安東由則: 高校生のデート DV に関する実態調査の分析ー予防教育活動の実践からー. 武庫川女子大学研究紀要臨床教育学研究, 16, 65-86, 2010.
- 80) Uthman, O.A., Lawoko S. & Moradi, T.: Factors associated with attitudes towards intimate partner violence against women, a comparative analysis of 17 sub-Saharan countries. *BMC International Health and Human Rights*, 9, 14, 2009.
- 81) Walker, L.E.: バダードウーマン. 斎藤学 [監訳], 金剛出版, 60-86, 1997.
- 82) Wolfe, D.A., Wekerle, C., Scott, K., Straatman, A., Grasley, C. & Reitzel-Jaffe, D.: Dating violence prevention with at-risk youth: A controlled outcome evaluation. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 71, 279-291, 2003.
- 83) Wolfe, D.A.: Preventing violence in relationships: Psychological science addressing complex social issues. *Canadian Psychology*, 47, 44-50, 2006.
- 84) Wolfe, D.A., Crooks, C.V., Chiodo, D. & Jaffe, P.: Child maltreatment, bullying, gender-based harassment, and adolescent dating violence: Making the connections. *Psychology of Women Quarterly*, 33, 21-24, 2009.
- 85) Weisz, A.N., Tolman, R.M., Callahan, M.R., Saunders, D.G. & Black B.M.: Informal helpers' responses when adolescents tell them about dating violence or romantic relationship problems. *Journal of Adolescence*, 30, 853-868, 2007.
- 86) Wolitzky-Taylor, K.B., Ruggiero, K.J., Danielson, C.K., Resnick H.S. & Kilpatrick D.G.: Prevalence and Correlates of Dating Violence in a National Sample of

引用文献

- Adolescens. *American Academy of Child and Adolescent Psychiatry*, 47(7), 755-762, 2008.
- 87) World Health Organization: Preventing intimate partner and sexual violence against women, *WHO Press*, 11-17, 2010.
- 88) Wu, J., Guo, S. & Qu, C.: Domestic violence against women seeking induced abortion in China. *Contraception*, 72, 117-121, 2005.
- 89) 山口のり子: デート DV をなくす若者のためのレッスン 7 愛する, 愛される, 梨の木舎, 18-28, 2004.
- 90) 山田典子, 山田真司: 高校生の Dating Violence の特性と課題, *母性衛生*, 51(2), 311-319, 2010.

表1-1 DV防止法の改正の流れ				
項目	2001年成立時	2004年改正	2008年改正	2014年
「配偶者からの暴力」の定義の拡大(第1条1項)	身体的暴力のみ	精神的暴力・性的暴力も含む(ただし保護命令の対象は身体的暴力のみ)第12条1項		
国・地方公共団体の責務(第2条)	被害者の保護中心	被害者の自立支援を明記(国=基本方針、都道府県=基本計画の策定)第2条の2,3)	・市町村に基本計画策定の努力義務(第2条の3)	
配偶者暴力相談センターに関する改正(第3条2、3項)		市町村の適切施設における支援センター機能を果たすことができる。一時保護	・市町村の適切な施設で支援センターとしての機能を果たすようにすることの努力義務 ・支援センターの業務として、被害者の緊急時の安全の確保の追加(一時保護のみの規定から)	
被害者が保護命令を申し立てることができる対象(第10条1項)	配偶者に対してのみ(事実婚も含む)	配偶者+元配偶者に対して(事実婚も含む)		配偶者+元配偶者に対して(事実婚も含む)+生活を共にする交際相手
退去命令の期間(第10条1項2号)	2週間	2か月(再度の申し立ても可能に)(第18条1項)		
退去命令の範囲(第10条1項2号)	住居からの退去のみ(被害者と共に生活の拠点としている場合に限る)	住居からの退去+住居付近の徘徊も禁止(被害者と共に生活の拠点としている場合に限る)		
電話等を禁止する保護命令(第10条2項)			禁止行為 1.面会の禁止 2.行動の監視に関する事項を告げること 3.著しく粗野・乱暴な言葉 4.無言電話、連続しての電話・ファクシミリ・電子メール 5.夜間(午後10時～午前6時)の電話・ファクシミリ・電子メール、6.汚物・動物の死体等の著しく不快又は嫌悪の情を催される物の送付、7.名誉を害する事項告げること、8.性的恥辱心を害する文面・図面の送付	
配偶者に対する接近禁止命令の対象(第10条3、4、5項)	被害者のみ	被害者+被害者と同居する子供	被害者+被害者と同居する子供+被害者の親族等	
裁判所への保護命令の申し立て(第11,12条)	身体に対する暴力		身体に対する暴力+生命等に対する脅迫	
警察本部長等の援助(第8条2項)		被害の発生を防止するための必要な援助を行うと明記		
外国人・障害者などへの配慮(第23条1項)		外国人・障害者等への対応を明記		

表4-1 質問紙調査の対象者

	中学1年	中学2年	中学3年	高校1年	高校2年
男子	55	57	50	39	37
女子	61	61	61	38	35
合計	116	118	111	77	72

数字はn数

表4-2 DVの知識に関する質問項目

Q1.DVという言葉は知っている。

Q2.DVとはどういうものなのか知っている。

Q3.身近(家族、親族)で暴力やDVの話を聞いたことがある。

Q1,Q2は4件法 あてはまる、少しあてはまる、あまりあてはまらない、あてはまらない

Q3. 2件法 有・無

表4-3 DVIにつながる考え方

-
- *1. 暴力を振るわれるのは振るわれる方にも原因がある。
 - *2. 好きな相手なら、暴力を振るわれても許してあげるべきだ。
 - 3. ひどい言葉や大声で怒鳴る事も暴力である。
 - 4. 相手を脅すために、物を投げたり、わざと大きな音をたてるのは暴力だ。
 - 5. 自分の考えを押し付けたり、無理じいするのは暴力だ。
 - *6. 好きな相手に「いつも2人だけでいよう」と言われたら従うべきだ。
 - *7. 男性は女性を常に、リードするべきだ。
 - *8. 好きな人には、嫌われたくないので意見を合わせる方が良い。
 - *9. 好きなら何があっても相手を最優先するのは普通だ。
 - 10. 自分が傷つけられる事をされたら目上の人や好きな人にもNoと言って良い。
- そう思う4点, 少しそう思う3点, あまりそう思わない2点, そう思わない1点
- *逆転項目 そう思う1点, 少しそう思う2点, あまりそう思わない3点, そう思わない4点

表4-4 中学生・高校生のDVの知識

	性差 <i>p</i> 値	<i>p</i> 値	学年差 多重比較
1.DVという言葉は知っている	n.s.	***	中1<中2、中3、高1、高2
2.DVとはどういうものなのか知っている	n.s.	***	中2<中3、高1、高2 中2>中1

****p*<.001 n.s.=not significant 性差: Mann-Whitney U検定

学年差: Kruskal- Wallis検定

多重比較: Bonferroniの調整

表4-5 身近(家族、親族)での暴力・DVの見聞

	中学n=335 n (%)	高校n=78 n(%)	総計n=413 n(%)
有	23(7.0)	8(10.3)	31(7.6)
無	312(93.0)	70(89.7)	382(92.4)

表4-6 中学生・高校生のDVにつながる考え方因子分析結果

	F1	F2	因子名・α 係数
*8.好きな人には嫌われたくないので意見を合わせる方が良い	0.706	-0.036	関係性
*9.好きななら何があっても相手を最優先するのが普通だ	0.689	0.021	α 係数0.71
*7.男性は女性を常に、リードするべきだ。	0.647	0.015	平均9.14, SD 1.99
4.相手を脅すために物を投げたりわざと大きな音をたてるのは暴力だ	0.011	0.846	威圧的行為
3.ひどい言葉や大声で怒鳴る事も暴力である	0.015	0.675	α 係数0.76
5.自分の考えを押し付けたり無理強いするのは暴力だ	0.004	0.633	平均9.49, SD 2.08
*は逆転項目	因子間相関		-0.12

平均, SDは単純加算で算出, 最大値12, 最小値3.

表4-7 「DVIにつながる考え方の因子」の性差、学年差

		関係性因子 M±SD	威圧行為因子 M±SD
女子 n=256	中1 n=61	9.22±2.00	9.61±2.12
	中2 n=61	9.42±2.03	10.04±2.05
	中3 n=61	9.28±1.79	10.13±1.47
	高1 n=38	9.57±1.98	10.34±1.49
	高2 n=35	9.45±1.85	9.00±2.20
男子 n=238	中1 n=55	9.26±2.11	8.76±1.98
	中2 n=57	8.60±1.87	9.04±1.89
	中3 n=50	8.60±2.34	9.22±2.47
	高1 n=39	9.45±1.51	9.33±2.47
	高2 n=37	8.68±2.07	9.26±2.23
主効果	性 F値	6.68 *男<女	14.00 ***男<女
	学年 F値	1.18 n.s.	1.98 n.s.
交互作用	F値	1.00 n.s.	1.38 n.s.
平均值得点は12点満点 * $p<.05$,		*** $p<.001$,	n.s.=not significant

表4-8 身近(家族・親族)でのDVの見聞と因子

身近(家族・親族) のDVの見聞	関係性因子 M±SD	威圧行為因子 M±SD
見聞あり n=31	9.23±2.40	9.68±1.72
見聞なし n=382	9.11±1.96	9.59±2.02
有無の比較t値	n.s.	n.s.
平均值得点は12点満点		n.s.=not significant

表5-1 対象教員の年代

	女 n=165	男 n=79	合計 n=244	%
年代				
20代	10	5	15	6.2
30代	37	29	66	27.0
40代	66	28	94	38.5
50代~70代	52	17	69	28.3

%は年代別の人数の割合

表5-2 対象者の校種

		合計n=244	%
年代	小学校	90	36.9
	中学校	77	31.6
	高校	34	13.9
	特別支援学校	43	17.6

%は校種別の人数の割合

表5-3 DVに関することの経験

- 1.DV被害を受けたことがありますか
- 2.DVに関する講習や授業を受けたことがありますか
- 3.DVに関する勉強(本など)をしたことがありますか

有・無の2件法

表5-4 DVの知識

Q1.DVという言葉は知っている。

Q2.DVとはどういうものなのか知っている。

あてはまる4点, 少しあてはまる3点, あまりあてはまらない2点, あてはまらない1点

表5-5 DVの特徴に関する理解

*1.DVは相手とのケンカが原因で起こる。

*2.女性から男性への暴力はDVではない。

3.DVは恋人同士などの間でも起こる。

4.DVは、怒りで、衝動的に起こるものではなく、暴力という方法を選んでいる。

5.DVの本質は相手を支配することである。

6.DV被害は、身近で誰にでも起こりうることである。

7.DVの加害者は暴力を振った後、謝ることもあるが再び暴力を振うことが多い。

そう思う4点, 少しそう思う3点, あまりそう思わない2点, そう思わない1点

*逆転項目 そう思う1点, 少しそう思う2点, あまりそう思わない3点, そう思わない4点

表5-6 DV予防についての意見

1.DV予防の授業を、中学生や高校生の時に受けてみたかった。

2.DV予防を中学や高校の授業の中で実施した方が良い。

そう思う4点, 少しそう思う3点, あまりそう思わない2点, そう思わない1点

表5-7 DVにつながる考え方

- *1. 暴力を振るわれるのは振るわれる方にも原因がある。
 - *2. 好きな相手なら、暴力を振るわれても許してあげるべきだ。
 - 3. ひどい言葉や大声で怒鳴る事も暴力である。
 - 4. 相手を脅すために、物を投げたり、わざと大きな音をたてるのは暴力だ。
 - 5. 自分の考えを押し付けたり、無理じいするのは暴力だ。
 - *6. 好きな相手に「いつも2人だけでいよう」と言われたら従うべきだ。
 - *7. 男性は女性を常に、リードするべきだ。
 - *8. 好きな人には嫌われたくないので意見を合わせる方が良い。
 - *9. 好きなら何があっても相手を最優先するのは普通だ。
 - 10. 自分が傷つけられる事をされたら目上の人や好きな人にもNoと言って良い。
-

そう思う4点, 少しそう思う3点, あまりそう思わない2点, そう思わない1点

*逆転項目 そう思う1点, 少しそう思う2点, あまりそう思わない3点, そう思わない4点

表5-8 DVに関することの経験

	1.被害経験		2.授業や講習を受けた経験		3.本などでの学習経験	
	有	無	有	無	有	無
女n=165	20(12.1)	145(87.9)	51(30.9)	114(69.1)	60(36.4)	105(63.6)
男 n=79	3(3.8)	76(96.2)	21(26.6)	58(73.4)	25(31.6)	54(68.4)
合計n=244	23(8.0)	221(92.0)	72(28.8)	172(71.2)	85(34.0)	159(66.0)

数字は人数、()内は%

表5-9 教員のDVIにつながる考え方因子分析結果

	F1	F2	因子名・α 係数
*6好きな相手に「いつも2人だけでいよう」と言われたら従うべきだ	0.597	0.071	関係性
*7.男性は女性を常に、リードするべきだ。	0.657	-0.040	α 係数0.77
*8.好きな人には嫌われたくないので意見を合わせる方が良い	0.606	-0.031	M 13.77, SD 2.76
*9.好きなら何があっても相手を最優先するのが普通だ	0.798	0.015	
3.ひどい言葉や大声で怒鳴る事も暴力である	-0.057	0.822	威圧的行為
4.相手を脅すために物を投げたりわざと大きな音をたてるのは暴力だ	-0.033	0.976	α 係数0.88
5.自分の考えを押し付けたり無理強いするのは暴力だ	0.104	0.751	M 10.56, SD 2.20
*は逆転項目 n=244	因子間相関 .043		

M(平均), SD(偏差値)は単純加算で算出

関係性は最大値16、最小値4

威圧的行為は最大値12、最小値3

表5-10 DVにつながる考え方の因子と性差、因子とDVに関することの経験差

	性差			DV被害経験			DVの講習や授業を受けた経験			DVの本などでの勉強		
	女n=165	男n=79	p値	有n=23	無n=221	p値	有n=72	無n=172	p値	有n=84	無n=159	p値
関係性	14.13±2.34	13.03±2.57	**	13.78±3.12	13.77±2.40	n.s.	14.42±2.02	13.51±2.59	**	14.41±2.32	13.43±2.48	**
威圧行為	10.68±2.26	10.31±2.09	n.s.	10.17±2.84	10.60±2.14	n.s.	10.65±2.11	10.52±2.53	n.s.	10.87±2.08	10.39±2.26	n.s.
関係性の平均値は最大値16、最小値4			威圧行為は平均値は最大値12、最小値4			t検定	**p<.01	n.s.=not significant				

表6-1 Love U2: Relationship smarts plus の内容	
題名	概要
Lesson 1. Who am I and where am I going?	今までの生き立ちのふりかえりとこれからの自分について
Lesson 2. Maturity issues and what I value?	成長と共に自分の価値を確かめる
Lesson 3. Attractions and infatuation	相性(魅力や夢中になるもの)を確かめる
Lesson 4. Principles of smart relationships	賢い関係性、愛の側面について
Lesson 5. Is it a healthy relationship?	関係性について、特に悪い関係性について
Lesson 6. Decide, don't slide!	家族の関係性のパターンを調べてみる、決心とは、巻き込まれないようにするためには
Lesson 7. Dating violence and breaking up	危険なサインとは、早めに気付くためには、友達を助けるということ、助けを求めるということ
Lesson 8. Communication and healthy relationships	家族から学んだコミュニケーションのパターンをふりかえる、危険なコミュニケーションのサイン、怒りとタイムアウトのとりかたなど
Lesson 9. Communication challenges and more skills	問題解決の仕方、不満と問題を効果的にとらえる方法、関係性を大切にすること
Lesson 10. Sexual decision-making	自分のセーフティーゾーン、断るスキル
Lesson 11. Unplanned pregnancy through the eyes of a child	望まぬ妊娠など
Lesson 12. Teens, Technology and social media	メディアで取り上げられているロマンティックな恋の危険、まとめ

表6-2 DV予防プログラムの内容

課	ねらい	表6-1 (Love U2から参考にした部分)
1.人との出会いについて	・人間関係について考え、尊重の意味を考える	
2.人を尊重するってどういうこと?		
3.人を尊重できない人ってどういう人?	・尊重ができない人の行動は暴力へつながっていくことを教える	
4.こんな時、どうしますか? 男の子の立場、女の子の立場	・story tellingでデートDVに繋がる場面を提示し問題提起をする	Lesson 8
5.関係性について	・お互いを大切にすることとはどういうことかを話し合う	Lesson 4, Lesson 5
6.暴力とは何か	・暴力の本質は相手を支配することであることに気付かせる	
7.暴力の種類について	・身体的、精神的、経済的、性的暴力について問題提起する	
8.暴力のサイクルについて	・Walker氏が発案した暴力のサイクルについて教える	
9.DVとは何か	・暴力のなかでもDVが持つ特殊性について提示する	Lesson 7
10.DV被害者の割合について	・DV被害者数の統計を提示する	
11.身近でDVが起きていたらどうすればよいか	・暴力に気付くことが大切であることを伝える	Lesson 7
12.DVの電話相談窓口の紹介	・DVの電話相談窓口を教える	
13.子供への影響について	・Kaufman氏の研究論文から子供への暴力の悪影響について教える	
14.お互いを尊重できる会話を作ろう	・尊重のある会話のロールプレイを作成して、どのような言葉が相手への尊重になるかを考える	Lesson 9
15.ロールプレイ(自分たちで作成したお互いの尊重のある会話の発表)		

表6-3 DVにつながる考え方

- *1. 暴力を振るわれるのは振るわれる方にも原因がある。
- *2. 好きな相手なら、暴力を振るわれても許してあげるべきだ。
- 3. ひどい言葉や大声で怒鳴る事も暴力である。
- 4. 相手を脅すために、物を投げたり、わざと大きな音をたてるのは暴力だ。
- 5. 自分の考えを押し付けたり、無理じいするのは暴力だ。
- *6. 好きな相手に「いつも2人だけでいよう」と言われたら従うべきだ。
- *7. 男性は女性を常に、リードするべきだ。
- *8. 好きな人には、嫌われたくないので意見を合わせる方が良い。
- *9. 好きなら何があっても相手を最優先するのは普通だ。
- 10. 自分が傷つけられる事をされたら目上の人や好きな人にもNoと言って良い。

そう思う4点, 少しそう思う3点, あまりそう思わない2点, そう思わない1点

*逆転項目 そう思う1点, 少しそう思う2点, あまりそう思わない3点, そう思わない4点

表6-4 介入群中学生の因子内比較

		関係性因子 M±SD	威圧行為因子 M±SD
女子	(プログラム前)	9.53±1.96	10.07±1.91
	(プログラム後)	10.13±1.83	10.99±1.76
	(1ヶ月後)	10.08±1.94	10.37±2.19
男子	(プログラム前)	9.05±2.13	9.07±2.15
	(プログラム後)	9.72±1.98	10.55±1.83
	(1ヶ月後)	9.62±1.98	9.61±2.75
主効果	性 F値	12.50 ***	19.50***
	測定時点 F値	29.12 ***	15.14***
		男<女	男<女
		プロ前<プロ後	プロ前<プロ後
			1か月後<プロ後
交互作用	F値	1.11 n.s.	0.74 n.s.

平均值得点は4点満点 ***p<.001 n.s.=not significant

2要因分散分析(混合計画)

表7-1 プログラム後の質問

- 1.「DVを知る」の授業は将来、役に立つと思う。
 - 2.今後もDVの授業があったら受けたと思う。
 - 3.DVとは自分が思っていた事より身近に起こる事がわかった。
 - 4.DVについての授業の内容を友人や家族に伝えたいと思う。
 - 5.これからの生活の中で人とより良い関係を築くために尊重をしたいと思う。
-
- そう思う, 少しそう思う, あまりそう思わない, そう思わない, の4件法

表7-2 1か月後の質問

1.DVを知るのプログラムは自分に良い影響を与えている。

2.暴力のサイクルの構造を覚えている。

そう思う, 少しそう思う, あまりそう思わない, そう思わない, の4件法

表7-3 中学生のプログラム後調査

	性差 <i>p</i> 値	学年差 <i>p</i> 値	多重比較
1.DVの授業は将来、役に立つと思う	n.s.	n.s.	
2.今後もDVの授業があったら受けたい	*男<女	n.s.	
3.DVとは自分が思っていたより身近でおこることがわかった	n.s.	n.s.	
4.DVについての授業の内容を友人や家族に伝えたいと思う	n.s.	n.s.	
5.これからの生活の中で人とより良い関係を築くために「尊重」をしたいと思う	*男<女	*	中1<中3

**p*<.05

n.s.=not significant

性差：Mann-Whitney U検定

学年差：Kruskal-Wallis検定

多重比較：Bonferroni の調整

表7-4 中学生の1か月後の調査

	性差 <i>p</i> 値	学年差 <i>p</i> 値	多重比較
1.DVのプログラムは自分に良い影響を与えている	n.s.	n.s.	
2.暴力のサイクルの構造を覚えている	n.s.	***	中1<中3、中2<中3

****p*<.001 n.s.=not significant

性差: Mann-Whitney U検定
 学年差: Kruskal-Wallis検定

多重比較:
Bonferroniの調整



図 1-1 暴力の 1 つである DV、デート DV

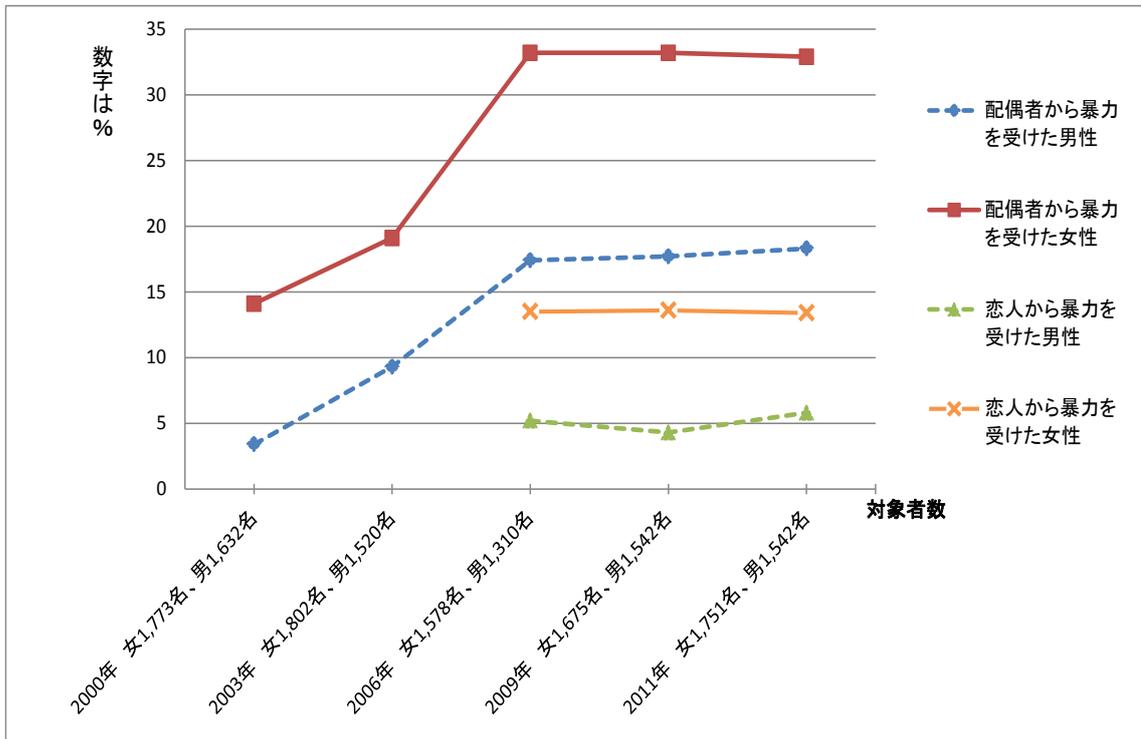


図 1-2 内閣府（旧総理府）の調査からの被害者の推移

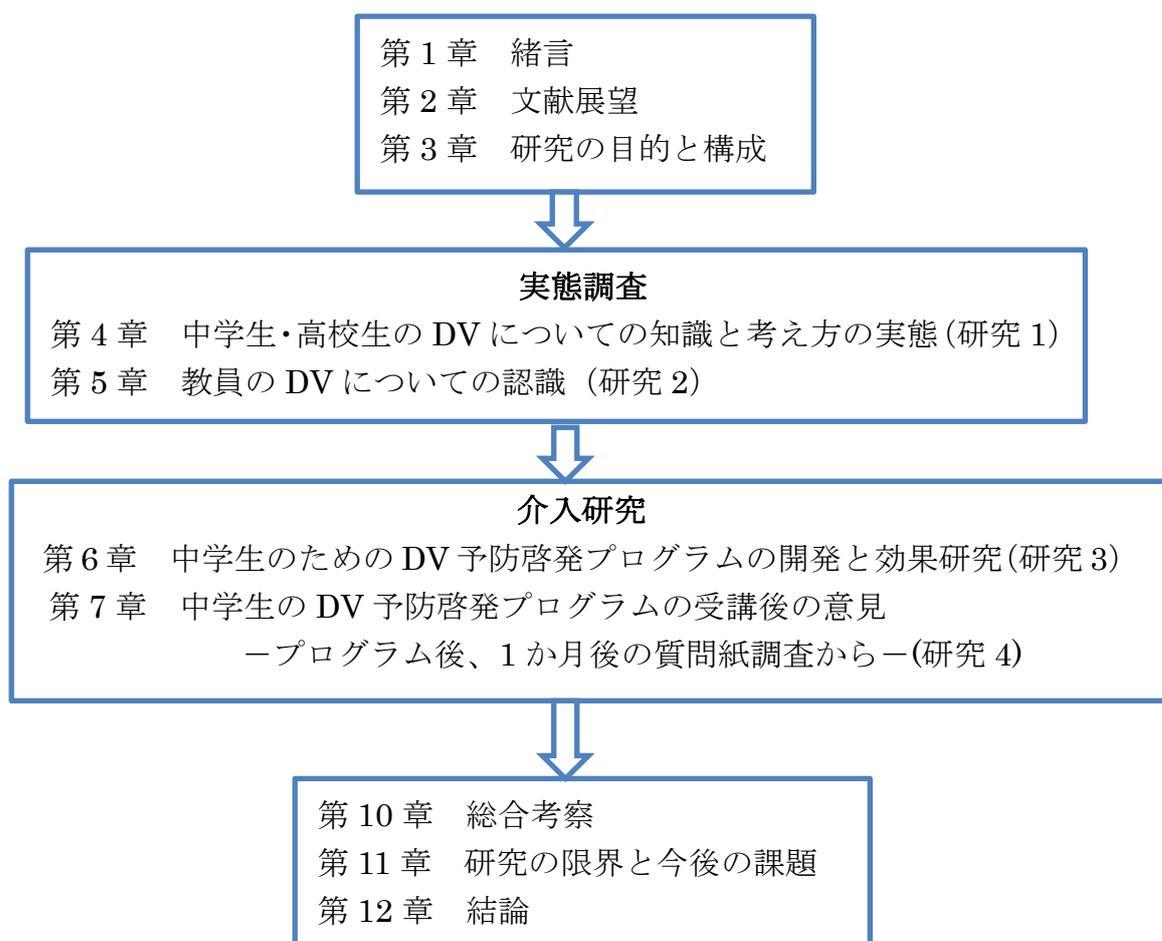


図 3-1 論文の構成

表・図

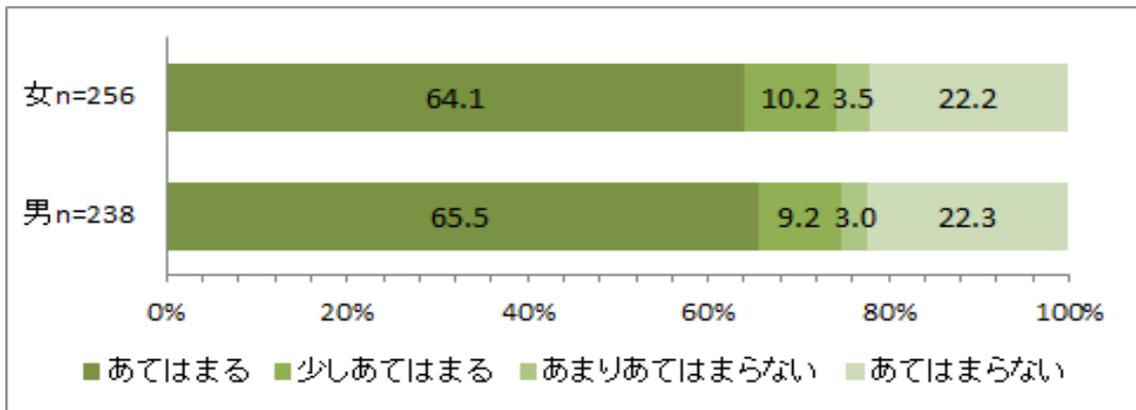


図 4-1 「Q1.DV という言葉は知っている」の性差

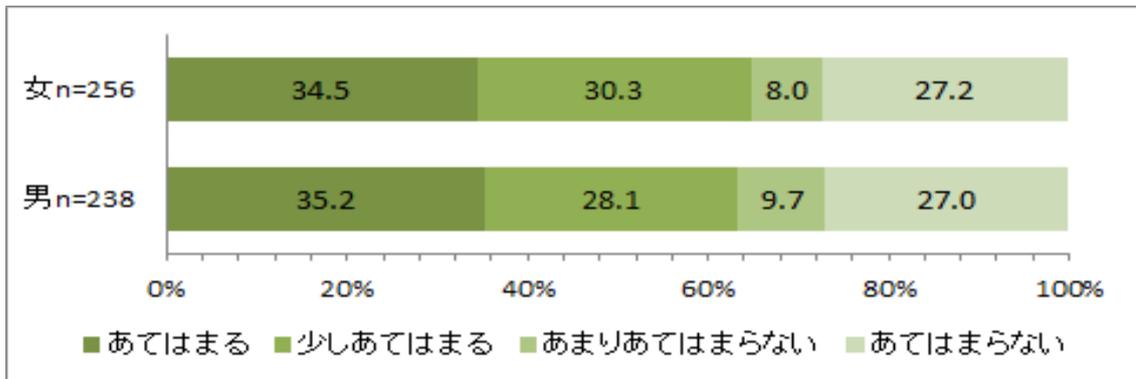


図 4-2 「Q2.DV とはどのようなものなのか知っている」の性差

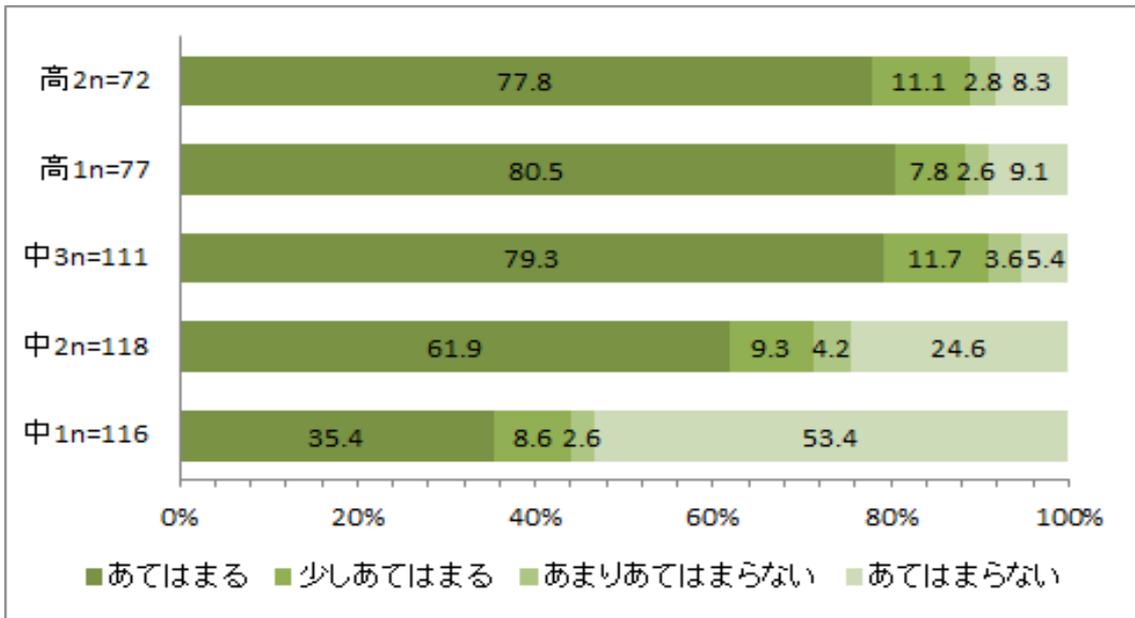


図 4-3 「Q1.DV という言葉は知っている」学年差

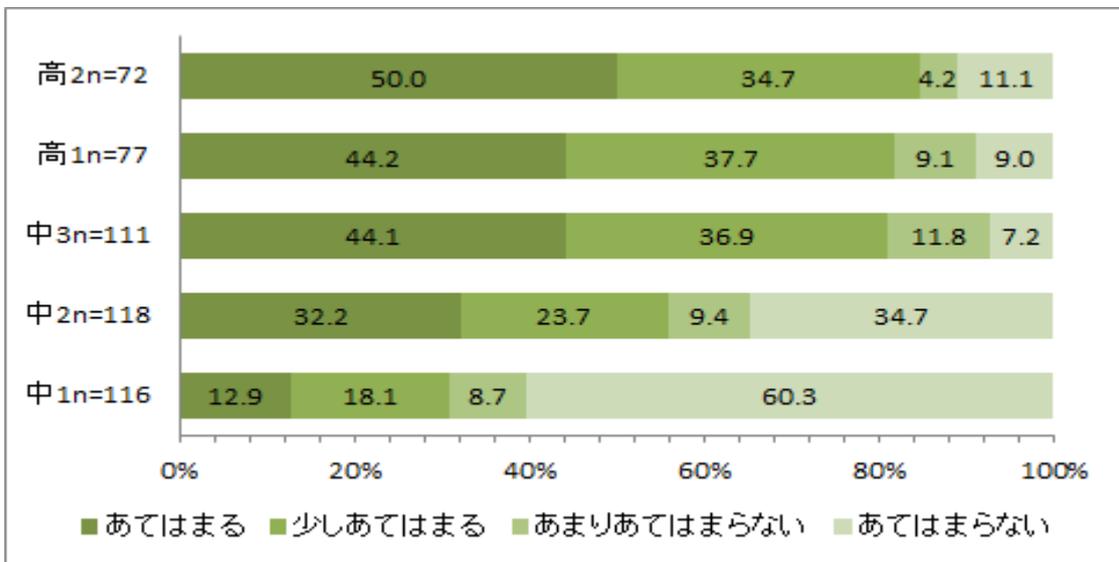


図 4-4 「Q2.DV とはどのようなものなのか知っている」学年差

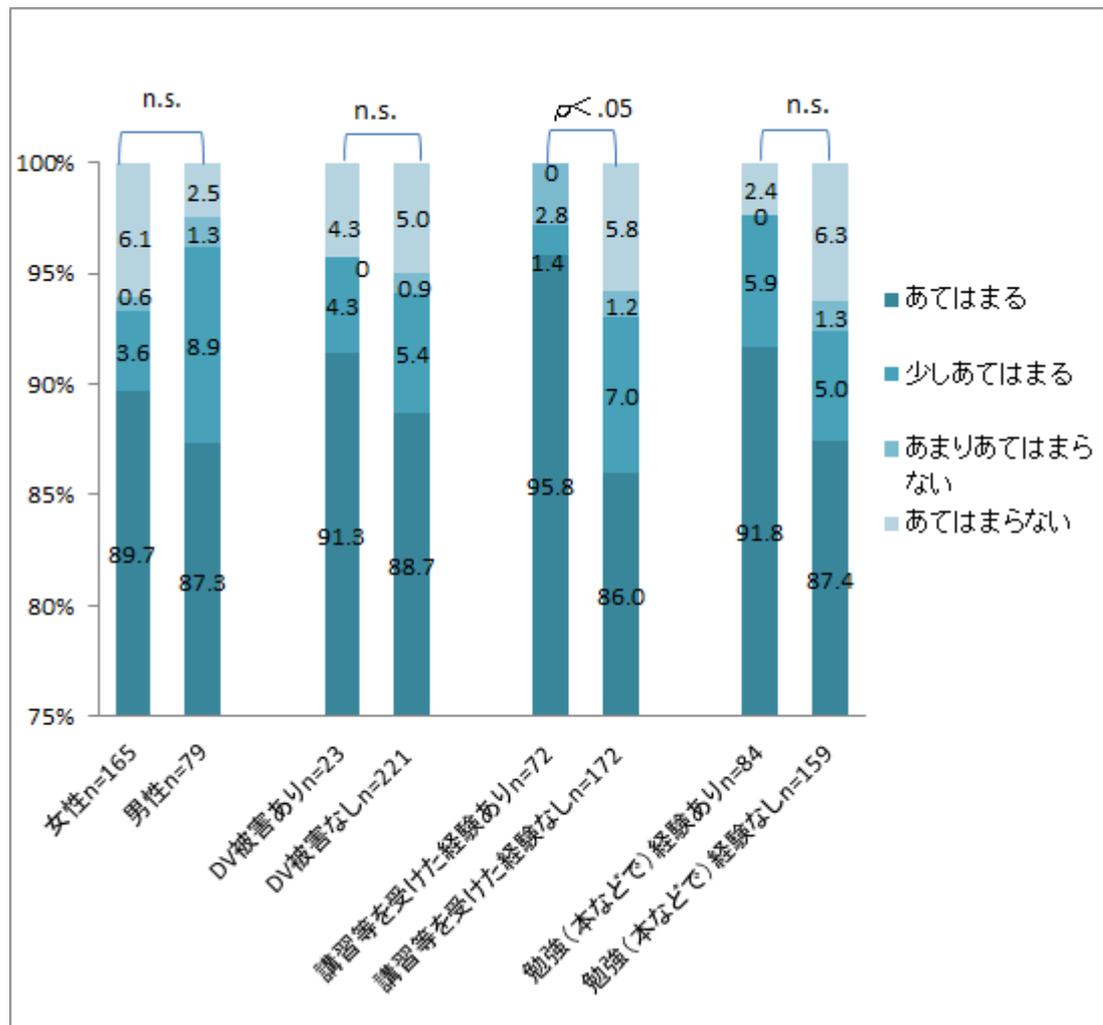


図 5-1 DV という言葉は知っている
Mann-Whitney U 検定 (数字は%)

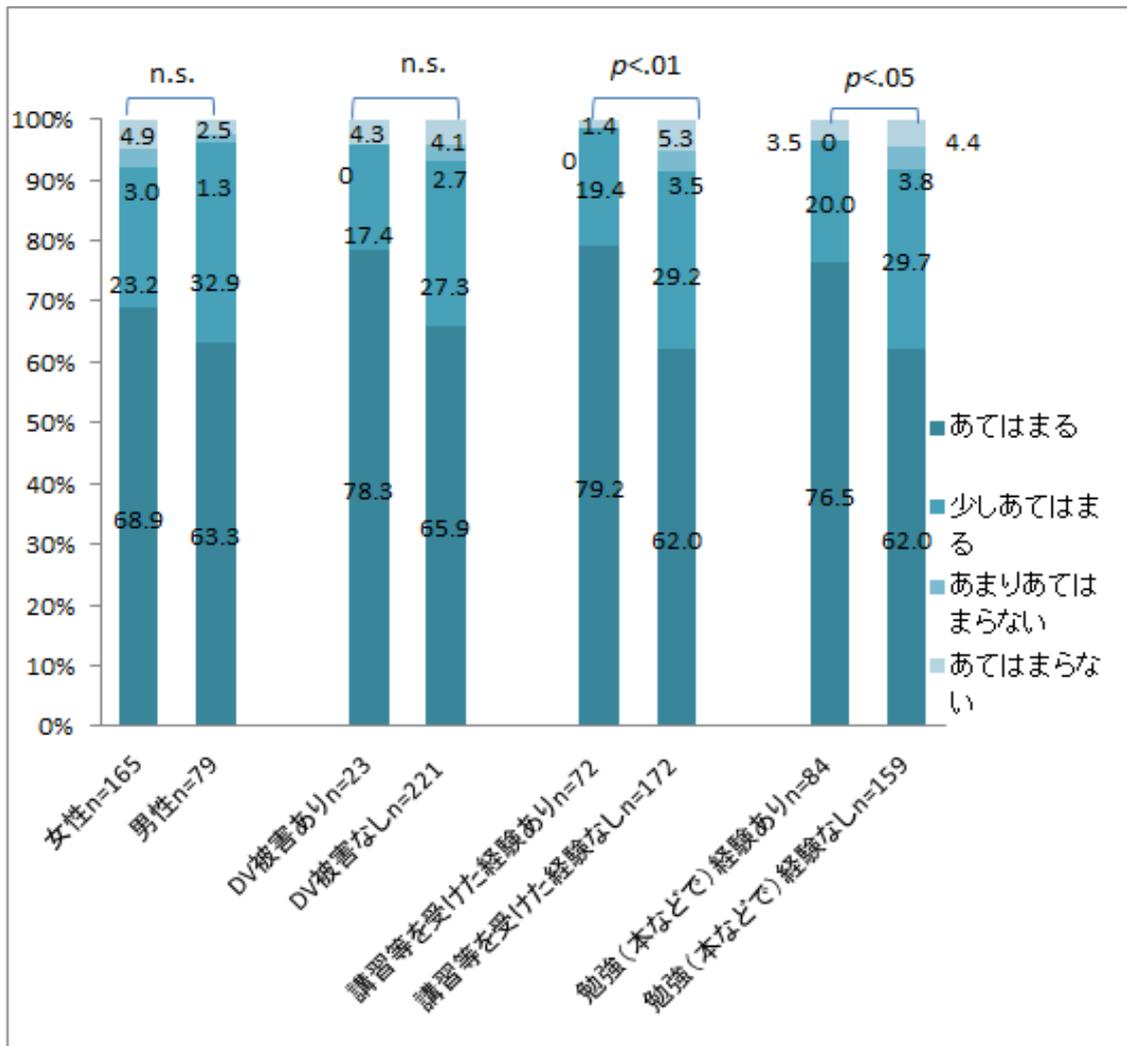


図 5-2 DV とはどのようなものなのか知っている
Mann-Whitney U 検定 (数字は%)

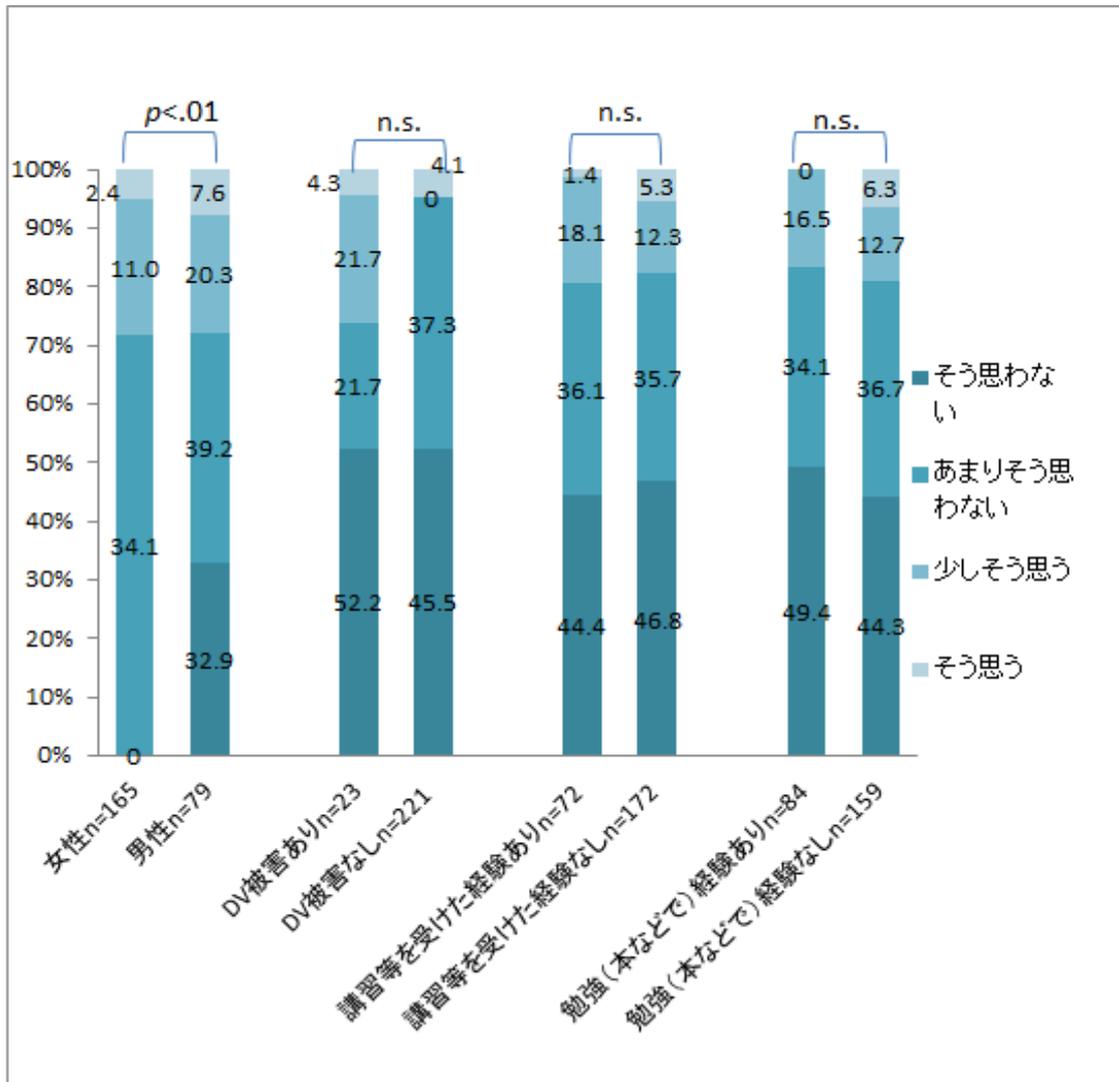


図 5-3 DV は相手との喧嘩が原因でおこる

Mann-Whitney U 検定 (数字は%)

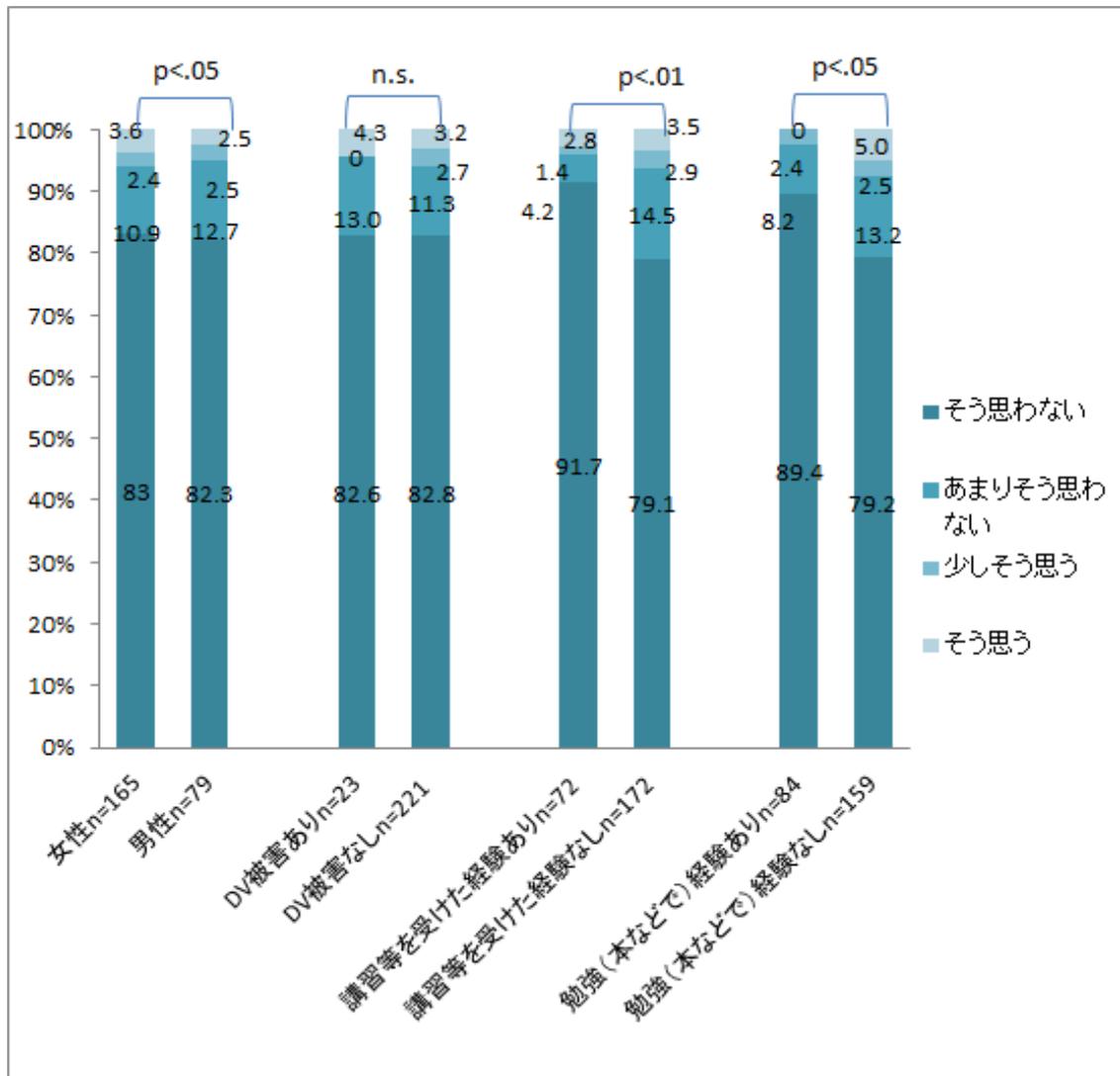


図 5-4 女性から男性への暴力は DV ではない
Mann-Whitney U 検定 (数字は%)

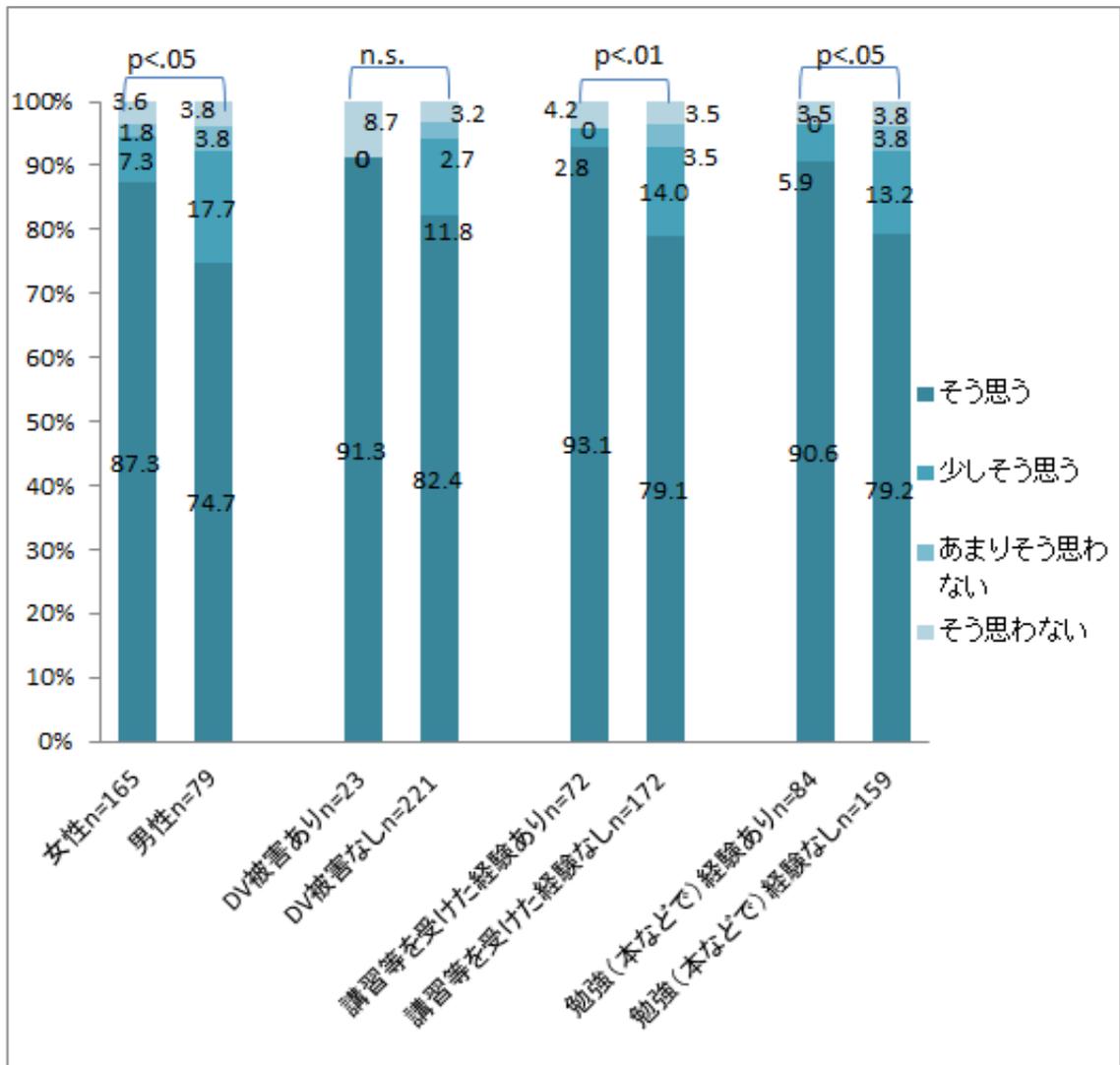


図 5-5 DV は恋人同士の間でもおこる

Mann-Whitney U 検定 (数字は%)

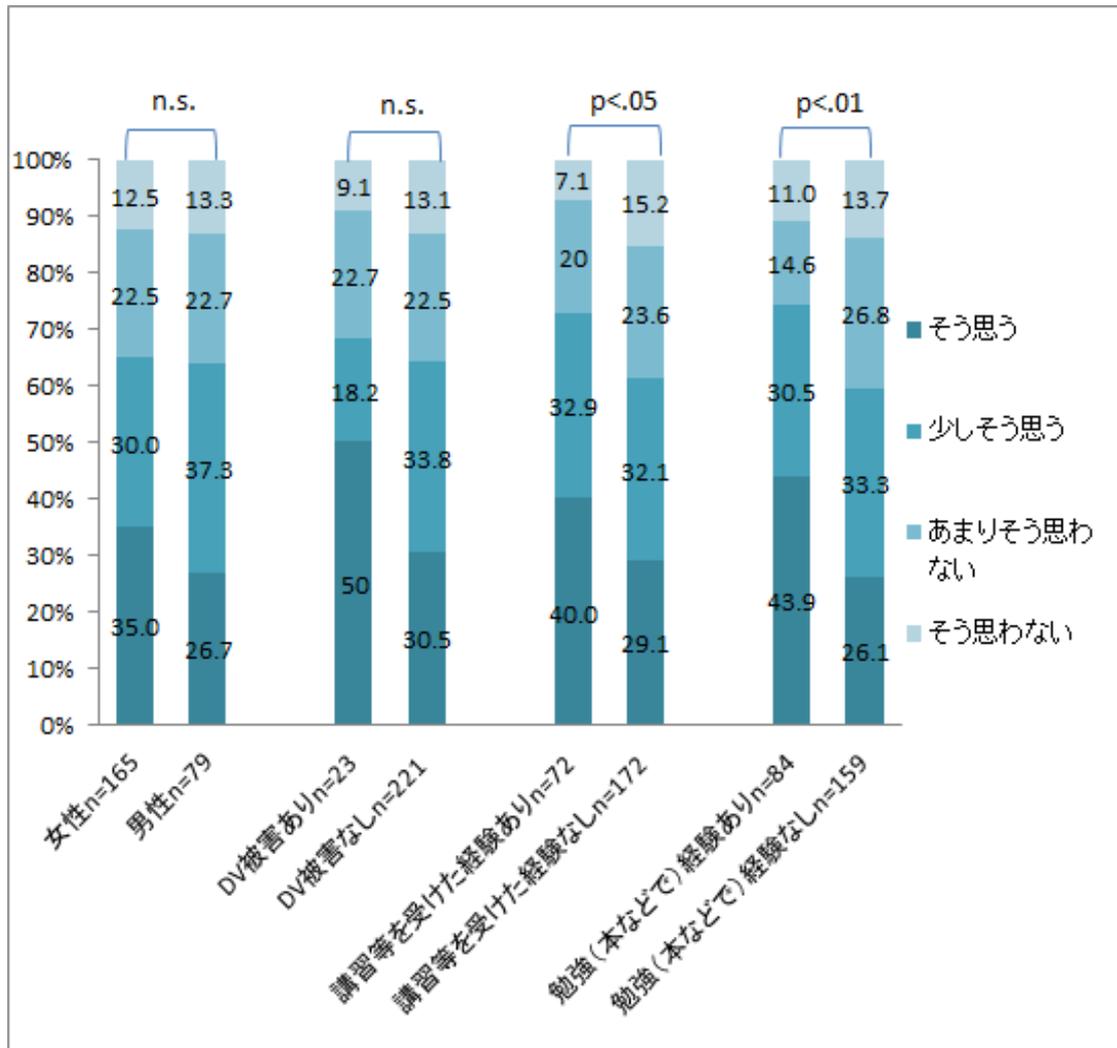


図 5-6 DV は怒りで衝動的に起こるものではなく暴力という方法を選んでいる
Mann-Whitney U 検定 (数字は%)

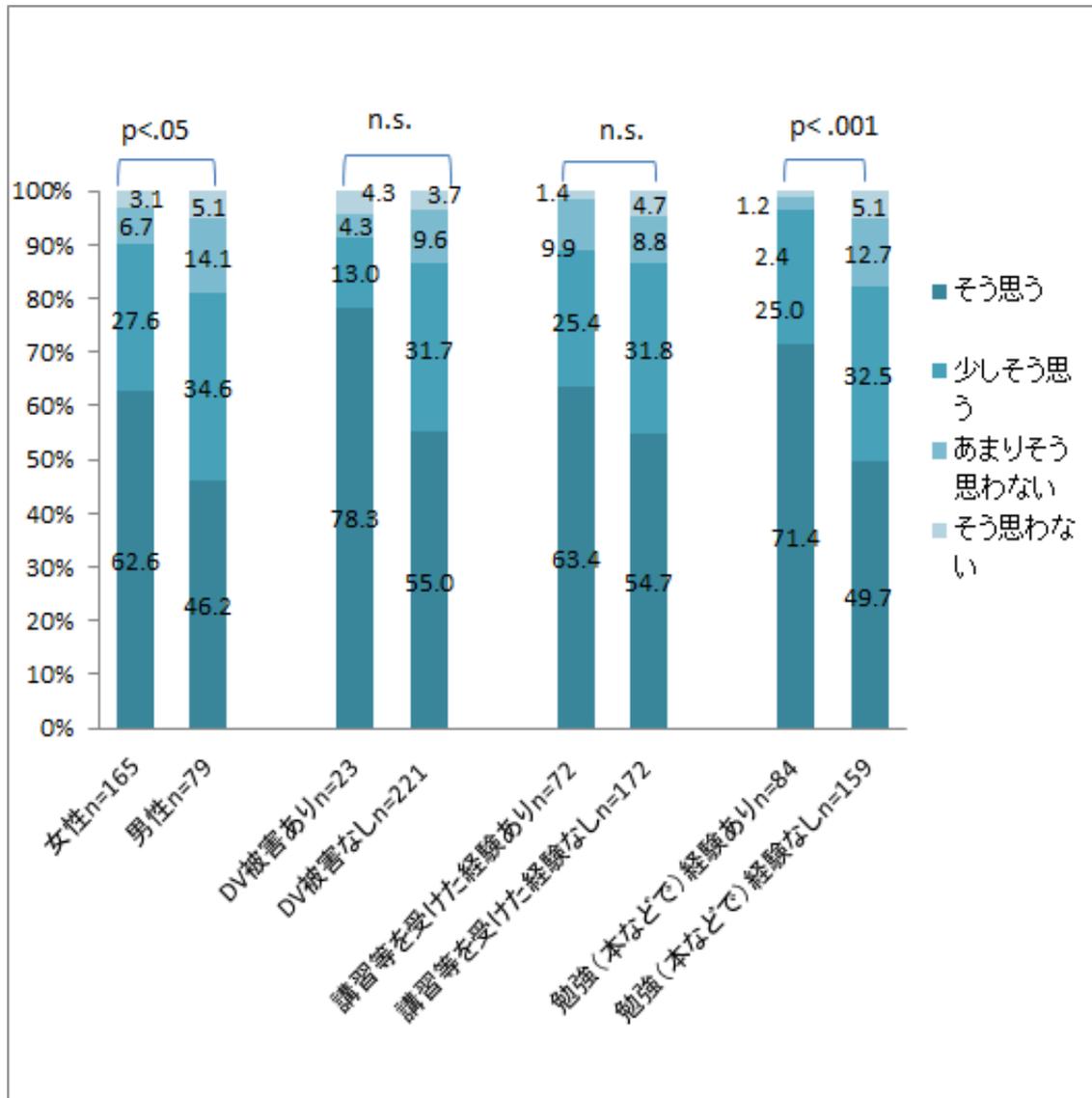


図 5-7 DVの本質は相手を支配することである
Mann-Whitney U 検定 (数字は%)

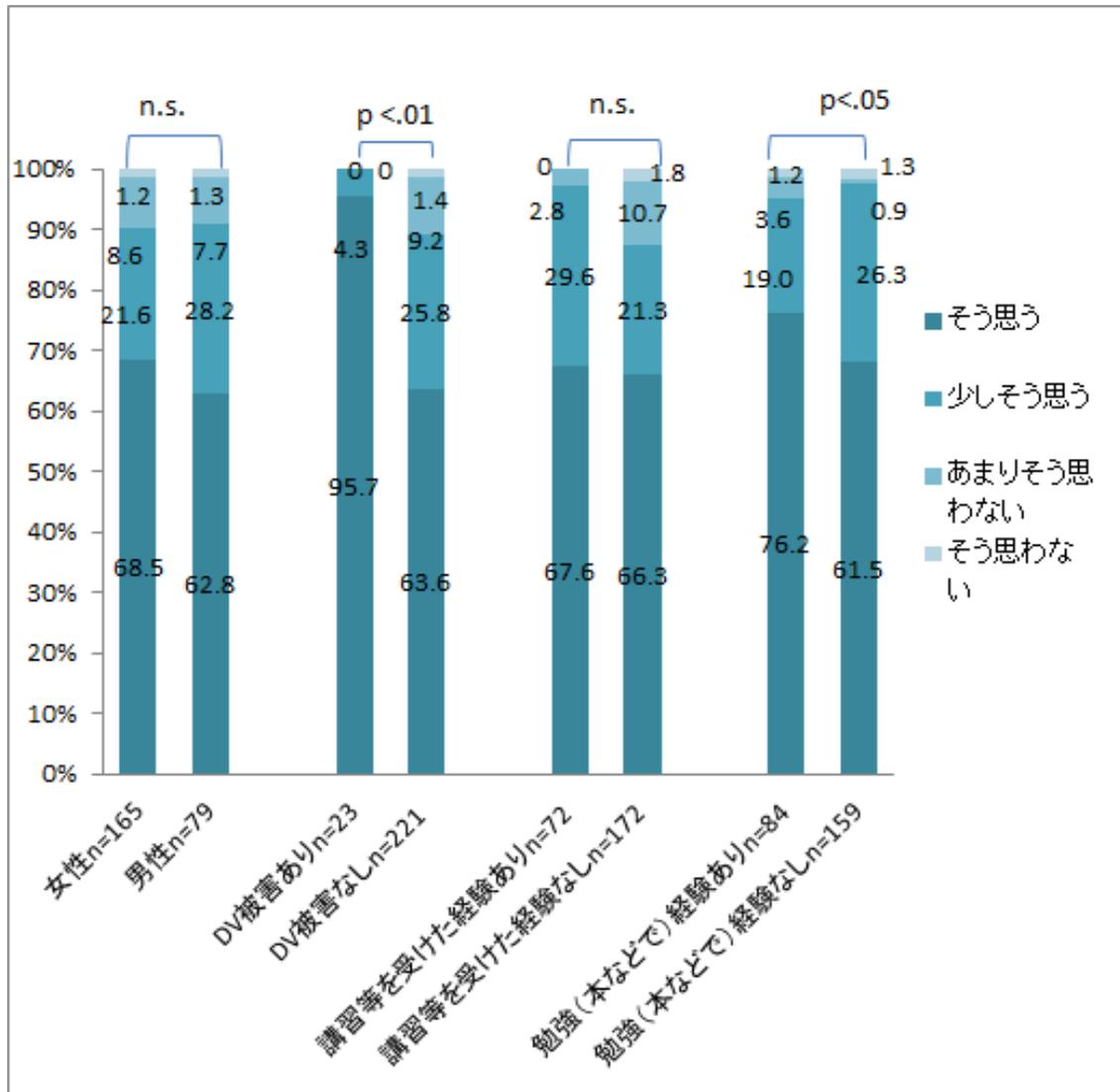


図 5-8 DV被害は身近で誰にでも起こりうることである
Mann-Whitney U 検定 (数字は%)

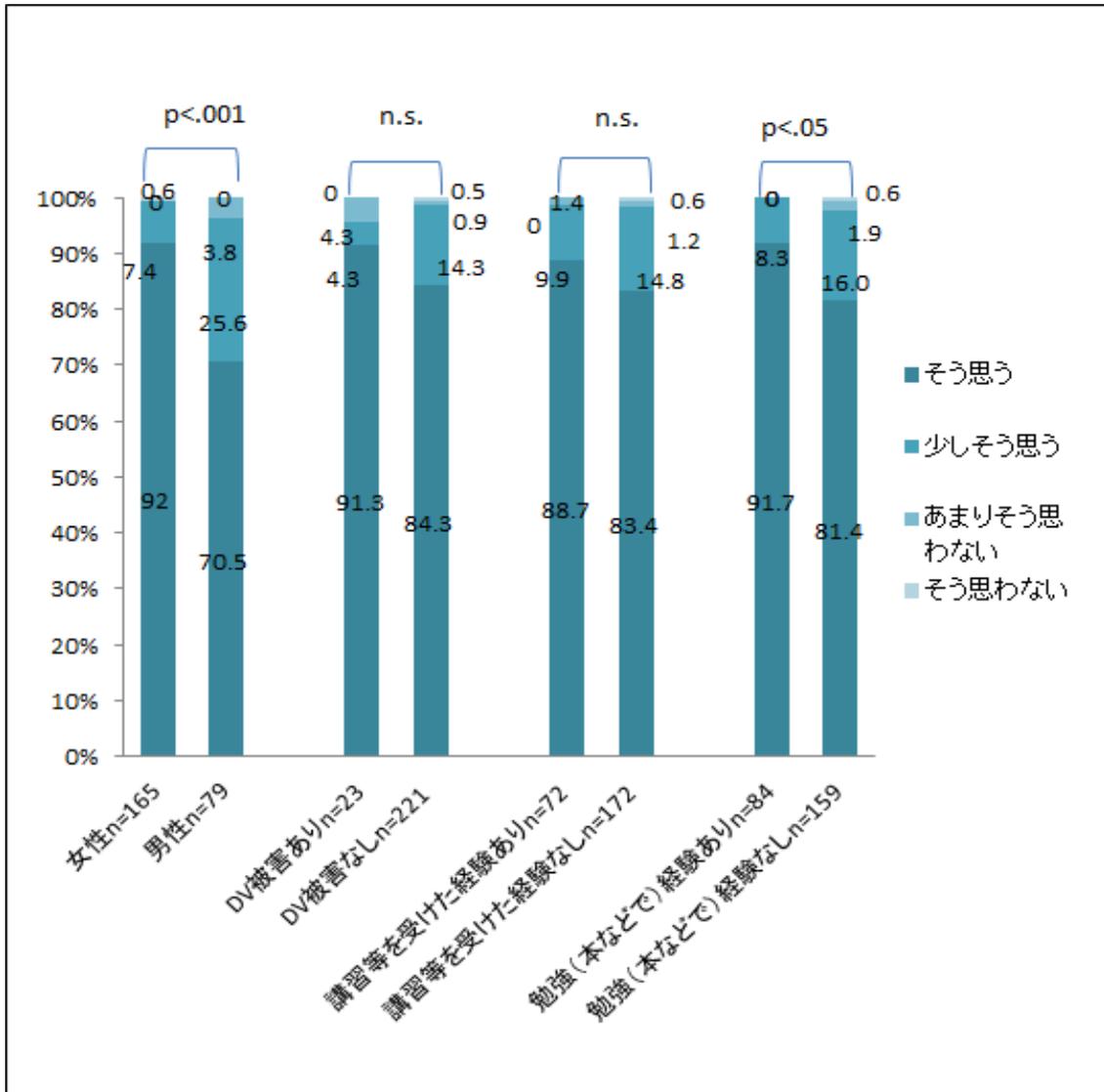


図 5-9 DV 加害者は暴力を振ったあと謝ることもあるが再び暴力を振ることが多い
Mann-Whitney U 検定 (数字は%)

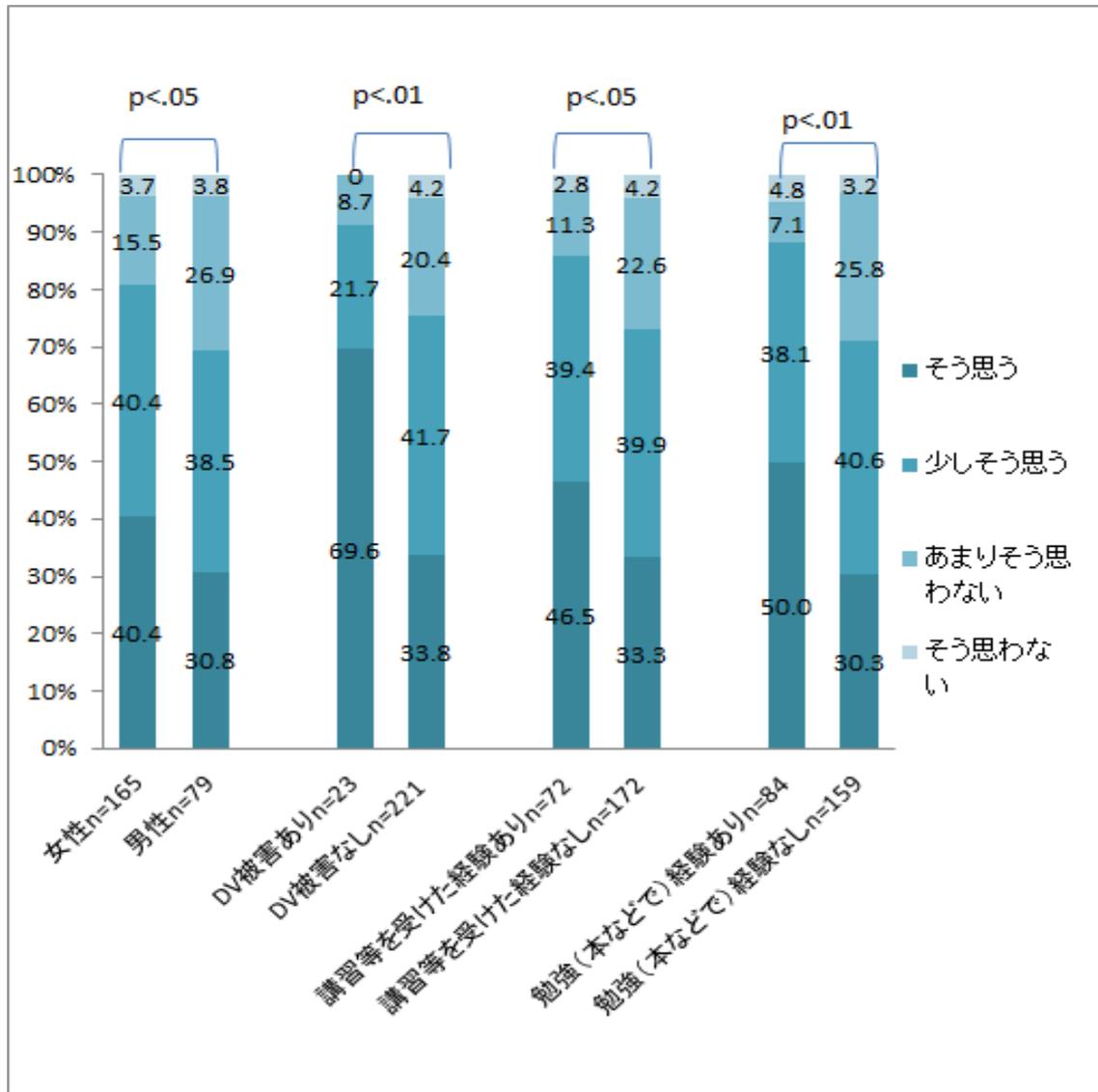


図 5-10 DV 予防の授業を中学生や高校生の時、受けてみたかった Mann-Whitney U 検定 (数字は%)

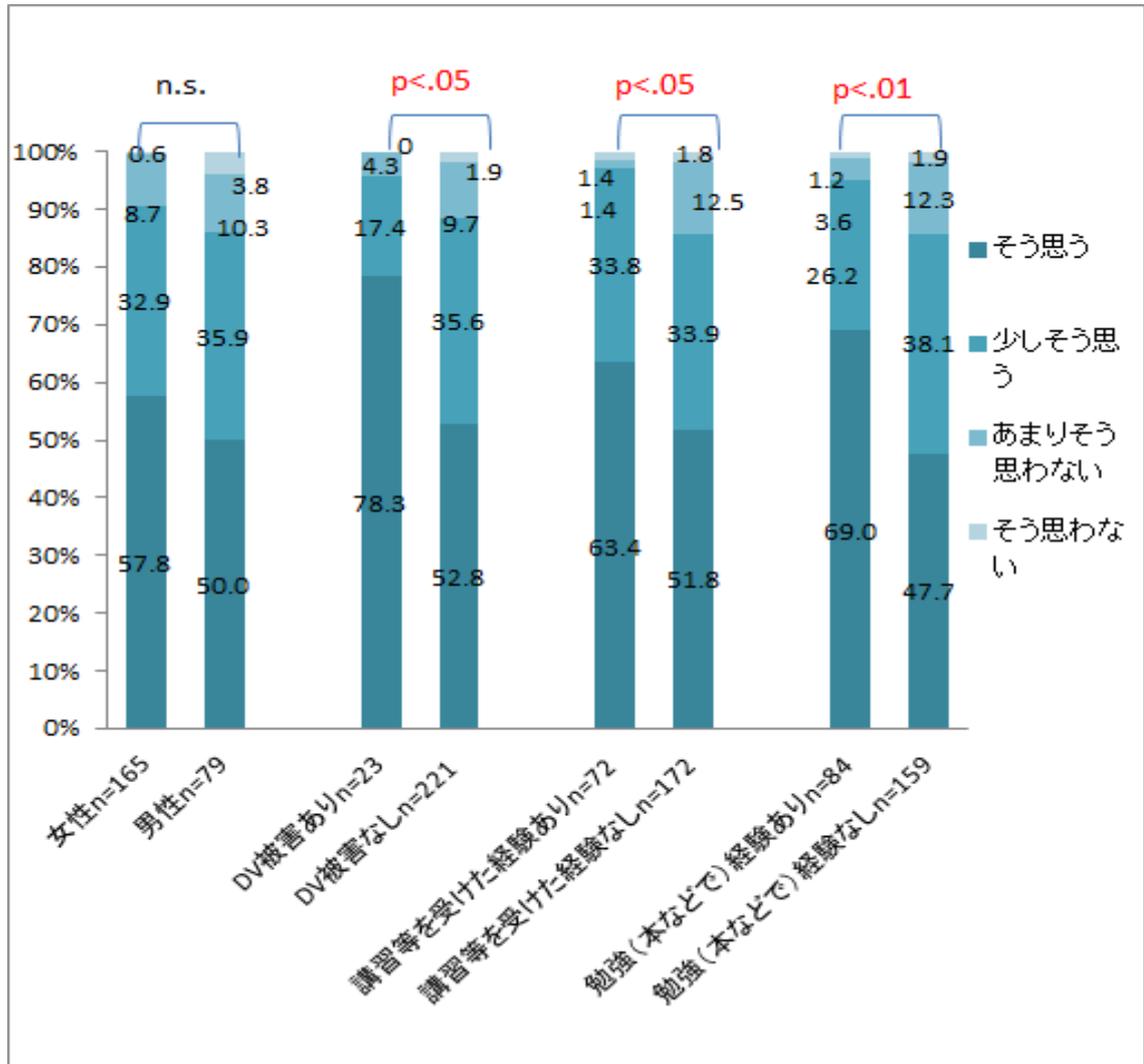


図 5-11 DV 予防の授業を中学や高校の授業の中で実施した方がよい
Mann-Whitney U 検定 (数字は%)

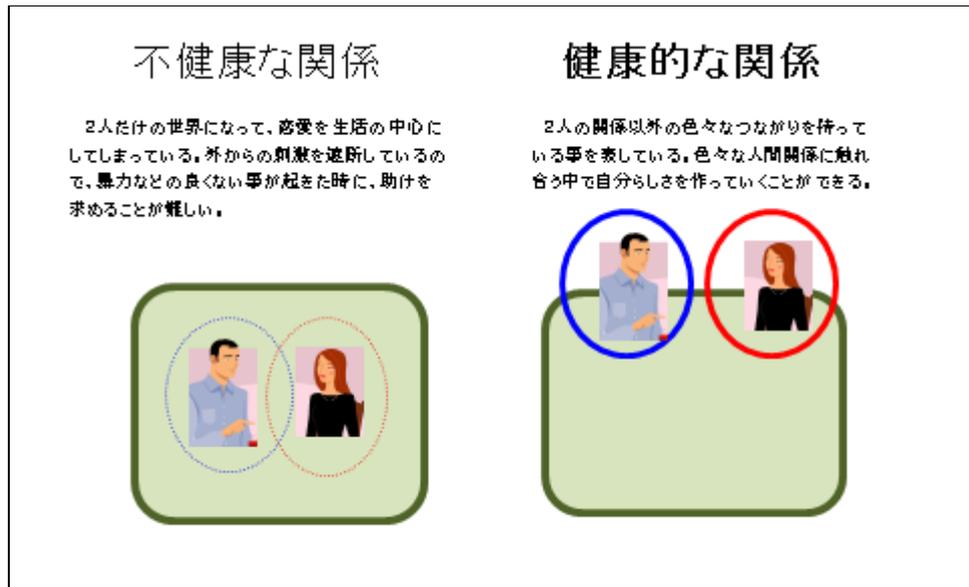


図 6-1 関係性について

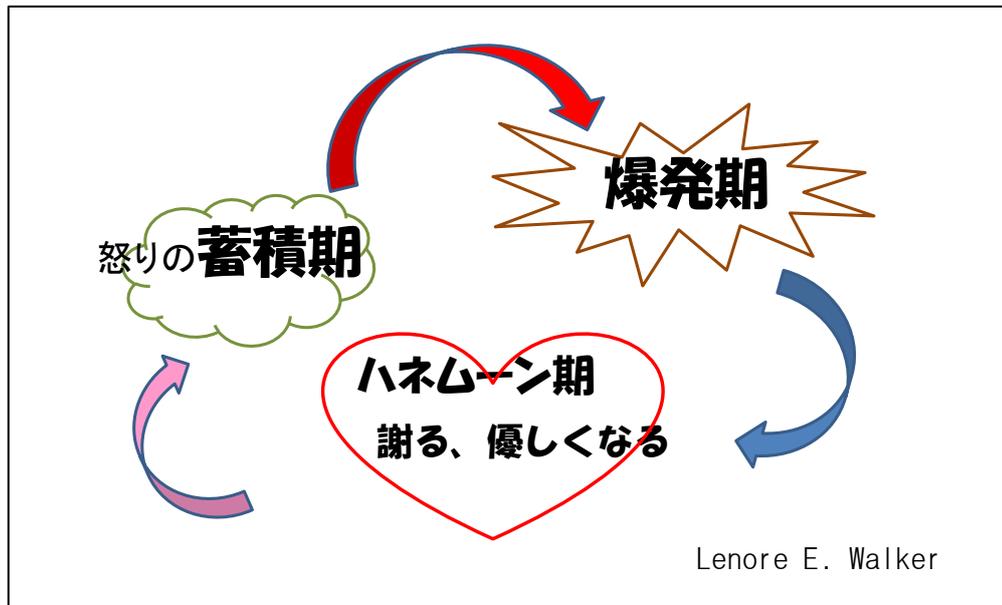


図 6-2 暴力のサイクル

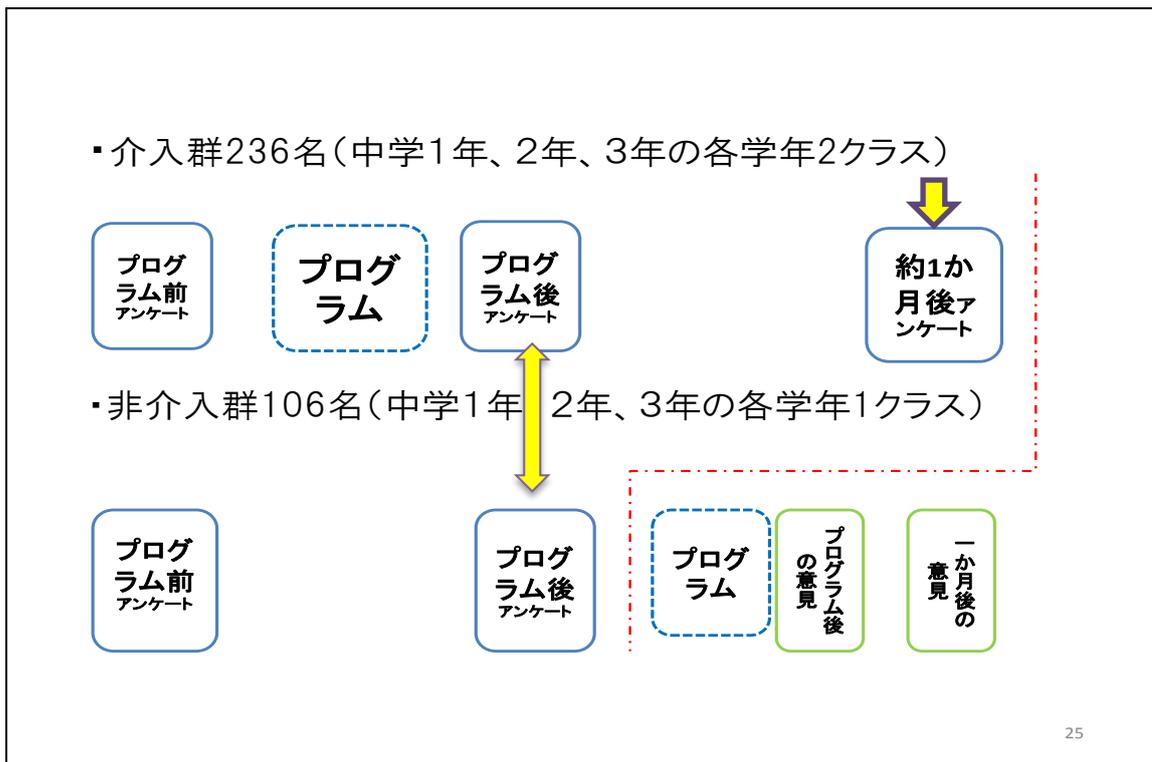


図 6-3 中学生への研究デザイン

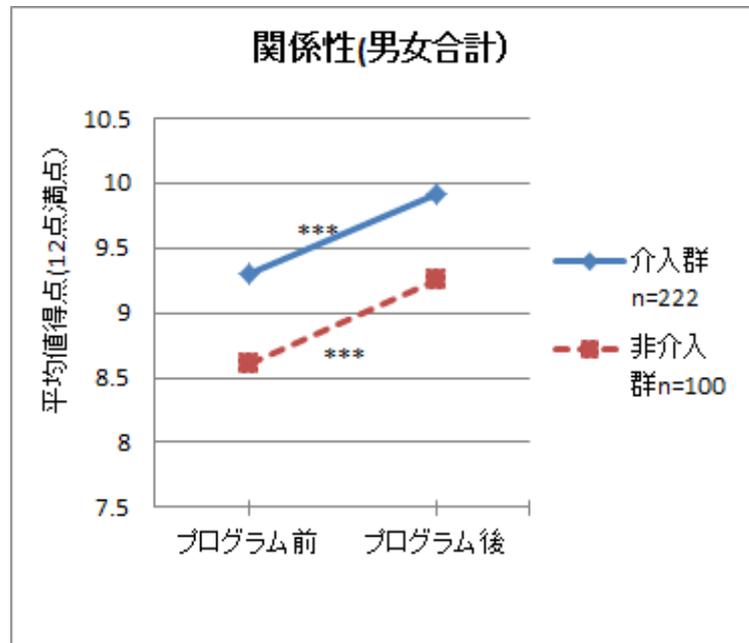


図 6-4 中学生関係性得点(男女合計) 介入群と非介入群の比較
12点満点で高い得点の方がよい *** $p < .001$

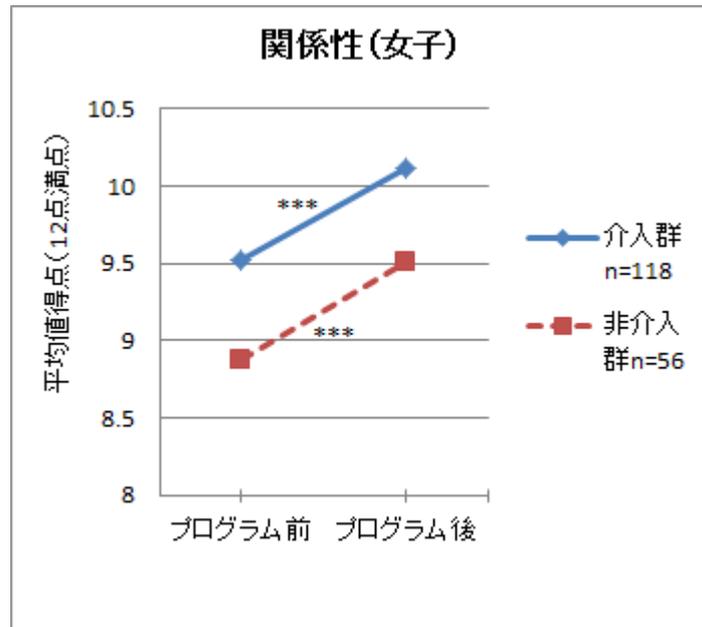


図 6-5 中学生関係性得点(女子) 介入群と非介入群の比較
12点満点で高い得点の方がよい *** $p<.001$

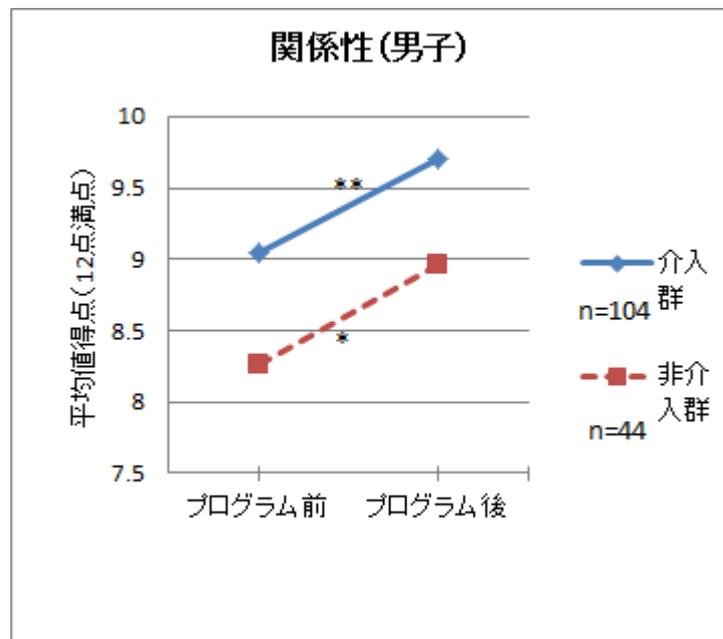


図 6-6 中学生関係性得点(男子)介入群と非介入群の比較
12点満点で高い得点の方がよい ** $p<.01$ 、* $p<.05$

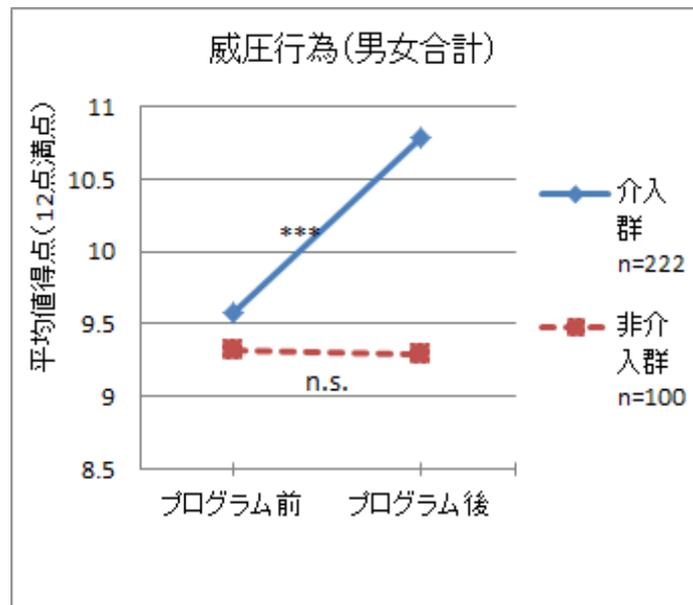


図 6-7 中学生威圧行為得点 (男女合計) 介入群と非介入群の比較
12 点満点で高い得点の方がよい *** $p < .001$ 、 n.s.=not significant

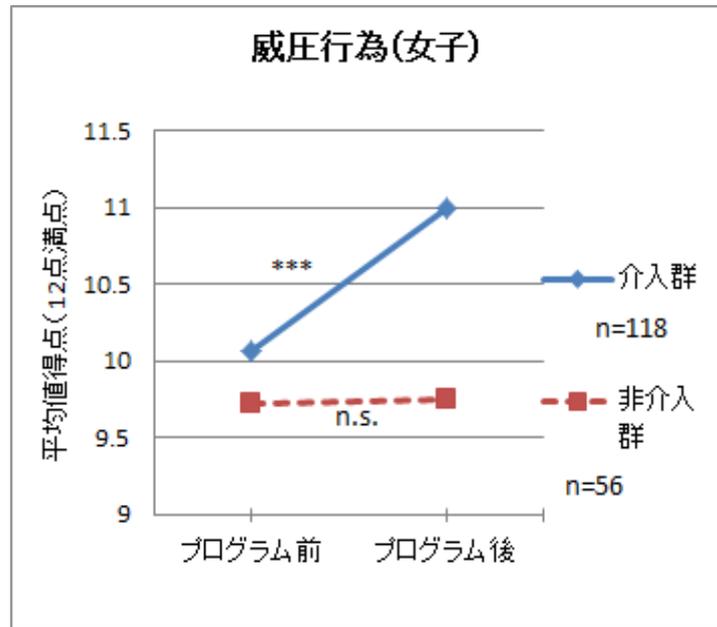


図 6-8 中学生威圧的の行為得点 (女子) 介入群と非介入群の比較
12 点満点で数値が高い方がよい *** $p<.001$ 、 n.s.=not significant

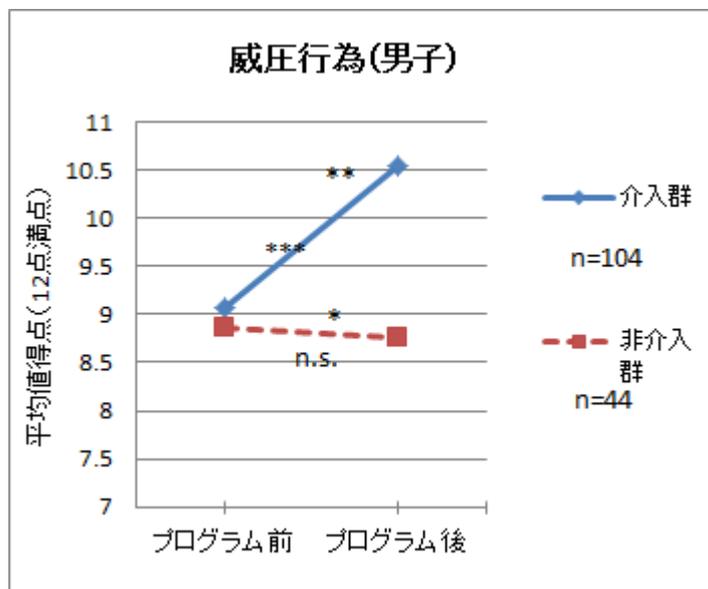


図 6-9 中学生威圧的の行為得点 (男子) 介入群と非介入群の比較
12 点満点で数値が高い方がよい *** $p<.001$ 、 n.s.=not significant

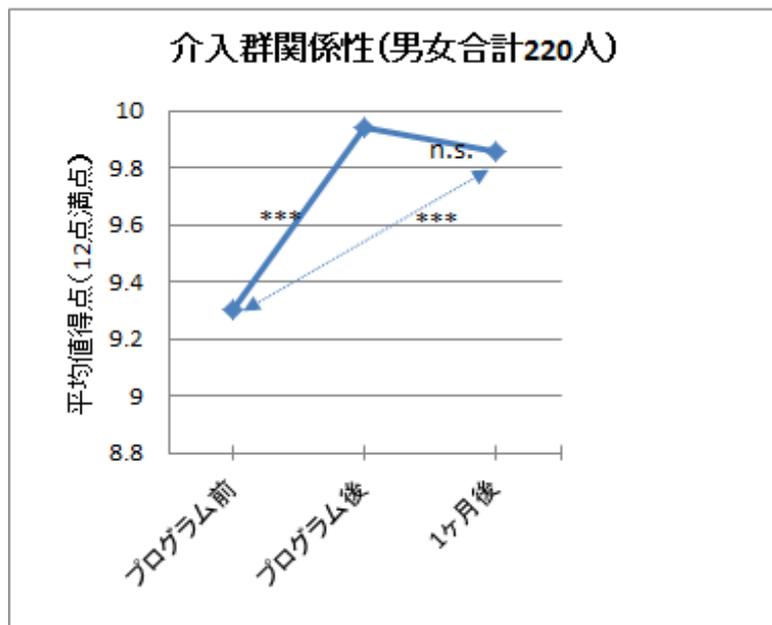


図 6-10 中学生関係性得点(男女合計)の変化
12点満点で数値が高い方がよい *** $p < .001$ 、n.s.=not significant

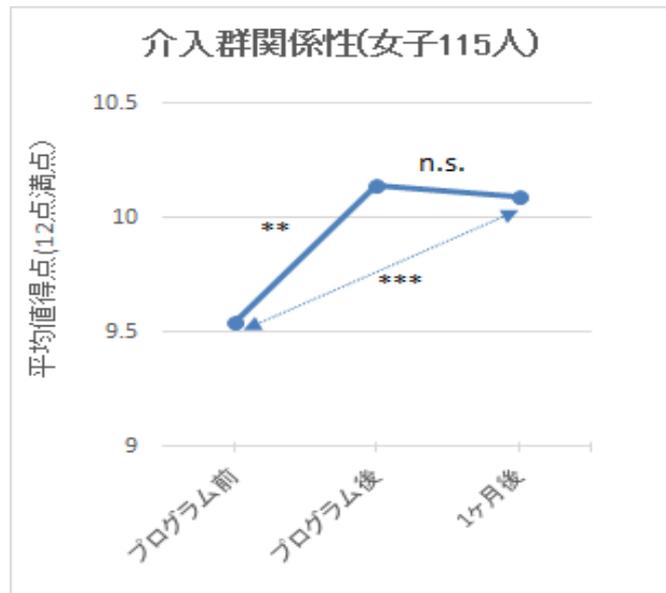


図 6-11 中学生関係性得点（女子）の変化
12点満点で数値が高い方がよい *** $p < .001$ 、** $p < .01$, n.s.=not significant

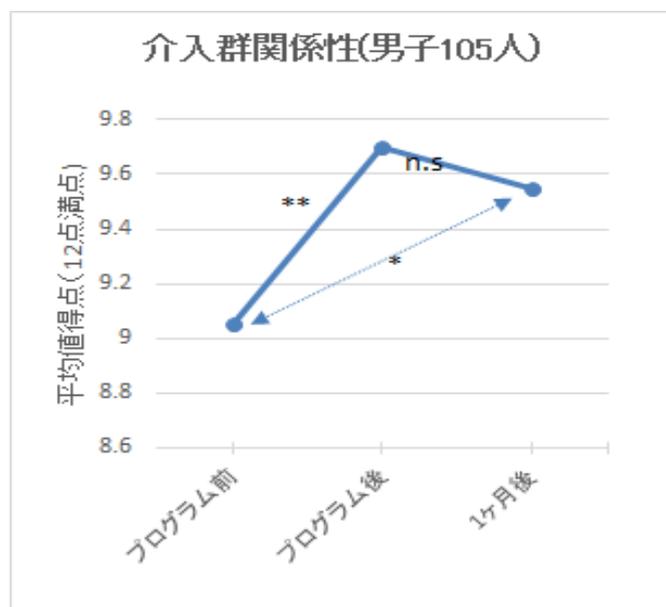


図 6-12 中学生関係性得点（男子）の変化
12点満点で数値が高い方がよい * $p < .05$ 、n.s.=not significant

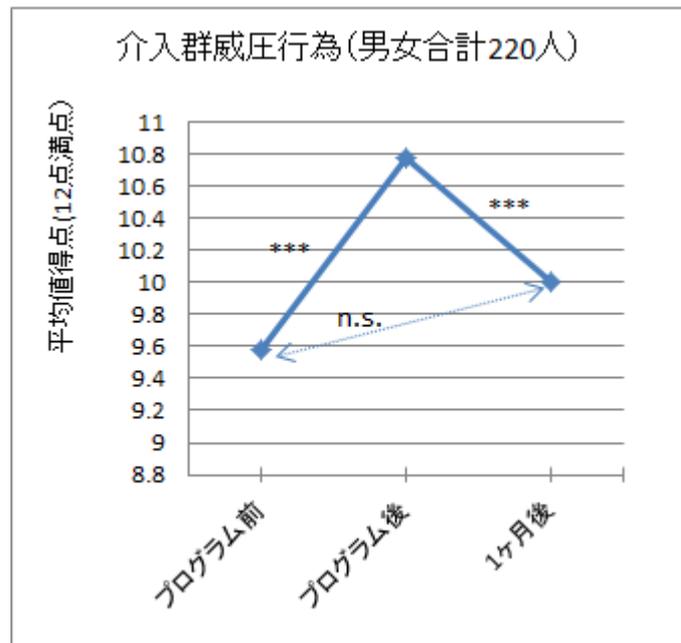


図 6-13 中学生威圧行為得点(男女合計)の変化
12点満点で数値が高い方がよい *** $p < .001$ 、 n.s.=not significant

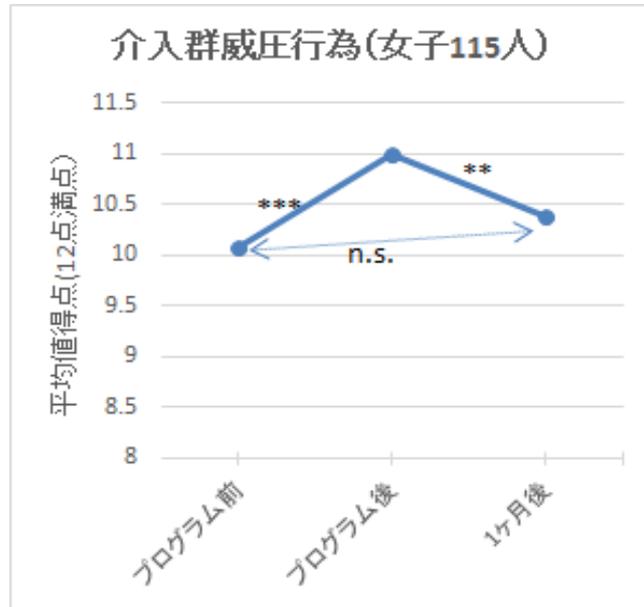


図 6-14 中学生威圧的行為得点（女子）の変化
12 点満点で数値が高い方がよい *** $p<.001$ 、** $p<.01$ 、n.s.=not significant

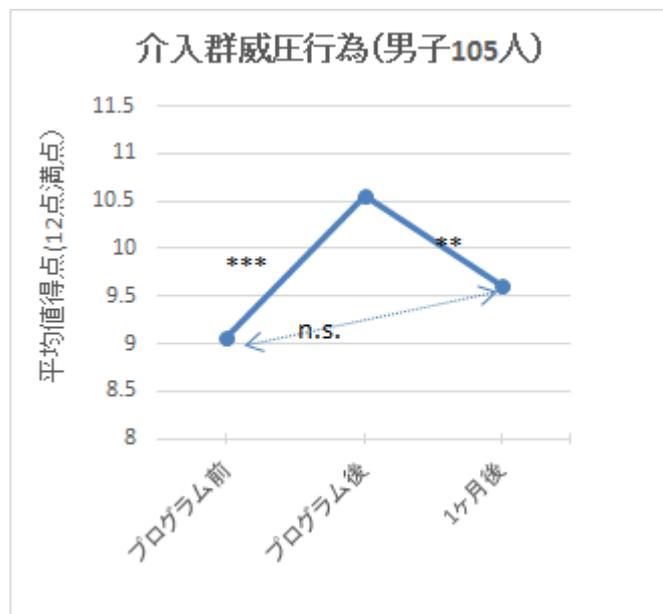


図 6-15 中学生威圧的行為問題得点（男子）の変化
12 点満点で数値が高い方がよい *** $p<.001$ 、** $p<.01$ 、n.s.=not significant

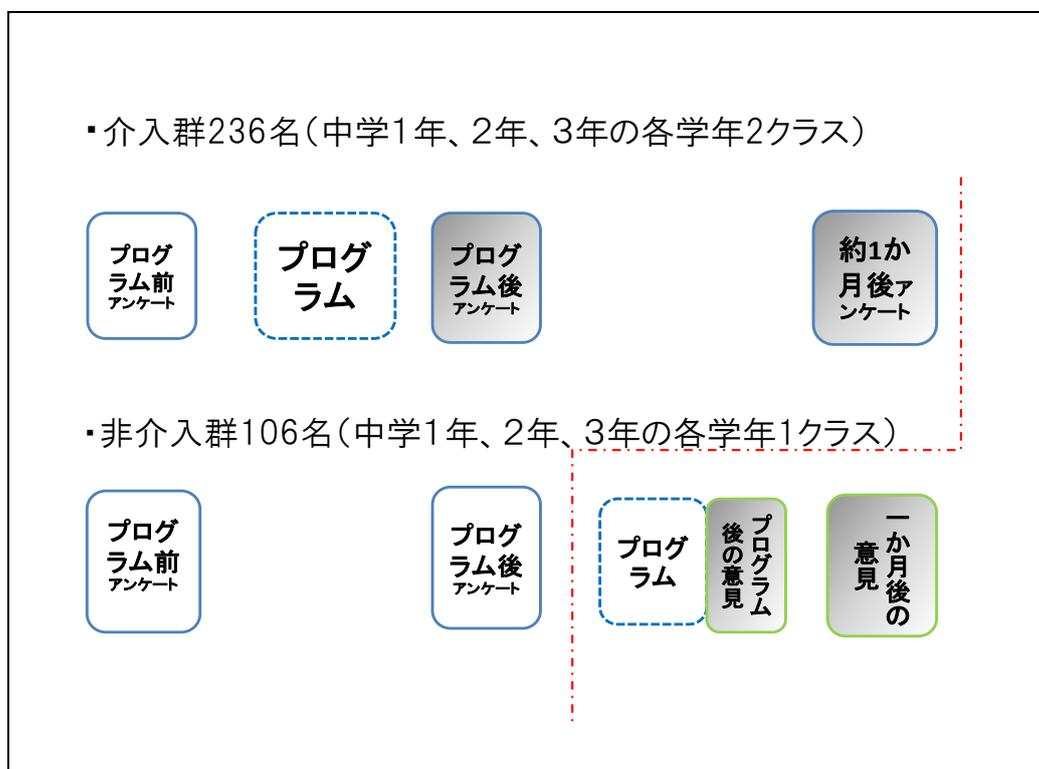


図 7-1 中学生「プログラム後」、「1か月後」のアンケート対象者
(グラデーションの部分)

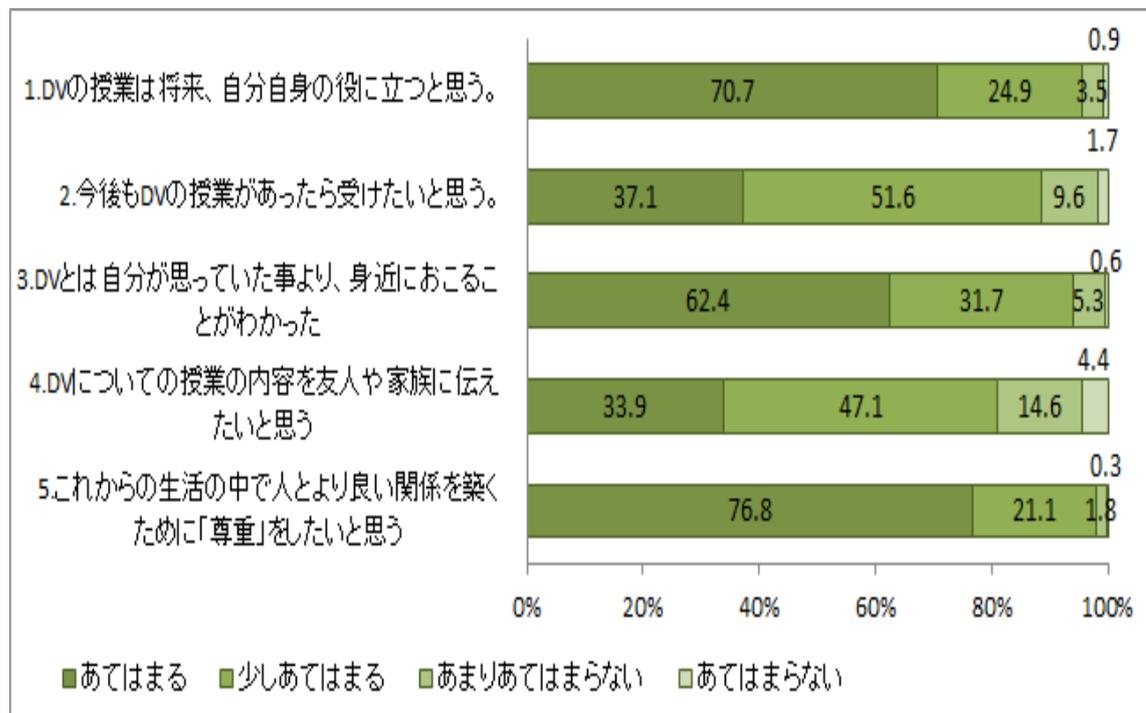


図 7-2 プログラム後の中学生の結果 (数字は%)

表・図

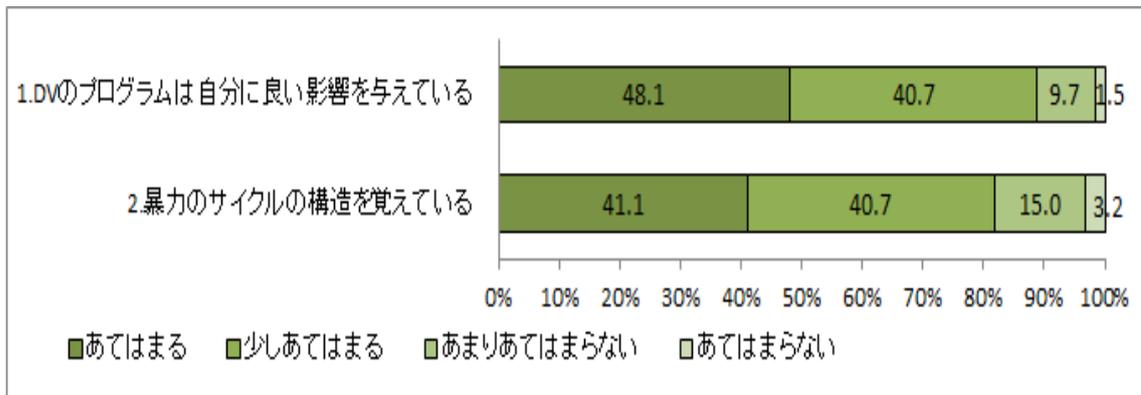


図 7-3 1 か月後の中学生の結果 (数字は%)

お互いを尊重し合う教育プログラム 人間関係を大切にしていくなために 中学生 編



**DV(Domestic Violence,ドメスティック・バ
イオレンス)を知る。**

人との出会いについて

- みなさんは学校や社会の中で、たくさんの人と、出会っています。そして、これからも、多くの出会いが待っています。



- 今までの生活の中で、「この人と出会えて良かったな」と思うこともあれば、「この人と一緒にいると疲れるな」と思うこともあると思います。



それは、自然な感情です。

人を尊重するってどういうこと？（１）

例： **心優しい先輩がいると、クラブ全体が優しさで包まれる。**

いじわるな先輩が、威張っていると、みんな、ギスギスした雰囲気になり、いじめがおこる。



• **人を尊重することが出来ている人は、**

「この人といると、自分も、優しい気持ちになれるなあ」

と、自然と多くの人から思われている。

人を尊重するってどういうこと？(2)

例：「今日の国語の授業の時の、発表、すごく良かったよ。」と、何気ない友人の言葉で、すごく、やる気が出た。実は、発表の時、すごく緊張をしていたから。

・人を尊重できている人は

相手の良さを、引き上げて、伸ばすことができる。

「この人と一緒にいると、自分が良い方に伸びていく、自分の良さが発見できる、自然と、自分が頑張れる」と思われている。



人を、尊重できない人は…



- **相手を尊重できない人は、悪いところばかり指摘して、きちんと、言葉で説明をしようとしていない。話し合いを避けて、自分の感情を押し通すために、相手を暴言や、暴力で威圧する。**

注!意

異性の友人と親しくなることが、これからの生活の中で、あると思います。相手が異性の友人だと、「好きなのかな？」という、特別な感情が生まれて、自分の気持ちが変わらなくなる事があります。



こんな時、どうしますか？

お互いを尊重するために



男の子の立場

中学3年生 ツトムの話



**ツトムは中学3年生。
彼女アコとは付き合い始めて
3ヶ月。学習塾で知り合った。
アコは、隣の中学校に通っている。
勉強も出来て、テニス部のキャプテン。
素直で明るいので、あこがれの的である。
塾の帰りに、自転車に乗いながら、
ツトムから告白した。
みんなが「あこがれ」と言っている
アコを自分のものにできたのは
嬉しい。**



中学3年生 ツトムの話



でもツトムは最近イライラしている。アコが忙しいとか、言いだして、一緒に会いたいするのを断ることがあるのが気に食わない。

「前はもっと素直に、ニコニコしてくれたのに」と思うとムカついてくる。

もしかしたら他に好きな男の子ができたのではないかと思うと不安なのだ。

今日もアコは「部活があるから明日は一緒に会えない」と言いだした。



ツトムは、キレルか？気持ちを伝えるか？

ツトムは自分の思い通りにならないアコにムカついて「マジかよ！」と言って、自分の自転車を思いっきり、蹴飛ばした。威圧して自分の思い通りにしたかったのだ。

ツトムはアコに「最近自分が大切に思われていないような気がして寂しい」と正直な気持ちを伝えてみた。



アコはどうするか？

ツトムがキした後のアコは、どんな行動をとり、どんな言葉を使うと思いますか。書いてください。

ツトムが、「寂しい」という正直な気持ちを伝えた後の、アコは、どんな行動をとり、どんな言葉を使うと思いますか。書いてください。

こんな時、どうしますか？

お互いを尊重するために



女の子の立場

中学3年生 ナオコの話



**ナオコは中学3年生。
彼タケとは付き合い始めて3ヶ月。
学習塾で知りあった。隣の中学に
通う、タケはサッカー部で、爽やか。
ナオコがタケに、告白をした。OK
と言われた時は嬉しかったし、今も友
人から
「タケが彼なんてうらやましい」と
言われると、なんだかちょっといい気分。**



中学3年生 ナオコの話

でもナオコは最近イライラしている。タケが忙しいとか、言いたして、一緒に会ったり、メールの返信が来ないのが嫌なのだ。

「前はもっと爽やかに、話かけてくれたのに」と思うと不安でたまらない。

もしかしたら他に好きな女の子ができたのではないかと思うと不安なのだ。昨日から、5回も「週末の花火大会に行ける？」ってメールを送ってたのに、返信が無い。



十オコは、キしるか？自分の気持ちを伝えるか？

十オコは校門の前で待っていたら、タケが携帯を見ながら歩いて来たので、妙に腹がたった。

思わず、「誰からのメール
見ているのよ！！」
と、タケを怒鳴りつけて、
タケの携帯を取り上げた。

十オコは、校門の前で待ち、携帯を見ながら歩いて来たタケに声をかけた。「メールの返信がないから大切に思われていないのではないかしら」といふ不安という気持ちを伝えた。



タケはどうするか？

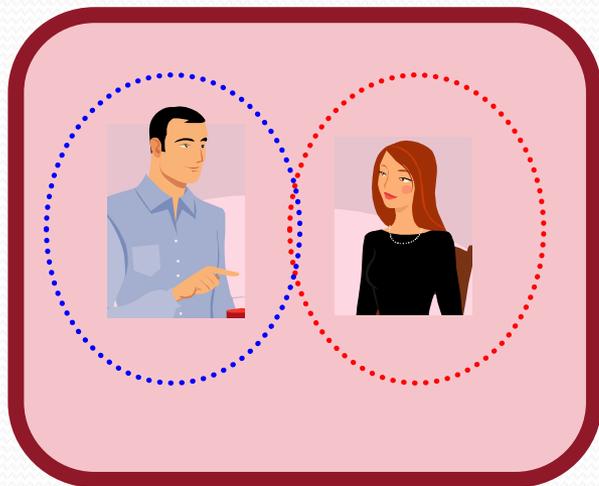
ナオコに携帯を取り上げられた後の、タケは、どんな行動をとり、どんな言葉を言うと思いますか。書いてください。

ナオコが、「不安」という正直な気持ちを伝えた後の、タケは、どんな行動をとり、どんな言葉を言うと思いますか。書いてください。

お互いを大切にすることでどういう関係？

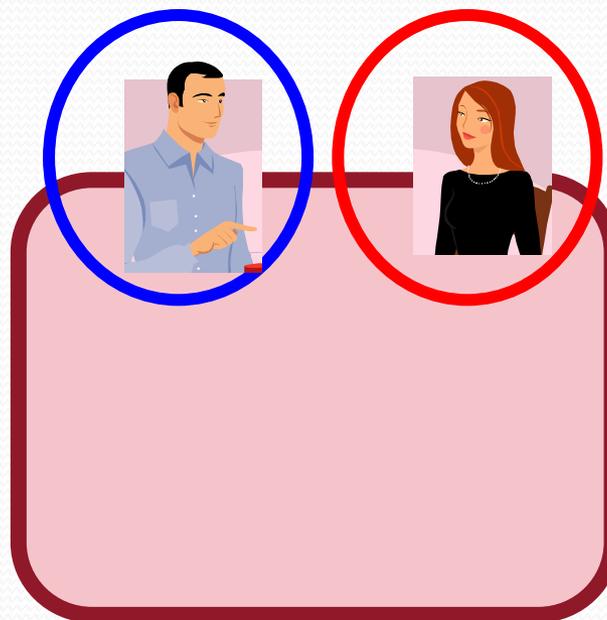
不健康な関係

2人だけの世界になって、恋愛を生活の中心にしてしまっている。外からの刺激を遮断しているの
で、暴力などの良くない事が起きた時に、助けを
求めることが難しい。



健康的な関係

2人の関係以外の色々なつながりを持って
いる事を表している。色々な人間関係に触れ
合う中で自分らしさを作っていくことができる。





➤ 暴力とは何か？

- 暴力の本質は、**相手への支配(コントロール)**。
- 暴力は、怒りや衝動性で起こるものではなく、**暴力という方法を選び、相手を威圧する行為**である。
- 暴力を続ける人は、**暴力の否定、影響を小さく評価**している。

暴力の種類 - 1



- **身体的暴力：**
 - 殴る、蹴る、胸ぐらをつかむ、首を絞める、物を投げつける、髪を持って引きずる、薬物やアルコールの強要 等
- **性暴力：**
 - 性的な体の部分についての暴言 等



暴力の種類 -2



- **精神的暴力：**
 - 大声で怒鳴りつける、皆の前で恥をかかせる、バカにする、家族や友達に会わさない、許可無しに行動させない、当たらないように物を投げつける、無視、眠らせない、「お前がおかしい」と言う、ストーカー行為、舌打ち、携帯をチェックする。
- **経済的暴力：**
 - お金を巻き上げられる、貸したお金を返さない、働くことが許されない、いつもおごらされる。

内閣府HP



暴力のサイクル



Lenore E. Walker

▶ ドメスティック・バイオレンス (Domestic Violence)とは何か？



- Domestic Violenceを略して「DV」と呼ばれることもある。Domestic とは「家庭内の」という意味で、親しい関係の時に、使われている。

明確な定義はなく、一般的には

「配偶者や恋人など親密な関係にある、又はあった者から振られる暴力」という意味で使用されることが多い。

・暴力を振るう人は、

親しい関係になればなるほど、感情が強くなり、暴力の質が大きくなる事が多い。

(例)結婚すれば、落ち着くので、暴力は無くなると思ったら、反対にひどくなった。

・普通の人は親しい関係になればなるほど、優しい感情が強くなる。



➤ DVの被害経験者

- **女性の29.1%、男性の15.6%が配偶者から暴力を受けたことがある。** (2012 内閣府調査結果 5000人無作為配布、65.9%有効回収)
- **2013年の東京都の若者(18歳～29歳)**
女性は42.4%、男性は31.3%が交際相手から暴力を受けた事がある(交際相手がいた女性757人、男性619人を対象)。
- **→暴力を受けたことにより、「心身の不調が起きた」、「夜、眠れない」、「アルバイト、仕事、大学などをやめた・変えた」**



➤ DVは他人事ではない

- ・自分自身が経験(被害・加害)するかもしれない。
- ・お友達が経験(被害・加害)するかもしれない。



**とても身近な問題
気付くことが大切**



➤ 身近でDVがおきていたら



- ・あなたはまず自分を暴力から、自分を守る必要があります。
- ・暴力を親から受ける（虐待）、親同士の間で暴力があるのは（DV）で、暴力にさらされていることは、あなたにとって、悪影響です。
- ・相談機関に、助けを求める必要があります。または、信頼できる大人に相談をしましょう。

DVの電話相談窓口



・まず、電話で「どうすれば良いか」聞いてみましょう。

① 寄り添いホットライン (DV相談)

24時間フリーダイヤル 0120-279-338

② 内閣府DVナビ (相談機関の紹介)

0570-0-55210

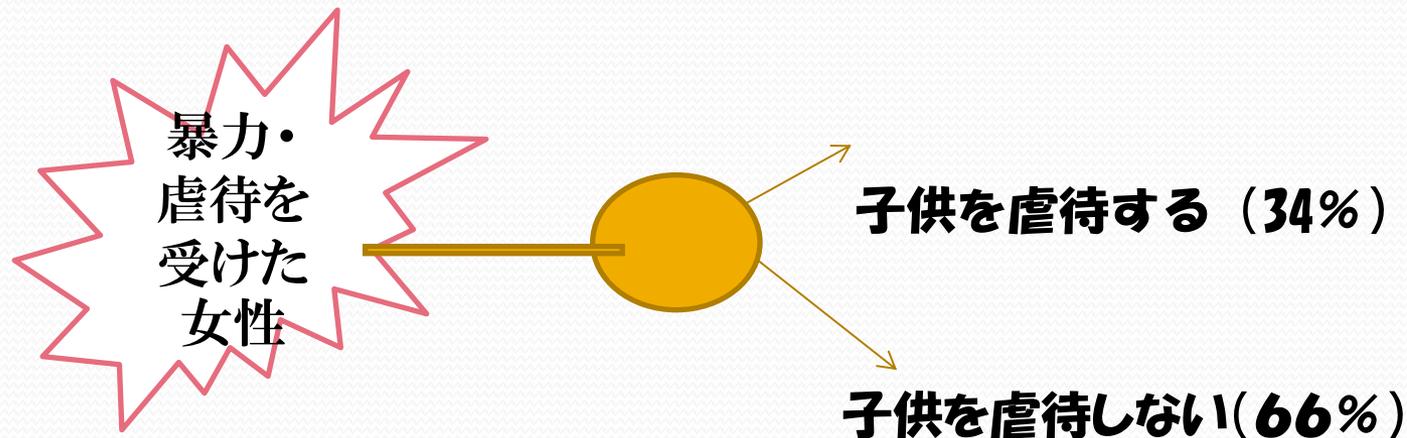
内閣府の男女共同参画局のホームページも参考にして下さい。



➤ 問題点 子どもへの影響

DVや虐待にさらされた子どもたちは、暴力の被害者や加害者になる（虐待の連鎖）という研究もあるが、誤解してはいけない。

「暴力とは何か」を知り、お互いに尊重しあえる関係を多く持つことで、連鎖はなくなっていく。（上原、春原 2011）



Kaufman & Zigler(1987) Yale University, Canada(1987)

➤ お互いを尊重できる会話 下校の場面

えっ、今日、ママたちと帰るの？

楽しんでおいで。

行ってらっしゃい。

うん、図書館に行くんだ

行ってきます。



➤ お互いを尊重できる会話 下校の場面

えっ、今日、ママたちと帰るの？

うん、図書館に行くんだ

あっ、そうか。

うん、そうだよ。

いいな。

一緒に行く？

やめとく。

今度、一緒に行こう。

うん、そうだね。



➤ お互いを尊重できる会話 下校の場面

えっ、今日、ママたちと帰るの？

うん、図書館に行くんだ

えっ、マジ？

うん、マジ。

明日、遊べる？

うん、遊べる。

やっぱり、用事あった。

あっ、そうなの。



わりい、わりい。



➤ お互いを尊重できる会話 下校の場面

えっ、今日、ママたちと帰るの？

うん、図書館に行くんだ

おれも、おれも。

えっ、無理、ごめんね。

そこを、何とか。。

うん、そこまで言うならいいよ。

あっ、用事があった。

えっ、仕方ないね。



あ、用事なかった。



➤ お互いを尊重できる会話 下校の場面

えっ、今日、ママたちと帰るの？

うん、図書館に行くんだ

オレも行っちゃう。

行ってらっしゃ〜い

やっぱ、用事があった。

あっ、そうなんだ。

実はウソなんだ。

迎えに来て。

いいよ。



➤ お互いを尊重できる会話 下校の場面

えっ、今日、ママたちと帰るの？

うん、図書館に行くんだ

えっ、いいな。

勉強、してる？

うん、してる。

頑張ってる。

頑張ります。

バイバイ。

また、明日。



お互いを尊重できる会話の場面

えっ、今日、ママたちと帰るの？

うん、
に行くんだ



➤ お互いを尊重できる会話の場面

[Empty blue speech bubble]

[Empty pink speech bubble]



[Empty blue speech bubble]



➤ お互いを尊重できる会話 の場面

今日、ケンタたちと帰るの？

うん、サイクリングに行くんだ



➤ お互いを尊重できる会話の場面

[Empty pink speech bubble]

[Empty blue speech bubble]

[Empty pink speech bubble]



お互いを尊重し合う教育プログラム

人間関係を大切にしていくために

DV(Domestic Violence, ドメスティック・バ
イオレンス)を知る。

中学生編



筑波大学 社会精神保健学分野 須賀朋子
指導教官：森田展彰 准教授、斎藤 環教授

はじめに

教員のみなさまへ

昨今、いじめ、暴力、指導死、子供の自殺が途切れる事なく報道されています。

私自身も中学校の教員であった時は、いじめや暴力への対応に追われ、「指導とはどうすることか。何を伝えれば良いか。」と悩む毎日でした。

ある中学生の男の子が、学校内で友人たちへの暴力が止まらない時に、その生徒の母親が涙ながらに「私が家庭の中で、主人から暴力を振るわれているのを見ているから、暴力を振るってしまうのだと思います。」と伝えてくれました。

DVを目撃している子供は、人との関係性の持ち方を、間違っただけで学習していることがあります。また、DVというのは、稀な家庭だけに起こるものではありません。2012年の内閣府から報告では、女性は10人中3人、男性は10人中1.5人がDV被害を受けているという結果が出ています。この結果から考えられる事は、どこの学校にも、DVで苦しんでいる家庭の子供が在籍しているという事です。

このプログラムを作成した理由は、DVを予防していくためには、中学生のうちに予防プログラムの授業を受けておけば、被害や加害を未然に防ぐ事ができる、周囲に被害にあっている人がいた時に気付いて援助をする事ができるようになるだろうと考えたからです。

いじめ、暴力、DVは「尊重する」という考えが欠けている時に起こるものです。尊重のある関係性の持ち方を教えていけば、いじめや暴力は減っていくと思います。

このプログラムの最後で、「尊重できる会話」のロールプレイを行います。自然と、このような会話が増えていけば、お互いが優しい会話を交わしあえるようになると思います。

私自身がDV被害者で、渦中にいた時には、生徒や保護者の方に励まして頂きながら、教員を続けていました。卒業式で生徒を見送る時、後姿を見ながら、暴力やDVに巻き込まれずに、健やかな毎日を過ごしてほしいと願っていました。

教員であり、DV被害者であったからこそ、DV予防教育プログラムを作成できるのではないかという思いで作り上げました。

多くの先生方に使用していただき、1人でも多くの生徒たちを、暴力やDVの当事者にならないように育ててくださる事を願っています。

*先生方からの質問に答えます。

Q1. この教材は、何時間くらい必要ですか？

A1 2時間は最低、必要です。50分の講義形式 + 50分のロールプレイ（尊重できる会話の作成、発表など） 2時間続きで、間に休憩を10分程度挟んで実施しても良いと思いますが、1週間後以降に行うのが、振り返りも出来て、良いと思います。

可能であれば、さらに1週間後に50分のロールプレイ（尊重できる会話の作成、発表など）ができるように、追加版を用意しています。時間が許す限り、尊重のある会話のロールプレイの作成は行った方が、生徒にとって効果的です。

Q2. 対象人数は何人位が良いですか？

A2 クラス単位で、最大40名程度が最適です。普通教室を使って、意見を出し合いながら行うのが良いです。

Q3. 中学生の、いつの時期頃から、実施することができますか？

A3 中学生向けに、やさしく作成しているので、中学1年生の夏以降であれば、理解できると思います。「尊重」がテーマになっているので、いじめの防止にも繋がります。

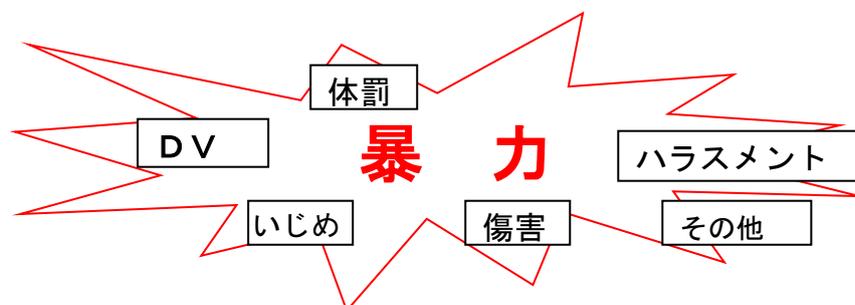
Q4. 教員は1人でも授業を行うことができますか？

A4 1人でも可能ですが、チームティーチング形式で、補助の方がもう1人いると、ロールプレイがスムーズにできると思います。

Q5. 暴力とDVの違いは何ですか？

A5 DVとは、暴力の中の1つです。いじめ、ハラスメント、体罰、傷害罪、脅しなども暴力です。

DVとはDomestic Violenceの略で「家庭内の暴力」と日本語では訳しますが、正しくは「親密な関係にある人、あった人から受ける暴力」です。暴力的な人は、親しくなれば、なるほど、支配的になり、暴力の質が大きくなります。この、親しい間での暴力は、「支配」が大きく絡み、他人の目には見えない場所で起こるので、助けを求め難く、暴力の中でも、死に至る可能性が大きいものです。



Q6. DVのサイクルとは、何ですか？

A6. 「暴力の車輪」と言う人もいます。DVの1番の特徴で、加害者は暴力を振るった後に、快感を覚えます。加害者の1番の目的は「支配」だからです。暴力によって、「支配」を強化していくのです。

だから、被害者が逃げようとする、謝罪をしたり「君だけを愛している」などの言葉を発しますが、口先だけです。

反対に、謝られた被害者は「本当はこの人は自分の事を愛しているのだ」と思い、「まだ、やり直せるのではないか」とか、「この人の暴力を止めさせることができるのは自分だけだ」などと思いつつも、加害者は、また、暴力を振るうのです。

暴力を振るう人は、相手を、「ストレス解消程度の砂袋」としか思っておりません。また、支配をしやすい人を選んでいきます。暴力で人を支配して、優位に立つ事により、自分の弱さを補おうとしています。

Q7. なぜ、このプログラムは「尊重とは？」から入って「尊重できるロールプレイ」で終わるのですか？

A7. 「尊重」の反対側で起こる事が「暴力」だからです。「尊重できる会話」が自然と増えれば、暴力も減っていくと考えているからです。

1時間目は講義形式です。(約50分)

① 尊重について、②暴力とは何か、③本題のDVとは何か、を教える。

目的：「人間関係について」考えることの導入

1. 人との出会いについて

- ・みなさんは学校や社会の中で、たくさんの人と、出会っています。そして、これからも、多くの出会いが待っています。
 - ・今までの生活の中で、「この人と出会えて良かったな」ということもあれば、「この人と一緒にいると疲れるな」ということもあると思います。
- 「いかがですか？」と何人かの生徒に問いかけて反応を見ながら、授業に引き付けていく。
- ・それは、自然な感情です。

人との出会いについて

- ・みなさんは学校や社会の中で、たくさんの人と、出会っています。そして、これからも、多くの出会いが待っています。



- ・今までの生活の中で、「この人と出会えて良かったな」ということもあれば、「この人と一緒にいると疲れるな」ということもあると思います。

↓

それは、自然な感情です。

筑波大学

2

目的：「尊重とは？」の理解

2. 人を尊重するってどういうこと？（1）

例： 心優しい先輩がいると、クラブ全体が優しさで包まれる。

いじわるな先輩が、威張っていると、みんな、ギスギスした 雰囲気になり、いじめがおこる。

「みなさんのクラブでは、これらの事を感じる事はありませんか？」と、何人かの生徒に問いかける。

・ 人を尊重することが出来ている人は、

「この人となると、自分も、優しい気持ちになれるなあ」と、自然と多くの人から思われている。

人を尊重するってどういうこと？（1）

例： **心優しい先輩がいると、クラブ全体が優しさで包まれる。**

いじわるな先輩が、威張っていると、みんな、ギスギスした
雰囲気になり、いじめがおこる。

・ **人を尊重することが出来ている人は、**

「この人となると、自分も、優しい気持ちになれるなあ」

と、自然と多くの人から思われている。



3. 人を尊重するってどういうこと？（2）

例：「今日の国語の授業の時の、発表、すごく良かったよ。」と、何気ない友人の言葉で、すごく、やる気が出た。実は、発表の時、すごく緊張をしていたから。

・人を尊重できている人は

相手の良さを、引き上げて、伸ばすことができる。

「この人と一緒にいると、自分が良い方に伸びていく、自分の良さが発見できる、自然と、自分が頑張れる」と思われています。

「このような経験はありませんか？私は昔この言葉を言われて自信が沸いてきた事を今でも覚えています」などの例を出していく。

「みなさんはいかがですか」と、生徒に聞いていく。「あります。」と答えた生徒に「どんなことがありましたか？」と聞いていく。答えてくれたら、「それは嬉しかったですよね。」など、盛り上げていく。

人を尊重するってどういうこと？(2)

例：「今日の国語の授業の時の、発表、すごく良かったよ。」と、何気ない友人の言葉で、すごく、やる気が出た。実は、発表の時、すごく緊張をしていたから。

・人を尊重できている人は
相手の良さを、引き上げて、伸ばすことができる。
「この人と一緒にいると、自分が良い方に伸びていく、自分の良さが発見できる、自然と、自分が頑張れる」と思われています。

4

目的：尊重ができない人の行動は、暴力へとつながっていく事を教える。

4. 人を、尊重できない人は・・・

相手を尊重できない人は、悪いところばかり指摘して、きちんと、言葉で説明をしようとしな。話し合いを避けて、自分の感情を押し通すために、相手を暴言や、暴力で威圧する。

異性の友人と親しくなることが、これからの生活の中で、あると思います。相手が異性の友人だと、「好きなのかな？」という、特別な感情が生まれて、自分の気持ちがわからなくなる事があります。

「あなたのこういうところが悪い」「あなたは～すべきだ」と言ってくる人は、相手を自分の下に置くために、コントロールをかけてくる人なので気をつけましょう。こういう人は、相手の悪いところを探しています。他人には「～すべきだ。」と言っておきながら、自分の行動は、伴っていない事が多いです。

相手が異性だと、「嫌われたくない」と言う感情から、「そういうものなのかな」と思ってしまうのです。例えば、「料理は女がするべきだ」とか、「デート代はすべて男が出すべきよ」などの言葉を使う人には注意が必要です。

人を、尊重できない人は・・・ 

- 相手を尊重できない人は、悪いところばかり指摘して、きちんと、言葉で説明をしようとしな。話し合いを避けて、自分の感情を押し通すために、相手を暴言や、暴力で威圧する。

注意
異性の友人と親しくなることが、これからの生活の中で、あると思います。相手が異性の友人だと、「好きなのかな？」という、特別な感情が生まれて、自分の気持ちがわからなくなる事があります。

 5

5. こんな時、どうしますか？

お互いを尊重するために 男子の立場

こんな時、どうしますか？

お互いを尊重するために

 男子の立場

6

6. 中学3年生 ツトムの話

ツトムは中学3年生。彼女アコとは付き合い始めて3ヶ月。学習塾で知り合った。アコは、隣の中学校に通っている。勉強も出来て、テニス部のキャプテン。素直で明るいので、あこがれの的である。塾の帰りに、自転車に乗りながら、ツトムから告白した。みんなが「あこがれ」と言っているアコを自分のものにできたのは嬉しい。（*生徒は興味深く、ストーリーを聞くので間を置く）

中学3年生 ツトムの話

ツトムは中学3年生。
彼女アコとは付き合い始めて3ヶ月。学習塾で知り合った。
アコは、隣の中学校に通っている。
勉強も出来て、テニス部のキャプテン。
素直で明るいので、あこがれの的である。
塾の帰りに、自転車に乗りながら、
ツトムから告白した。
みんなが「あこがれ」と言っているアコを自分のものにできたのは嬉しい。

7

7. 中学3年生 ツトムの話

でもツトムは最近イライラしている。アコが忙しいとか、言いだして、一緒に会ったりするのを断ることがあるのが気に食わない。「前はもっと素直に、ニコニコしてくれたのに」と思うとムカついてくる。もしかしたら他に好きな男の子ができたのではないかと思うと不安なのだ。

今日もアコは「部活があるから明日は一緒に会えない」と言いだした。 (* 間を置く)

中学3年生 ツトムの話



でもツトムは最近イライラしている。アコが忙しいとか、言いだして、一緒に会ったりするのを断ることがあるのが気に食わない。

「前はもっと素直に、ニコニコしてくれたのに」と思うとムカついてくる。

もしかしたら他に好きな男の子ができたのではないかと思うと不安なのだ。

今日もアコは「部活があるから明日は一緒に会えない」と言いだした。

目的： 「自転車を蹴飛ばして威圧する」行為は暴力である事の理解

8. ツトムは、キレるか？気持ちを伝えるか？

ツトムは自分の思い通りにならないアコにムカついて「マジかよ！」と言って、自分の自転車を思いっきり、蹴飛ばした。威圧して自分の思い通りにしたかったのだ。

(*間をおく)

ツトムはアコに「最近自分が大切に思われていないような気がして寂しい」と正直な気持ちを伝えてみた。

ツトムは、キレるか？気持ちを伝えるか？

ツトムは自分の思い通りにならないアコにムカついて「マジかよ！」と言って、自分の自転車を思いっきり、蹴飛ばした。威圧して自分の思い通りにしたかったのだ。

ツトムはアコに「最近自分が大切に思われていないような気がして寂しい」と正直な気持ちを伝えてみた。

目的：自分自身がアコの立場になった時を想定して考える。

9. アコはどうするか？

ツトムがキレた後のアコは、どんな行動をとり、どんな言葉を言うと思いますか。書いてください。

ツトムが「寂しい」という正直な気持ちを伝えた後の、アコはどんな行動をとり、どんな言葉を言うと思いますか。書いてください。

・「1 時間目のワークシート」に生徒に書いてもらう。時間がある時は、生徒に、授業の中で、ワークシートに書いた言葉を読み上げてもらい、意見をクラス全体で共有していく。教員は「なるほど」「すばらしい」などの言葉で応答しながら、生徒を引きつけていく。

アコはどうするか？

ツトムがキレた後のアコは、どんな行動をとり、どんな言葉を書きますか。書いてください。

ツトムが、「寂しい」という正直な気持ちを伝えた後の、アコは、どんな行動をとり、どんな言葉を書きますか。書いてください。

図文式 10

10. こんな時、どうしますか？

お互いを尊重するために 女の子の立場

こんな時、どうしますか？

お互いを尊重するために

女の子の立場

11. 中学3年生 ナオコの話

ナオコは中学3年生。

彼タケとは付き合い始めて3ヶ月。学習塾で知りあった。隣の中学に通う、タケはサッカー一部で、爽やか。ナオコがタケに、告白をした。OKと言われた時は嬉しかったし、今も友人から「タケが彼なんてうらやましい」と言われると、なんだかちょっといい気分。

(* 笑いが出ることが多いので間を置く)

中学3年生 ナオコの話

ナオコは中学3年生。
彼タケとは付き合い始めて3ヶ月。
学習塾で知りあった。隣の中学に通う、タケはサッカー一部で、爽やか。
ナオコがタケに、告白をした。OKと言われた時は嬉しかったし、今も友人から「タケが彼なんてうらやましい」と言われると、なんだかちょっといい気分。

目的：携帯の事例は多く、問題化している。人の物を取り上げたり、壊したりする事も暴力である事の理解を促す。

12. 中学3年生 ナオコの話

でもナオコは最近イライラしている。タケが忙しいとか、言いだして、一緒に会ったり、メールの返信が来ないのが嫌なのだ。「前はもっと爽やかに、話かけてくれたのに」と思うと不安でたまらない。もしかしたら他に好きな女の子ができたのではないかと思うと不安なのだ。昨日から、5回も「週末の花火大会に行ける？」ってメールを送ったのに、返信が無い。

中学3年生 ナオコの話



でもナオコは最近イライラしている。タケが忙しいとか、言いだして、一緒に会ったり、メールの返信が来ないのが嫌なのだ。

「前はもっと爽やかに、話かけてくれたのに」と思うと不安でたまらない。

もしかしたら他に好きな女の子ができたのではないかと思うと不安なのだ。昨日から、5回も「週末の花火大会に行ける？」ってメールを送ったのに、返信が無い。

目的：自分自身がタケの立場になった時を想定して考えてもらう。

13. ナオコは、キレるか？自分の気持ちを伝えるか？

ナオコは校門の前で待ってたら、タケが携帯を見ながら歩いて来たので、妙に腹がたった。思わず、「誰からのメール 見ているのよ！！」と、タケを怒鳴りつけてタケの携帯を取り上げた。

(間を置く)

ナオコは校門の前で待ち携帯を見ながら歩いてきたタケに声をかけた。「メールの返信がないから大切に思われていないのではないかと思います不安」という気持ちを伝えた。

ナオコは、キレるか？自分の気持ちを伝えるか？

ナオコは校門の前で待ってたら、タケが携帯を見ながら歩いて来たので、妙に腹がたった。
思わず、「誰からのメール 見ているのよ！！」と、タケを怒鳴りつけて、タケの携帯を取り上げた。

ナオコは、校門の前で待ち、携帯を見ながら歩いて来たタケに声をかけた。「メールの返信がないから大切に思われていないのではないかと思います不安」という気持ちを伝えた。

14

14. タケはどうするか？

ナオコに携帯を取り上げられた後の、タケは、どんな行動をとり、どんな言葉を言うと思いますか。書いてください。

ナオコが「不安」という正直な気持ちを伝えた後の、タケはどんな行動をとり、どんな言葉を言うと思いますか。書いてください。

・アコの例と同じように「1時間目のワークシート」タケの気持ちになって生徒に書いてもらう。時間がある時は、生徒に、授業の中で、ワークシートに書いた言葉を読み上げてもらい、意見をクラス全体で共有していく。教員は「なるほど」「すばらしい」などの言葉で応答しながら、生徒を引きつけていく。

タケはどうするか？

ナオコに携帯を取上げられた後の、タケは、どんな行動をとり、どんな言葉を言うと思いますか。書いてください。

ナオコが、「大切」思われていない気だてで不安」という正直な気持ちを伝えた後の、タケは、どんな行動をとり、どんな言葉を言うと思いますか。書いてください。

目的：「お互いを大切にすることとは？」を教える。自分らしくあってよい事と、関係性の距離の持ち方を理解してもらう。この関係性は男女の事にも言えますが、友人同士にも当てはまります。例えば、健康的な友達関係を保つためには、いつも一緒にグループで行動しなくても良い事を理解してもらう。

15. お互いを大切にすることってどういう関係？

ピンクの枠の中は2人の世界を表しています。男性の周りの青い楕円と、女性の周りの赤い楕円は自分らしさを守る safety zone という物です。

不健康な関係に陥りやすい人は、人に合わせ過ぎることが多いため、safety zone があいまいなので、点線で示しました。

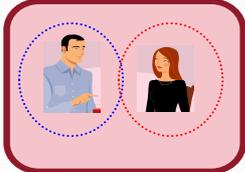
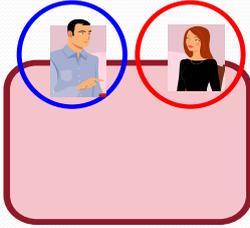
健康的な関係を持つことができる人は safety zone がしなやかで、強いので、太い実線で示してあります。2人の間で喧嘩などの混乱が起きた時、2人の世界は回転してしまうことがあります。健康的な関係を保っている2人は、自分らしさもしっかりと持っているため、物事にしなやかに対応ができます。

不健康な関係 2人だけの世界になって、恋愛を生活の中心にしてしまっている。外からの刺激を遮断しているため、暴力などの良くない事が起きた時に助けを求めることが難しい。

健康的な関係 2人の関係以外の色々なつながりを持っている事を表している。色々な人間関係に触れ合う中で自分らしさを作っていくことができる。

この図が、今日の授業の中で1番のポイント。DV、暴力の原因となってしまうのが、関係性です。この図は、男女の関係性と共に、友達関係に当てはめて考えてもらってください。この図の「健康的な関係」が築いていければ、「いじめ」は減っていくと思います。「いじめ」は指導や、注意や、いじめ防止法などの、罰では、生徒たちは、ギスギスしていただくではないでしょうか。いじめている側と称されている生徒たちも、納得がいかず、ますます、悪い空気になると思います。健康的な関係の持ち方を、理解してもらうまで、この図を説明してください。ほとんどの生徒が「なるほど、そう言われてみれば、そうかも」と言ってくれます。

➤ **お互いを大切にすることってどういう関係？**

不健康な関係	健康的な関係
2人だけの世界になって、恋愛を生活の中心にしてしまっている。外からの刺激を遮断しているため、暴力などの良くない事が起きた時に、助けを求めることが難しい。	2人の関係以外の色々なつながりを持っている事を表している。色々な人間関係に触れ合う中で自分らしさを作っていくことができる。
	

授業 16

目的：「暴力とは何か？」の理解

16. 暴力とは何か？

暴力の本質は、相手への支配（コントロール）。暴力は、怒りや衝動性で起こるものではなく、暴力という方法を選び、相手を威圧する行為である。

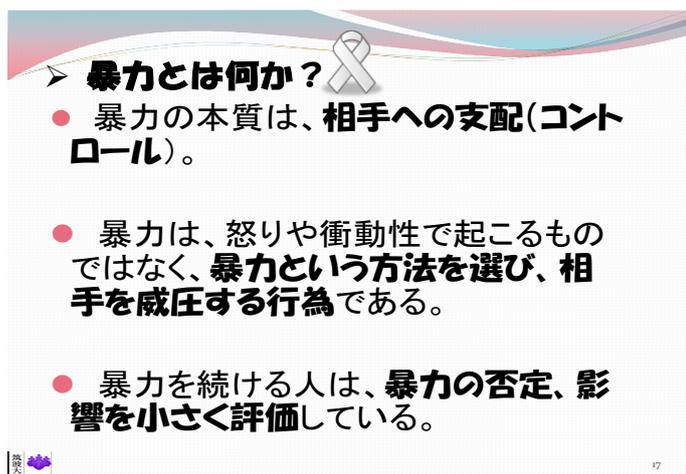
暴力を続ける人は、暴力の否定、影響を小さく評価している。

殴ったり、蹴ったり、叩いたりするなどの、体に痛みを与えられる事だけが暴力ではありません。

暴力を振るう人の目的は、相手を支配する事です。支配をするには、殴るなどの暴力が一番、効果があるため、それを手段として使っているのです。

あるDV加害者は言っていました。「暴力を振るえば、周囲が自分に、すごく気を遣うようになる。すごく偉くなった気がして、気持ちがいい。だから、暴力は、相手を支配するためには一番、手っ取り早い。」

みなさん、暴力を振るうような人のご機嫌を取らないでください。暴力を増長させるだけなのです。いじめをする人に、服従しないで下さい。「誰かが、いじめられていれば、自分がいじめに遭わなくて済む、暴力的な人に服従して、一緒にいじめていれば自分が守られる」なんて、思わないでください。「これって、暴力じゃない？嫌がらせ？いじめ？」など変だと感じた時は、多くの人で、「暴力だ」と言える環境を作っていきましょう。



➤ **暴力とは何か？**

- 暴力の本質は、**相手への支配(コントロール)**。
- 暴力は、怒りや衝動性で起こるものではなく、**暴力という方法を選び、相手を威圧する行為**である。
- 暴力を続ける人は、**暴力の否定、影響を小さく評価**している。

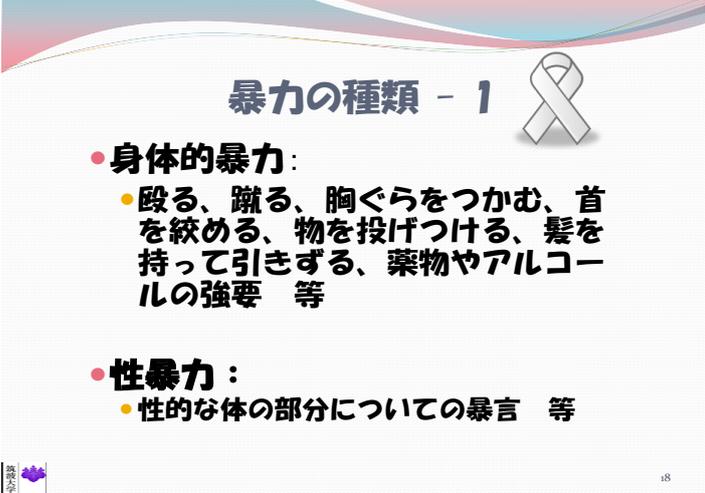
目的：4種類の暴力がある事。内閣府のHPに書かれているもので、全国調査からわかった結果である事を伝える。本当にDV被害者が経験している暴力の内容である事を伝える。

17. 暴力の種類 - 1

身体的暴力：殴る、蹴る、胸ぐらをつかむ、首を絞める、物を投げつける、髪を持って引きずる、薬物やアルコールの強要等。このような脅しの行為は、DVの被害者のほとんどが、経験しています。大学などで、一揆飲みをするように言われたら、断りましょう。これで亡くなる学生もいます。アルコール依存症になる事もあります。

性暴力：性的な体の部分についての暴言 等

(＊性暴力の部分は学校の意向で性行為の話なども入れてほしいと言われれば言葉で説明を入れても良いと思います。現状では、あまり触れない方が中学校では無難だと思います。)



暴力の種類 - 1 

- **身体的暴力：**
 - 殴る、蹴る、胸ぐらをつかむ、首を絞める、物を投げつける、髪を持って引きずる、薬物やアルコールの強要 等
- **性暴力：**
 - 性的な体の部分についての暴言 等

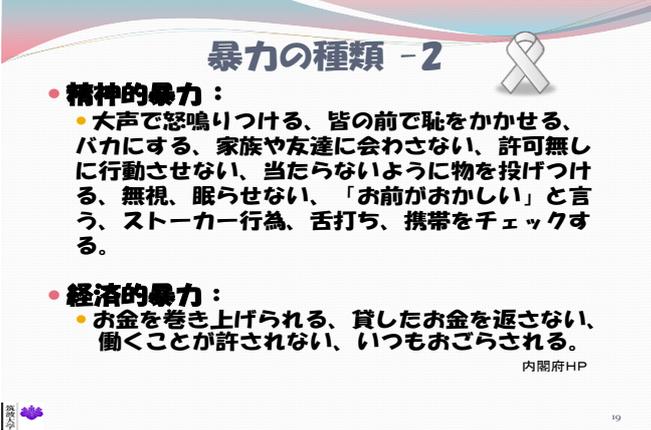
 18

18. 暴力の種類 -2

精神的暴力：大声で怒鳴りつける、皆の前で恥をかかせる、バカにする、家族や友達に会わさない、[友人や家族から隔離するために、友人や家族の悪口を言う事が多い] 許可無しに行動させない、当たらないように物を投げつける、無視、眠らせない、「お前がおかしい」と言う、ストーカー行為、舌打ち、携帯をチェックする。

経済的暴力：お金を巻き上げられる、貸したお金を返さない、働くことが許されない、いつもおごられる。

精神的な暴力の中で、DV 加害者に多く見られるのは、相手の友人の悪口をいう事です。例えば「お前の友達って暗い人が多いよね」家族の場合「お前の両親って、すごくケチだよ。あんなケチな人、初めてだよ」など、孤立させる方法を考えて、支配しようとします。



暴力の種類 -2

- **精神的暴力：**
 - 大声で怒鳴りつける、皆の前で恥をかかせる、バカにする、家族や友達に会わさない、許可無しに行動させない、当たらないように物を投げつける、無視、眠らせない、「お前がおかしい」と言う、ストーカー行為、舌打ち、携帯をチェックする。
- **経済的暴力：**
 - お金を巻き上げられる、貸したお金を返さない、働くことが許されない、いつもおごられる。

内閣府HP

目的：暴力のパターンの図。DV被害者の多くの方が、この図を知っていれば、未然に防げたのにと、言っていることを教える。

19. 暴力の車輪（DVのサイクル）

爆発期 では暴力がおこる。暴力を振るう人は暴力を行う事で、スッキリするために、その後、謝ったり、急に優しくなります。これを、**ハネムーン期**と言います。

しかし、その行為はイライラの**蓄積**になり、また、暴力が起きます。

暴力の質は、回を重ねる毎に大きくなり、また、すぐに優しくなる行為に入ります。そして、またイライラが蓄積されていきます。

これらのサイクルは、最初は1ヶ月に1回の暴力から、2週間に1回、1週間に1回、1日置き、など、ペースも速くなり、被害者はサイクルに巻き込まれて逃げられなくなります。

暴力により、無力感を植えつけられていくのです。

これはアメリカの心理学者 Lenore E. Walker 氏が考案した図式です。



目的：DV とは、暴力の中の1つ。体罰、いじめ、ハラスメント、傷害罪なども、暴力である事を教える。

20. ドメスティック・バイオレンス (Domestic Violence) とは何か？

Domestic Violence を略して「DV」と呼ばれることもある。Domestic とは「家庭内の」という意味で親しい関係の時に使われている。明確な定義はなく、一般的には「配偶者や恋人など親密な関係にある、又はあった者から振るわれる暴力」という意味で使用されることが多い。

・暴力を振るう人は、親しい関係になればなるほど、感情が強くなり、暴力の質が大きくなる事が多い。

(例)結婚すれば、落ち着くので、暴力は無くなると思ったら、反対にひどくなった。

・普通の人には親しい関係になればなるほど、優しい感情が強くなる。



ドメスティック・バイオレンス (Domestic Violence)とは何か？

- Domestic Violenceを略して「DV」と呼ばれることもある。Domestic とは「家庭内の」という意味で、親しい関係の時に、使われている。
明確な定義はなく、一般的には「配偶者や恋人など親密な関係にある、又はあった者から振るわれる暴力」という意味で使用されることが多い。
- ・暴力を振るう人は、親しい関係になればなるほど、感情が強くなり、暴力の質が大きくなる事が多い。
(例)結婚すれば、落ち着くので、暴力は無くなると思ったら、反対にひどくなった。
- ・普通の人には親しい関係になればなるほど、優しい感情が強くなる。

21

目的：DVは身近にも起こり得ることを、統計から理解させる。

21. DVの被害経験者

女性の29.1%(10人中3人)、男性の15.6%(10人中1.5人)が配偶者から暴力を受けたことがある。(2012 内閣府調査結果 5000人無作為配布、65.9%有効回収)

10歳代~20歳代で、女性は13.7%(10人中1.4人)男性は5.8%(20人中1人)が交際相手から暴力を受けた事がある。→暴力を受けたことにより、31%が「心身の不調が起きた」、15.7%が「夜、眠れない」、10%が「アルバイト、仕事、大学などをやめた・変えた」

(2012 内閣府調査結果 10代~20代に交際相手がいた1,949人 女性1,064人、男性885人対象) **常に最新の結果に更新する必要があります。**

心身の不調の中には、鬱状態になってしまう若者も多いです。また、せっかく、苦勞して第1希望の大学に入学しても、DVの加害者が同じ大学にいる事により、被害者が大学をやめた例もあります。また、せっかく希望の会社に入社できたのに、辞めざるを得なくなった例もあります。このような時は、DV防止法の保護命令などを使って、加害者が逮捕されるように、相談センターや周囲の人から知恵を得てください。

➤ DVの被害経験者

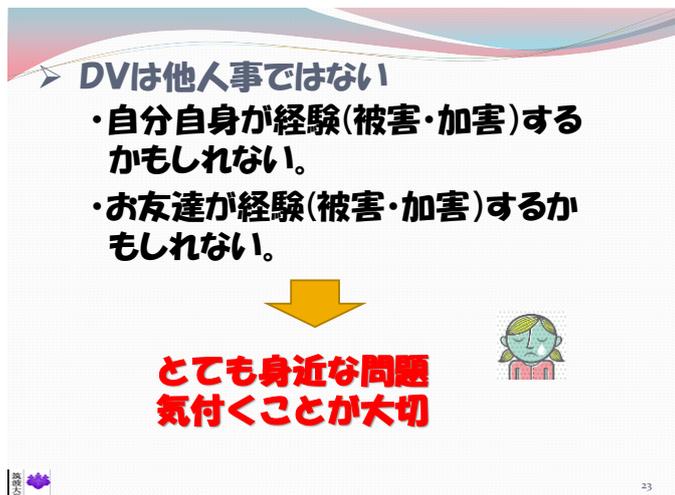
●女性の29.1%(10人中3人)、男性の15.6%(10人中1.5人)が配偶者から暴力を受けたことがある。(2012 内閣府調査結果 5000人無作為配布、65.9%有効回収)

●10歳代~20歳代で、女性は13.7%(10人中1.4人)男性は5.8%(20人中1人)が交際相手から暴力を受けた事がある。→暴力を受けたことにより、31%が「心身の不調が起きた」、15.7%が「夜、眠れない」、10%が「アルバイト、仕事、大学などをやめた・変えた」(2012 内閣府調査結果 10代~20代に交際相手がいた1,949人 女性1,064人、男性885人対象)

目的：暴力に「気付く」事が大切であることを教える。

22. DVは他人事ではない

- ・自分自身が経験(被害・加害)するかもしれない。
- ・お友達が経験(被害・加害)するかもしれない。「身近な問題。気付くことが大切」



➤ **DVは他人事ではない**

- ・自分自身が経験(被害・加害)するかもしれない。
- ・お友達が経験(被害・加害)するかもしれない。

↓

**とても身近な問題
気付くことが大切**



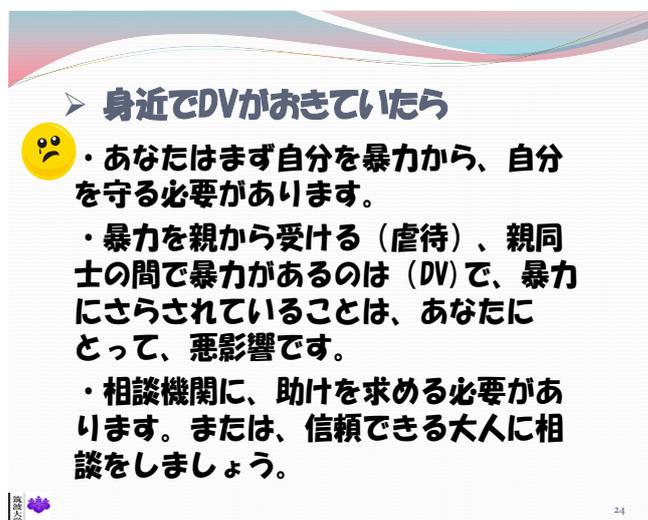
23

23. 身近でDVがおきていたら

あなたはまず自分を暴力から、自分を守る必要があります。

暴力を親から受ける(虐待)、親同士の間で暴力があるのは(DV)で、暴力にさらされていることは、あなたにとって、悪影響です。

相談機関に、助けを求める必要があります。または、信頼できる大人に相談をしましょう。



➤ **身近でDVがおきていたら**



- ・あなたはまず自分を暴力から、自分を守る必要があります。
- ・暴力を親から受ける(虐待)、親同士の間で暴力があるのは(DV)で、暴力にさらされていることは、あなたにとって、悪影響です。
- ・相談機関に、助けを求める必要があります。または、信頼できる大人に相談をしましょう。

24

目的：DVに気付いたら、まず、電話相談をする事を伝える。

24. DVの電話相談窓口

まず、電話で「どうすれば良いか」聞いてみましょう。

- ①より添いホットライン（DV相談） 24時間フリーダイヤル 0120-279-338
- ②内閣府DVナビ（相談機関の紹介） 0570-0-55210

内閣府の男女共同参画局のホームページも参考にして下さい。
その他の場所も別紙を配りますので、参考にして下さい。

DVの電話相談窓口 

・まず、電話で「どうすれば良いか」聞いてみましょう。

- ①より添いホットライン（DV相談）
24時間フリーダイヤル 0120-279-338
- ②内閣府DVナビ（相談機関の紹介）
0570-0-55210

内閣府の男女共同参画局のホームページも参考にして下さい。

25

困った時は1カ所ではなく、複数の電話相談にかけてみてください。周囲の人がDVで困っている時も同じです。思うように、援助が得られない時もあるかもしれません。そのためにも、あきらめずに、複数の場所に電話相談をしてください。公共の相談窓口が良いと思います。

DVの電話相談窓口



まず、電話で「どうすれば良いか」聞いてみましょう。



公的機関（内閣府男女共同参画局HPより）

- ・ DV相談ナビ TEL 0570-0-55210
- ・ 寄り添いホットライン（DV相談）TEL 0120-279-338
- ・ 女性の人権ホットライン（女性のみ）TEL 0570-070-810
- ・ 警察相談専用電話 #9110



民間相談機関（NPO法人全国女性シェルターネット東京ブロックのパンフレットより）

- ・ NPO 法人 FTC アドボカシーセンター（女性のみ） TEL 03-5608-0127
10:00~17:00（日、水は休み）
- ・ NPO 法人 女性ネット Saya -saya（女性のみ） TEL 03-6806-8684
月曜 18:30~20:30 金曜 13:30~15:30



行政相談窓口（NPO法人全国女性シェルターネット東京ブロックのパンフレットより）

- ・ 東京ウイメンズ・プラザ（女性のみ） TEL 03-5467-2455 9:00~21:00
- ・ 東京都女性相談センター TEL 03-5261-3110 月曜~金曜 9:00~20:00
- ・ 東京都女性相談センター多摩支所 TEL 042-522-4232 月曜~金曜 9:00~16:00
- ・ 東京都児童相談センター（電話相談室） TEL 03-3202-4152
月曜~金曜 9:00~20:30 土、日、祝日 9:00~17:00

目的：DVは子どもにも影響する可能性がある事を教える。

25. 問題点 子どもへの影響

DV や虐待にさらされた子どもたちは、暴力の被害者や加害者になる（虐待の連鎖）という研究もありますが、誤解しないで下さい。

「暴力とは何か」を知り、「お互いに尊重しあえる関係を多く持つことで、連鎖はなくなっていく」を強調。

産婦人科医であった、カナダの Kaufman と Zigler 氏は妊婦の女性を対象に大規模な調査を行いました。「暴力や虐待を受けた事がある」と答えた女性の 34% が子供を虐待してしまい、66% は自分の子供を虐待しませんでした。分かれ目は楕円の部分で、ココで、ケアを受けることにより、暴力の連鎖は防げるのではないかと思います。

問題点 子どもへの影響

DVや虐待にさらされた子どもたちは、暴力の被害者や加害者になる（虐待の連鎖）という研究もあるが、誤解してはいけない。

「暴力とは何か」を知り、お互いに尊重しあえる関係を多く持つことで、連鎖はなくなっていく。（上原、春原 2011）

暴力・虐待を受けた女性

子供を虐待する (34%)

子供を虐待しない (66%)

Kaufman & Zigler(1987) Yale University, Canada(1987)

筑波大学

26

 1 時間目のワークシート 

*** ツトムとアコの話**

1. ツトムがキレた後、アコは、どんな行動をとり、どんな言葉を言うと思いますか。書いてください。



2. ツトムが「自分が大切に思われていないような気がして寂しい」という正直な気持ちを伝えた後の、アコは、どんな行動をとり、どんな言葉を言うと思いますか。書いてください。



*** ナオコとタケの話**

1. ナオコがキレた後、タケは、どんな行動をとり、どんな言葉を言うと思いますか。書いてください。



2. ナオコが「自分が大切に思われていないような気がして寂しい」という正直な気持ちを伝えた後の、タケは、どんな行動をとり、言葉を言うと思いますか。書いてください。



*** 1 時間目の授業を受けて、感じた事や質問、印象に残った事や、感想を書いてください。**

[]

ありがとうございました。

2時間目 ロールプレイ -お互いを尊重できる会話を考える-

目的：

- ① 具体例から、男女ペアで会話をする事により、尊重できる会話を身につける。
- ② クラス全体で尊重できる会話を発言しながら作る。
- ③ 一人ずつ、尊重できる会話を書いてもらい、男女ペアになって、お互いの会話を発表してもらう事により、尊重できる会話の現実感を身につけていく。

26. お互いを尊重できる会話 下校の場面

中学1年生が考えてくれた会話です。何気ない言葉ですが、このような言葉が「尊重」だと思います。自然と出てくるようになると気持ちが良いので、クラス全員で会話をしてみましょう。

方法： power point の 27 枚目を生徒に見せます。これは、ある学校の中学1年のクラス全員で考えた「お互いを尊重できる会話」です。とても心温まる会話なので、みんなで読んでみましょう。青い部分は男子で、ピンクの部分は女子です。

女子に「会話をしてみて、どんな気持ちになりましたか？」と聞く。おそらく、「楽しんでおいで」と言われたら嬉しいなどの意見がでる。

男子に「どんな気持ちになりましたか？」と聞く。「自分も楽しんでおいでと言ってみよう」などの意見が出るでしょう。

その他、どんな意見も受容的に「なるほど」とか「いいですね」などの言葉かけをして、生徒の気持ちを引き出しましょう。

(補助の先生はこのときの生徒の意見をメモしておくといいと思います。)(5分程度)

➤ お互いを尊重できる会話 下校の場面

えっ、今日、ママたちと帰るの？

うん、図書館に行くんだ

楽しんでおいで。

行ってきます。

行ってらっしゃい。

26

27. お互いを尊重できる会話 下校の場面
これは中学3年生が考えてくれた会話

➤ お互いを尊重できる会話 下校の場面

えっ、今日、ママたちと帰るの？

うん、図書館に行くんだ

えっ、いいな。

勉強、してる？

うん、してる。

頑張ってる。

頑張ってる。

また、明日。

バイバイ。

方法：28枚目を見せて、これは中学3年生のあるクラスが考えた会話です。何気ない言葉ですが、お互いを尊重している微笑ましい会話です。

男子と女子に別れて、全員で声をそろえて会話をしてみましょう。

女子に「会話をしてみて、どんな気持ちになりましたか？」と何人かに意見を言ってもらおう。

男子にも「どんな気持ちになりましたか？」と聞いていく。「気持ちよい」とか短い意見であれば、「例えば、どの言葉を言われたときに気持ちが良くなりましたか？」など、意見を引き出していく。

(補助の先生はこのときの生徒の意見をメモしておくといいと思います。)(3分程度)

28. お互いを尊重できる会話 下校の場面

これは高校生が考えてくれた会話です。

➤ お互いを尊重できる会話 下校の場面

えっ、今日、ママたちと帰るの？

うん、図書館に行くんだ

あっ、そうか。

うん、そうだよ。

いいな。

一緒に行く？

やめとく。

うん、そうだね。

今度、一緒に行こう。

27

方法：29枚目を見せて、これは高校生のあるクラスが考えた会話です。

男の子の照れくさそうな雰囲気や上手に女の子が汲み取って、お互いを尊重している会話です。

男子と女子に別れて、全員で声をそろえて会話をしてみましょう。

女子に「会話をしてみて、どんな気持ちになりましたか？」と何人かに意見を言ってもらいましょう。

男子にも「どんな気持ちになりましたか？」と聞いていきましょう。

(補助の先生はこのときの生徒の意見をメモしておくといいと思います。)(3分程度)

29. 場面や、行く場所を変えて、尊重できる会話を考えてみよう。

➤ お互いを尊重できる会話 の場面

えっ、今日、ママたちと帰るの？

うん、 に行くんだ

33

方法：2時間目のワークシートを配る。

1. クラスのみんなで「お互いを尊重できる会話」を1つ作りましょう。

- ① クラス全員で場面を決めましょう。
- ② 女の子が行く場所を話合って決めましょう。
- ③ 「さあ、何て言う？」と生徒に問いかけてみる。誰かが、つぶやけば、「いいね」と言って、補助の先生に、パワーポイントに言葉を入力してもらおう。リアル感が出てきて、盛り上がってくる。発言が無いクラスの際は、答えてくれそうな人に、近寄って、「どうですか」と聞いていきましょう。

言葉を発してくれた生徒に「ありがとう、素晴らしいですね」とほめて、補助の先生に言葉をパワーポイントに入力してもらいましょう。(5分程度)

2. 「お互いを尊重できる会話」を自分自身で作ってみましょう。場面も、男の子が最初に言う会話もすべて、自由に決めてください。(10分～15分)

➤ お互いを尊重できる会話 の場面

発表

34

もし、机間を周って、生徒が、書けていないようであれば、場面を例示する。

- ① 借りた数学のノートを返す時
- ② マクドナルドに行く場面

さらに、難しいそうな時は、最初の言葉も決めてあげる。

- ① 「杉並さん、ノート、ありがとう」
- ② 「ミホ、何が食べたい？」

会話を考える時は1人で考えても良いし、周りの人と話合って良いことにする。ここで、お互いの「尊重」を考えてもらいましょう。

発表 (15分以上)

教員と補助の先生で見渡して、ユニークな会話をできるだけ多くの生徒の「尊重できる会話」を、パワーポイントの吹き出しに打ちこみ、生徒たちに見せましょう。(補助の先生にどんどん打ち込んでもらうと効率が良い)

作ってくれた生徒と、もうひとり異性でボランティアをしてくれる生徒をお願いして、前に出て、読んでもらいましょう。

2 時間目の授業は終了

ここで 2 時間目のワークシートに名前を記入してもらい、回収する。書けなかった人は、宿題にしても良いが、書けたところまででも、「尊重できる会話」になっていれば十分である事を伝えましょう。

時間が取れば、次の授業で全員分をパワーポイントに打ち込んで見せてあげる。さらに、印刷して、書いてくれた人の会話を、シェアしながら、「こんなところが好き」など、話合おうと良いと思います。

追加版 3 時間目

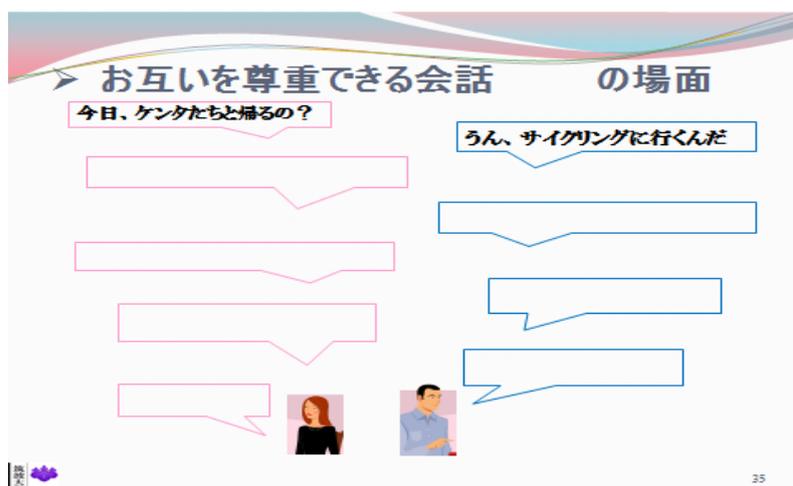
2 時間目で作成した「尊重できる会話」の全員分をパワーポイントの吹き出し形式で見せる。全員で、1 つずつ、男女でパートに分かれて、声に出して会話をしましょう。
(15 分程度)

3. つぎは女子が最初に発言する会話です。クラス全員で場面を決めて、「お互いを尊重できる会話」を完成してみましよう。「さあ、何て言う？」と生徒に、問いかけてみましょう。誰かが、つぶやけば、「いいね」と言って、補助の先生に、パワーポイントに言葉を入力してもらおうと良いと思います。

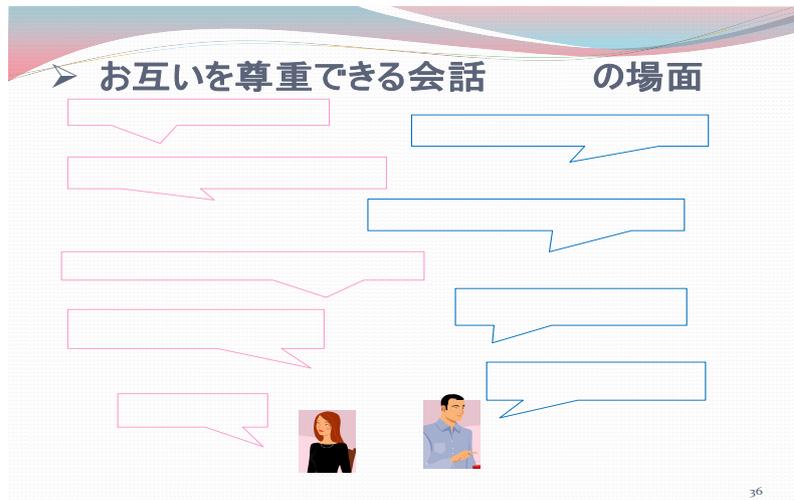
意見が出ないときは、上記 1. の方法と同様に、生徒を引き付けていく。(5 分程度)

方法：クラスのみみんなで「お互いを尊重できる会話」を 1 つ作りましよう。

- ① 場面を決めてください。
- ② 男の子が行く場所はサイクリングです。
- ③ 「さあ、何て言う？」と生徒に問いかけてみましょう。誰かが、つぶやけば、「いいね」と言って、補助の先生に、パワーポイントに言葉を入力してもらいましよう。リアル感が出てきて、盛り上がってきます。発言が無いクラスの際は、答えてくれそうな人に、近寄って、「どうですか」と聞いていく。
言葉を発してくれた生徒に「ありがとう、素晴らしいですね」とほめて、補助の先生に言葉をパワーポイントに入力してもらいましよう。(5 分程度)



4. 「お互いを尊重できる会話」を自分自身で作ってみましょう。場面も、女の子が最初に言う会話もすべて、自由に決めてください。(10分～15分)



もし、机間を周って、生徒が、書けていないようであれば、場面を例示しましょう。

- ① 重い荷物を運んでもらいたい時
- ② バレンタインでチョコを渡したい時

さらに、難しいそうな時は、最初の言葉も決めてあげましょう。

- ① 「荒川君、お願いがあるんだけど。。」
- ② 「あの、江戸川君。。。」

会話を考える時は1人で考えても良いし、周りの人と話合っても良いことにする。ここで、お互いに「尊重」を考えてもらうと良いと思います。

発表 (15分以上)

教員と補助の先生で見渡して、生徒の「尊重できる会話」を、パワーポイントの吹き出しに打ちこみ、生徒たちに見せましょう。(補助の先生にどんどん打ち込んでもらうと効率が良い)

作ってくれた生徒と、もうひとり異性のボランティアをしてくれる生徒をお願いして、前に出て、読んでもらう事ができるとさらに、良いと思います。

おわりに

生徒が作成する「尊重できる会話」は、とても参考になります。これらの会話を他の人達に伝えていってください。

また、このプログラムを聞いて、感じた事や、不安になった事、言いたい事を、その場で発言してもらうのも良いし、感想を書いてもらう事も必要です。また、相談したい事が出てきてしまったら、一番相談しやすい先生の所に相談に行ってほしいという事を、最後に生徒たちに伝えてあげてください。

(追加の時間がある時や、時間が余った時に使用)

3. つぎは女子が最初に発言する会話です。クラス全員で場面を決めて、「お互いを尊重できる会話」を完成してみましょう。

➤ **お互いを尊重できる会話** () **の場面**

今日、ケンタたちと帰るの？

うん、サイクリングに行くんだ

筑波大学

35

4. 女の子が最初に会話を始める形で、「お互いを尊重できる会話」を自分自身で作成してみましょう。場面も、最初の言葉もすべて自由です。

➤ **お互いを尊重できる会話** () **の場面**

36

* お互いを尊重できる会話を作成したり、発表をしたり、発表を聞いて、どのような気持ちになったか、教えてください。また、授業を受けての感想を書いてください。

()

37

人権尊重教育

人間関係を大切にするためのアンケートのお願い

本日は、みなさんに、人権尊重教育の一環として、人間関係を大切にしていけるための授業をさせていただきます。授業の中のテーマは、最近、社会問題となっている、ドメスティック・バイオレンス（DV）です。私たちは、若いみなさんに、ドメスティック・バイオレンスの被害者や加害者になって欲しくないと強く願っています。そして、このような、問題が、世の中からなくなって欲しいと願っています。そこで、予防をしていくためには、学校の授業の中で行っていく事が効果的だと考えています。

現在、プログラムを作成している段階で、本日はみなさんに、授業を受けて頂き、アンケートで意見を頂くことにより、より良い授業プログラムを作成していこうと思っています。

どうぞよろしくお願い致します。

注意事項

- このアンケートに答えるかどうかは、みなさんの考えで決めてください。どうしても答えたくない質問には無理に答えなくてもかまいませんし、途中でやめても問題ありません。
- みなさんの答えは、私たちの研究室だけの研究のために使います。正しい答えや、まちがった答えはありません。周りのお友達と相談をしたりしないで、自分の思ったことを答えてください。
- このアンケートへの記入および提出を持って、アンケートへの協力に同意をしていただいたこととさせていただきます。

この研究は筑波大学医学医療系医の倫理委員会の承認を得て、皆様に不利益のないよう万全の注意を払って行われています。

研究への協力に際して、ご意見ご質問などございましたら、気軽に実施責任者（森田展彰）、分担者（須賀朋子）にお尋ね下さい。

実施責任者：筑波大学大学院 医学医療系 准教授 森田展彰

TEL：029-853-3099, E-mail：nobuakim@nifty.com

実施分担者：筑波大学大学院 人間総合科学 院生 須賀朋子

E-mail：s1230360@u.tsukuba.ac.jp

人間関係を大切にするためのアンケート 1 回目



➤ お願い

このアンケートは、本日をふくめて3回、実施します。3回実施するのは、同じ人の答えが、今回と次回の調査でどのように変化をするかを明らかにするためです。そのために、今回と次回のアンケートが、同じ人が答えたとわかるように、あなたの誕生日と名前の一部について、教えてください。

以下の例を参考に、あなたの誕生日の日付と名前の1文字目の文字を記入してください。

5月1日生まれ 筑波 はなみ さんの場合

誕生日の日付は [1]、 名前の1文字目の文字は [は] なので

1
は

3月31日生まれ 茨城 あきふゆ 君の場合

誕生日の日付は [31]、 名前の1文字目は [あ] なので

31
あ

誕生日
の日付

名前の
1文字目

性別	男・女	中学・高校・()年	<div style="border: 1px solid black; width: 40px; height: 20px; margin: 0 auto;"></div>	<div style="border: 1px solid black; width: 40px; height: 20px; margin: 0 auto;"></div>
----	-----	------------	---	---

➤ あてはまる、ところに○をつけてください。

	あてはまらない	あまりあてはまらない	少しあてはまる	あてはまる
1. ドメスティック・バイオレンスという言葉は、知っている。	1	2	3	4
2. ドメスティック・バイオレンスとはどういうものなのか知っている。	1	2	3	4

資料 3

➤ 以下のそれぞれの項目について、当てはまる数字を1つ選び、○で囲んでください。

	そう 思わない	あまり そう 思わない	少し そう 思う	そう 思う
1. 暴力を振るわれるのは、振るわれる方にも原因がある。	1	2	3	4
2. 好きな相手なら、暴力を振るわれても、許してあげるべきだ。	1	2	3	4
3. ひどい言葉や、大声でどなる事も、暴力である。	1	2	3	4
4. 相手をおどすために、物を投げたり、わざと大きな音をたてるのは暴力だ。	1	2	3	4
5. 自分の考えを押し付けたり、無理じいするのは暴力だ。	1	2	3	4
6. 好きな相手に「いつも2人だけでいよう」と言われたら従うべきだ。	1	2	3	4
7. 男性は女性をつねに、リードするべきだ。	1	2	3	4
8. 好きな人には、嫌われたくないので意見を合わせるほうが良い。	1	2	3	4
9. 好きなら、何があっても、相手を最優先するのは普通だ。	1	2	3	4
10. 自分が傷つけられる事をされたら目上の人や好きな人にも No と言ってよい。	1	2	3	4

➤ 以下のそれぞれの項目について、あてはまる数字を1つ選び、○で囲んでください。

	あて はまら ない	あま りあ ては まら ない	少 しあ ては ま る	あ て は ま る
1. 常に人の立場に立って、相手を理解しようとしている。	1	2	3	4
2. 人の話を聞くときは、その人が何を言いたいのかを考えながら話を聞く。	1	2	3	4
3. 自分の違う考え方の人と話しているとき、その人がどうしてそのように考えているのかをわかろうとする。	1	2	3	4
4. 人と対立しても、相手の立場に立つ努力をする。	1	2	3	4
5. 相手を批判するときは、相手の立場を考える事ができない。	1	2	3	4

人権尊重教育

人間関係を大切にするためのワークシート



*ツトムとアコの話

1. ツトムがキレた後、アコは、どんな行動をとり、どんな言葉を言うと思いますか。書いてください。

[]

2. ツトムが「寂しい」という正直な気持ちを伝えた後の、アコは、どんな行動をとり、言葉を言うと思いますか。書いてください。

[]

*ナオコとタケの話

1. ナオコがキレた後、タケは、どんな行動をとり、どんな言葉を言うと思いますか。書いてください。

[]

2. ナオコが「寂しい」という正直な気持ちを伝えた後の、タケは、どんな行動をとり、言葉を言うと思いますか。書いてください。

[]

ロールプレイを見て。

1. 尊重のない会話（約束の場面）を見て、あなたは、どんな気持ちになったか、どんな事を感じましたか。

[]

2. お互いを尊重できる会話（約束の場面）を見て、あなたは、どんな気持ちになったか、どんな事を感じましたか。

[]

ありがとうございました。

人間関係を大切にするためのアンケート 2 回目



➤ **お願い**

以下の例を参考に、あなたの誕生日の日付と名前の 1 文字目の文字を記入してください。

5 月 1 日生まれ 筑波 はなみ さんの場合

誕生日の日付は [1]、 名前の 1 文字目の文字は [は] なので

1
は

3 月 31 日生まれ 茨城 あきふゆ 君の場合

誕生日の日付は [31]、 名前の 1 文字目は [あ] なので

31
あ

誕生日
の日付

名前の
1 文字目

性別	男・女	中学・高校・() 年	<input style="width: 60px; height: 20px;" type="text"/>	<input style="width: 60px; height: 20px;" type="text"/>
----	-----	-------------	---	---

➤ 授業を振り返って、以下の質問に答えてください。あてはまるところに 1 つ ○ で囲んでください。

	あてはまらない	あまりあてはまらない	少しあてはまる	あてはまる
1. 今日の授業は、将来、自分自身の役に立つと思う。	1	2	3	4
2. 今後も DV の授業があったら受けたいと思う。	1	2	3	4
3. DV とは自分が思っていた事より、身近に起こる事がわかった。	1	2	3	4
4. 今日の授業の内容(DV について)を、友人や家族に伝えたいと思う。	1	2	3	4
5. これからの生活の中で人とより良い関係を築くために「尊重」をしたいと思う。	1	2	3	4
6. あなたの身近で今日の話のような暴力を見たり聞いたりした事がありますか。心あたりがあれば、あてはまる所にすべて○をつけて下さい。()友人、 家族 () ()その他→[?]				

資料 3

➤ 以下のそれぞれの項目について、あてはまる数字を1つ選び○で囲んでください。

	そう 思わない	あまり そう 思わない	少し そう 思う	そう 思う
1. 暴力を振るわれるのは、振るわれる方にも原因がある。	1	2	3	4
2. 好きな相手なら、暴力を振るわれても、許してあげるべきだ。	1	2	3	4
3. ひどい言葉や、大声でどなる事も、暴力である。	1	2	3	4
4. 相手をおどすために、物を投げたり、わざと大きな音をたてるのは暴力だ。	1	2	3	4
5. 自分の考えを押し付けたり、無理じいするのは暴力だ。	1	2	3	4
6. 好きな相手に「いつも2人だけでいよう」と言われたら従うべきだ。	1	2	3	4
7. 男性は女性をつねに、リードするべきだ。	1	2	3	4
8. 好きな人には、嫌われたくないので意見を合わせるほうが良い。	1	2	3	4
9. 好きななら、何があっても、相手を最優先するのは普通だ。	1	2	3	4
10. 自分が傷つけられる事をされたら目上の人や好きな人にも No と言ってよい。	1	2	3	4

➤ 以下のそれぞれの項目について、あてはまる数字を1つ選び囲んでください。

	あて はま らない	あ ま り あ て は ま ら ない	少 し あ て は ま る	あ て は ま る
1. 常に人の立場に立って、相手を理解しようとしている。	1	2	3	4
2. 人の話を聞くときは、その人が何を言いたいのかを考えながら話を聞く。	1	2	3	4
3. 自分の違う考え方の人と話しているとき、その人がどうしてそのように考えているのかをわかろうとする。	1	2	3	4
4. 人と対立しても、相手の立場に立つ努力をする。	1	2	3	4
5. 相手を批判するときは、相手の立場を考える事ができない。	1	2	3	4

➤ 今日の授業で、感じた事や、感想を書いてください。

(遅らせて実施するクラス用)

人間関係を大切にするためのアンケート 2 回目

➤ **お願い**

以下の例を参考に、あなたの誕生日の日付と名前の1文字目の文字を記入してください。

5月1日生まれ 筑波 はなみ さんの場合

誕生日の日付は [1]、 名前の1文字目の文字は [は] なので

1
は

3月31日生まれ 茨城 あきふゆ 君の場合

誕生日の日付は [31]、 名前の1文字目は [あ] なので

31
あ

誕生日
の日付

名前の
1文字目

性別	男・女	中学・高校・()年	<div style="border: 1px solid black; width: 40px; height: 20px; margin: 0 auto;"></div>	<div style="border: 1px solid black; width: 40px; height: 20px; margin: 0 auto;"></div>
----	-----	------------	---	---

➤ 以下のそれぞれの項目について、あてはまる数字を1つ選び○で囲んでください。

	そう 思わない	あまり そう 思わない	少し そう 思う	そう 思う
1. 暴力を振るわれるのは、振るわれる方にも原因がある。	1	2	3	4
2. 好きな相手なら、暴力を振るわれても、許してあげるべきだ。	1	2	3	4
3. ひどい言葉や、大声でどなる事も、暴力である。	1	2	3	4
4. 相手をおどすために、物を投げたり、わざと大きな音をたてるのは暴力だ。	1	2	3	4
5. 自分の考えを押し付けたり、無理じいするのは暴力だ。	1	2	3	4
6. 好きな相手に「いつも2人だけでいよう」と言われたら従うべきだ。	1	2	3	4
7. 男性は女性をつねに、リードするべきだ。	1	2	3	4
8. 好きな人には、嫌われたくないので意見を合わせるほうが良い。	1	2	3	4
9. 好きなら、何があっても、相手を最優先するのは普通だ。	1	2	3	4
10. 自分が傷つけられる事をされたら目上の人や好きな人にも No と言ってよい。	1	2	3	4

資料 3

➤ 以下のそれぞれの項目について、あてはまる数字を1つ選び囲んでください。

	あてはまらない	あまりあてはまらない	少しあてはまる	あてはまる
1. 常に人の立場に立って、相手を理解しようとしている。	1	2	3	4
2. 人の話を聞くときは、その人が何を言いたいのかを考えながら話を聞く。	1	2	3	4
3. 自分の違う考え方の人と話しているとき、その人がどうしてそのように考えているのかをわかろうとする。	1	2	3	4
4. 人と対立しても、相手の立場に立つ努力をする。	1	2	3	4
5. 相手を批判するときは、相手の立場を考える事ができない。	1	2	3	4
あなたの身近で暴力を見たり聞いたりした事がありますか。心あたりがあれば、あてはまる所にすべて○をつけて下さい。	()友人、 家族 () ()その他→[?]			

ありがとうございます。

人間関係を大切にするためのワークシート



➤ お願い

以下の例を参考に、あなたの誕生日の日付と名前の1文字目の文字を記入してください。

5月1日生まれ 筑波 はなみ さんの場合

誕生日の日付は [1]、 名前の1文字目の文字は [は] なので

1 **は**

3月31日生まれ 茨城 あきふゆ 君の場合

誕生日の日付は [31]、 名前の1文字目は [あ] なので

31 **あ**

誕生日の日付

名前の1文字目

性別	男・女	中学・高校・()年	[]	[]
----	-----	------------	-----	-----

*ツトムとアコの話

2. ツトムがキレた後、アコは、どんな行動をとり、どんな言葉を言うと思いますか。書いてください。

[]

2. ツトムが「寂しい」という正直な気持ちを伝えた後の、アコは、どんな行動をとり、言葉を言うと思いますか。書いてください。

[]

*ナオコとタケの話

1. ナオコがキレた後、タケは、どんな行動をとり、どんな言葉を言うと思いますか。書いてください。

[]

2. ナオコが「寂しい」という正直な気持ちを伝えた後の、タケは、どんな行動をとり、言葉を言うと思いますか。書いてください。

[]

資料 3

ロールプレイを見て。

3. 尊重のない会話 (約束の場面) を見て、あなたは、どんな気持ちになったか、どんな事を感じましたか。

[]

4. お互いを尊重できる会話 (約束の場面) を見て、あなたは、どんな気持ちになったか、どんな事を感じましたか。

[]

➤ 授業を振り返って、以下の質問に答えてください。あてはまるところに1つ○で囲んでください。

	あてはまらない	あまりあてはまらない	少しあてはまる	あてはまる
1.今日の授業は、将来、自分自身の役に立つと思う。	1	2	3	4
2.今後も DV の授業があったら受けたと思う。	1	2	3	4
3.DV とは自分が思っていた事より、身近に起こる事がわかった。	1	2	3	4
4.今日の授業の内容(DV について)を、友人や家族に伝えたいと思う。	1	2	3	4
5.これからの生活の中で人より良い関係を築くために「尊重」をしたいと思う。	1	2	3	4

5. 本日の授業で、感じたことや、感想を書いてください。

[]

ありがとうございます。

ドメスティック・バイオレンス予防教育のためのアンケートのお願い



本日は、皆様に、最近、社会問題となっている、ドメスティック・バイオレンス（DV）についての、アンケートに答えて頂きたいと思っております。

私たちは、このような問題が、世の中からなくなって欲しいと願い、予防の方法を考えています。

本日は、18歳以上(高校卒業後)の皆様に、アンケートで意見を頂くことにより、DV予防教育への必要性と意識を検討したいと考えています。

どうぞよろしく申し上げます。

注意事項

- このアンケートに答えるかどうかは、皆様の考えで決めてください。どうしても答えたくない質問には無理に答えなくてもかまいませんし、途中でやめても問題ありません。
- 皆様の答えは、私たちの研究室だけの研究のために使います。正しい答えや、間違った答えはありません。
- このアンケートへの記入および提出を持って、アンケートへの協力に同意をしていただいたこととさせていただきます。

この研究は筑波大学 医学医療系 医の倫理委員会の承認を得て、皆様に不利益のないよう万全の注意を払って行われています。

研究への協力に際して、ご意見ご質問などございましたら、気軽に実施責任者（森田展彰）、学生分担者（須賀朋子）にお尋ね下さい。

実施責任者：筑波大学 医学医療系社会精神保健分野 准教授 森田展彰
教授 齋藤 環

TEL：029-853-3099

学生分担者：筑波大学大学院 人間総合科学研究科 ヒューマン・ケア科学専攻
社会精神保健学分野 3年制博士後期課程 院生 須賀朋子

E-mail: s1230360@u.tsukuba.ac.jp

➤ あなたの事について伺います。あてはまる所に、○で囲んでください。答えられないところは未記入で構いません。

性別	男性 ・ 女性		
年齢	18歳~19歳 ・ 20代 ・ 30代 ・ 40代 ・ 50代 ・ 60代 ・ 70代 ・ それ以上		
身分	大学生(医療・福祉・教育・工学系・理学系・人間系・人文系・体育・芸術・その他) 大学院生(医療・福祉・教育・工学系・理学系・人間系・人文系・体育・芸術・その他) 受験生・主婦・アルバイト・教員又は元教員(小・中・高・特支援・大学等)・ 常勤職・非常勤職・その他		
国籍	日本 ・ その他:国名を記入してください→()		
婚姻状況	既婚 ・ 未婚 ・ その他		
子供	あり ・ なし		
DVまたはデートDVの被害経験	あり ・ なし		
DVに関する授業や講習を受けたことがありますか？	ある ・ ない		
DVに関する勉強(本で調べる等)をした事がありますか？	ある ・ ない		

➤ あてはまる数字に1つずつ、○をつけてください。

	あてはまらない	あまりあてはまらない	少しあてはまる	あてはまる
1. ドメスティック・バイオレンスという言葉は、知っている。	1	2	3	4
2. ドメスティック・バイオレンスとはどういうものなのか知っている。	1	2	3	4

▶ あてはまる数字に1つずつ、○をつけてください。

	そう 思わない	あまり そう 思わない	少し そう 思う	そう 思う
1. 暴力を振るわれるのは、振るわれる方にも原因がある。	1	2	3	4
2. 好きな相手なら、暴力を振るわれても、あやまれば、許してあげるべきだ。	1	2	3	4
3. ひどい言葉や、大声でどなる事も、暴力である。	1	2	3	4
4. 相手をおどすために、物を投げたり、わざと大きな音をたてるのは暴力だ。	1	2	3	4
5. 自分の考えを押し付けたり、無理じいするのは暴力だ。	1	2	3	4
6. 好きな相手に「いつも2人だけでいよう」と言われたら従うべきだ。	1	2	3	4
7. 男性は女性をつねに、リードするべきだ。	1	2	3	4
8. 好きな人には、嫌われたくないので意見を合わせるほうが良い。	1	2	3	4
9. 好きなら、何があっても、相手を最優先するのは普通だ。	1	2	3	4
10. 自分が傷つけられる事をされたら目上の人や好きな人にも No とってよい。	1	2	3	4

	あては まらない	あまり あては まらない	少し あては まる	あては まる
1. 常に人の立場に立って、相手を理解しようとしている。	1	2	3	4
2. 人の話を聞くときは、その人が何を言いたいのかを考えながら話を聞く。	1	2	3	4
3. 自分の違う考え方の人と話しているとき、その人がどうしてそのように考えているのかをわかろうとする。	1	2	3	4
4. 人と対立しても、相手の立場に立つ努力をする。	1	2	3	4
5. 相手を批判するときは、相手の立場を考える事ができない。	1	2	3	4

	そう 思わない	あまり そう 思わない	少し そう 思う	そう 思う
1. DVは相手とのケンカが原因で起こる。	1	2	3	4
2. DVとは配偶者間(結婚している人)たちの間で起こるものだけをいう。	1	2	3	4
3. DVは恋人同士などの間でも起こる。	1	2	3	4
4. 女性から男性への暴力はDVではない。	1	2	3	4
5. DVは怒りで衝動的に起こるものではなく、暴力という方法を選んでいる。	1	2	3	4
6. DVの本質は、相手を支配することである。	1	2	3	4
7. DV被害は、身近で、誰にでも起こりうる事である。	1	2	3	4
8. DVの加害者は暴力を振るった後、謝る事もあるが再び暴力を振る事が多い。	1	2	3	4
9. DV予防教育の授業を、中学生や高校生の時に受けてみたかった。	1	2	3	4
10. DV予防教育を中学や高校の授業の中で実施した方が良い。	1	2	3	4

➤ 中学生・高校生を対象に試行した、DV予防教育には、次のような内容が含まれています。あなたが思うところに、1つずつ○をつけてください。

ドメスティック・バイオレンス (Domestic Violence) とは何か？

Domestic Violenceを略して「DV」と呼ばれることもある。Domesticとは「家庭内の」という意味ですが、親しい関係の人に、使われています。明確な定義はなく、一般的には「配偶者や恋人など親密な関係にある、又はあった者から振られる暴力」

という意味で使用されることが多い。暴力を振るう人は、親しい関係になればなるほど、感情が激しく、暴力の質が大きくなる事が多い。

（警察によれば、落ち着くまで、暴力は無くなると思ったら、反則にひびくこと。）

暴力の種類 - 1

- 身体的暴力：**
 - 殴る、蹴る、胸ぐらをつかむ、首を絞める、物を投げつける、髪を持って引きずる、薬物やアルコールの強要 等
- 性暴力：**
 - 性的な体の部分についての暴言 等

暴力の車輪 (DVのサイクル)

Lenore E. Walker

	い そう 思わ ない	あ ま り そ う 思 わ ない	う 少 し そ う 思 う	そ う 思 う
1. DVとは、どういうものなのか知りたい。	1	2	3	4
2. DVには、どのような暴力が含まれているのか知りたい。	1	2	3	4
3. DVのサイクル (暴力の車輪) について知りたい。	1	2	3	4
4. DVという事態に気付くにはどうすればよいか知りたい。	1	2	3	4

➤ あなたは、今、自分の事を、どのくらい大切に思いますか？「とても大切に思う」を10点、「全く大切に思わない」を0点としたら、何点くらいになるか、☺の上に×をつけてください。



➤ あなたは、今、自分の周りの人の事を、どのくらい大切に思いますか？「とても大切に思う」を10点、「全く大切に思わない」を0点としたら、何点くらいになるか、☺の上に×をつけてください。



➤ ここ数年、あなたは自分の生活に、どの程度、満足していますか？「とても満足」を10点、「全く満足ではない」を0点としたら、何点くらいになるか、☺の上に×をつけてください。



➤ あなたの原家族(生まれた家族)は、あなたにとって、どのくらい、温かい家族ですか？「とても温かいと思う」を10点、「全く温かくない」を0点としたら、何点くらいになるか、☺の上に×をつけてください。



* DV 予防教育について、提案、意見、質問がありましたら、ぜひ、書いてください。

ご協力、ありがとうございました。🙏

謝辞

本博士論文の指導教員を森田展彰准教授に、ドメスティック・バイオレンス予防に関する論文を指導頂き、深く感謝しております。女性ネット Saya-Saya の野本律子氏に「DV とアディクションと虐待を知っている森田先生を追いかけて研究してみなさい」と4年前に言われたことは正しかったです。また、副指導教員の斎藤環教授には投稿論文の段階から指導を頂き、「考察」の本質を教えて頂き、「研究とは何か」を考えさせて頂き、感謝申し上げます。

主査の徳田克己教授には丁寧に読んで頂き、赤字でたくさん指導を頂き、大変勉強になりました。副査の岡本智周准教授には必修科目のヒューマン・ケア科学方法論の授業を受けた時に、「研究とは何か、教育学とは」を考えさせてくれ、博士論文の審査をしてもらえるように頑張ろうと思っていました。笹原信一朗准教授には、本審査会で、これからの研究につながる前向きな励まし、DVの研究の必要性を助言頂き、感謝申し上げます。

また研究協力校の都立 A 中学・高校の元校長には快く介入研究を引き受けて頂き、この快諾がなければ研究が進まなかったと思います。また A 中学・高校の生徒の皆さま、教職員の皆さまに合わせて、感謝を申し上げます。

さらに質問紙調査に協力をしてくださいました現場の教員のみなさまにも感謝を申しあげます。

平成 26 年 12 月末日

須賀 朋子

本研究に至る研究業績一覧

【受賞】

2013 年度 公益財団法人 日本女性学習財団賞 奨励賞受賞

2014 年度 公益財団法人 性の健康医学財団賞 性の健康分野論文 受賞

【学術論文】

1. 須賀朋子・森田展彰・斎藤環: 原著) 中学生のための DV 予防教育プログラム開発と効果研究 思春期学 31(4) 384-393, 2013 査読有 平成 26 年度 性の健康医学財団賞受賞論文
2. 須賀朋子・森田展彰・斎藤環: 原著) 中学生・高校生への DV についての知識と考え方の実態 アディクシオンと家族 29(4) 244-251, 2014 査読有
3. 須賀朋子・森田展彰・斎藤環: 原著) 思春期世代を教育する教員の DV の知識と予防教育への考え 思春期学 32(2) p.265-271, 2014 査読有
4. 須賀朋子・森田展彰・斎藤環: 原著) 高校生への DV 予防に向けての介入研究 思春期学 32(4) 印刷中, 2014 査読有
5. 須賀朋子: 原著) 大学生・大学院生の DV の学習経験と予防に関する調査研究 性とこころ 6(1)106-116, 2014 査読有
6. 須賀朋子: 論文) 生徒 (中学・高校生) と教員のドメスティック・バイオレンスについての認識 日本教育保健学会年報 21, 39-44, 2014 査読有
7. 須賀朋子・森田展彰・斎藤環: 資料) 高齢女性のドメスティック・バイオレンスの認識と予防啓発に関する意見 日本高齢者ケアリング研究会誌 4(2), 40-47, 2014 査読有
8. 須賀朋子: 原著特集) DV につながる考え方-暴力を振られるのは振られる方にも原因が有るのか-性とこころ 5(2)179-183, 2013 査読無

【著書】

1. 日本女性学習財団、須賀朋子

2013 年度「日本女性学習財団賞」受賞レポート集学びがひらく 公益社団法人日本女性学習財団 p.36-47

ISBN978-4-88931-237-9

【国際学会発表】

1. Tomoko Suga: Elderly women's opinion of recognition and prevention awareness regarding domestic violence (DV). The 1st International Conference on Global aging, 2014.1 Tsukuba
2. Tomoko Suga, Nobuaki Morita, Tamaki Saitou: Effects of a Dating Violence Prevention Program for Junior high school students in Japan. The 4th Asia Cognitive Behavior Therapy Conference, 2013.10 Tokyo
3. Tomoko Suga: The intervention research on Domestic Violence prevention program for high school students. Tsukuba Global Science Week, 2014.9 Tsukuba

【国内学会発表】

1. 須賀朋子: 読み書き障害と診断された生徒への英語指導－WISC-III検査結果との対応－. 第10回日本教育保健学会, 2013.3 東京
2. 須賀朋子: 中学生・高校生のDVについての知識の実態. 第6回日本セーフティプロモーション学会. 2013.3 神戸
3. 須賀朋子: お互いを尊重し合う教育 中学生へのDV予防教育プログラムの作成に向けて. 第10回日本教育保健学会. 2013.3 東京
4. 須賀朋子・森田展彰・斎藤環: 高校生へのDV予防教育プログラムの研究. 第4回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会. 2013.5 仙台
5. 須賀朋子: DVに関する考え方の性差比較. 第5回日本性とこころの関連問題学会. 2013.6 東京
6. 須賀朋子: お互いを尊重し合う教育プログラム「DVとは何か」 - 高校生の共感性に着目をして -. 第32回日本思春期学会. 2013.8 和歌山
7. 須賀朋子: 大学生・大学院生のDVの認識の実態 - 性差比較と, 日本人学生と留学生の比較 -. 第24回日本嗜癡行動学会. 2013.11 群馬
8. 須賀朋子: DV被害者の実態－DV被害者支援団体で支援を受けている人と、受けていない人の比較－. 第7回日本セーフティプロモーション学会 2013.11 筑波
9. 須賀朋子: DVのない世界をめざして. 第3回筑波大学大学院研究フォーラム. 2013.11 筑波
10. 須賀朋子: ドメスティック・バイオレンスの認識に関する研究-被害経験者と非被害経験者の比較-. 第6回日本性とこころ関連問題学会. 2014.6 東京
11. 須賀朋子: 中学生へのDV予防啓発－授業後の自由記述意見の分析－. 第33回日本思春期学会学術大会. 2014.8 筑波
12. 須賀朋子: 理工系高校生のDVの知識の実態. 第8回日本セーフティプロモーション学会. 2014.11 山口宇部市

【外部資金】

ユニバーサル財団研究助成 2014年11月～2015年10月 代表者単独 ¥700,000